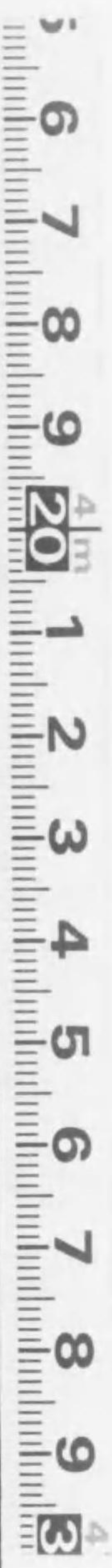


31-700
1200501246657

31

0



始



水櫃
 神田昌年
 海子
 一
 位



一九
 年
 林
 田
 昌
 年

283



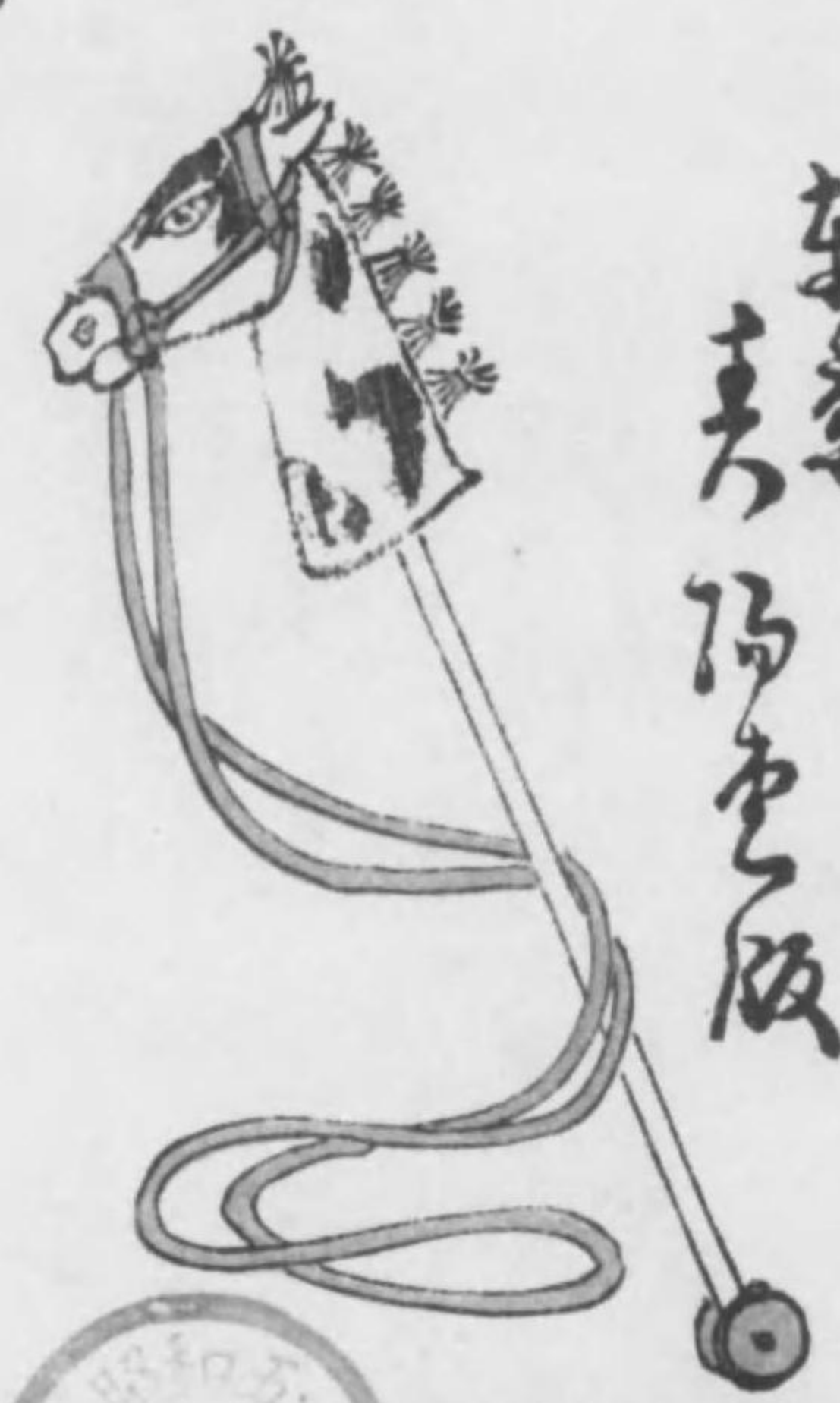
東海

道中

藤栗毛

輪鎌下添

三田村七喜の魚編



東京
青陽堂版





31-700

序文（の舊稿）

相添へ差出し候御断りの一札

拜啓仕候陳者一九膝栗毛御輪講長々の御道中無滞彌、御終局迄御一統御安着被成候由國文學の爲大慶至極に奉存候就ては先年貴命に依り相認置候粗詞一篇御約束に候へば兎も角も御祝儀の章までに呈上致候間何卒御一覽被成下度候乍併何分起稿後三ヶ年も相經ち候次第故本來の粗惡味更に一段と恐縮の餘り改作之上差出候が當然と存候へ共其後仔細有りて著述店相疊み舌代限の披露までも仕候今日所謂自繩自縛の體にて其儀難相叶乍失禮之至甚だ微臭き品を其儘進呈仕候段平に御寛恕被成下度候先は右御申譯仕度如此候 草々不宣

昭和三年十一月中旬

草々不宣

於熱海

柿

叟

鳶魚大人几下

序

文

一

散漫な遍歴譚を其主人公が同じ一人か又は數人かであることによつて關聯させて、一種の小説に仕立てたものは、内外とも幾らもあつた。遠くはオデッシー、ラマヤナ、西遊記、ドン・キホーテ、皆それであると云へる。近代のイギリスにだけでも、ロビンソン漂流記、ガリヴァーの島巡り、又滑稽を主としたものではフィールディングのがある、やゝ殺伐だが、スモレットのがある。ディッケンズの作中にも多少同系統に屬せしむべきものがある。けれどもわが一九の膝栗毛のやうな、絶対に無主張な、悉く後生樂な、思ひ切つてたわいのない滑稽遍歴譚は、どこの國の文學にもない。

膝栗毛にも時に軽い嘲笑はある。が、それは、要するに、一種の戲謔たるに過ぎぬもので、諷刺でもなければ皮肉でもない。勿論、何等かの理窟や訓誡が寓されてある筈もなく、徹頭徹尾無主張である點が膝栗毛の古今内外の文壇に獨歩する所以である。尤も、其諧謔が頗る低級で鄙陋であることは否まれない。けれども其の鄙陋も低級な惡趣味も、右の思ひ切つて無主張なたわいなさと全篇を貫く無邪氣な後生樂氣分とが、野中の清水がつい馬の糞を押し流すがやうに、洗滌してしまつてくれる。蓋し、それは、其當時としても、随分下卑た滑稽譚であつたらうにも拘らず、治く廣く上中下

に歡迎されて、今の所謂大衆文學の横綱格とも持囃されたのは、主として此特色の故であつたらう。

しかし、星移り物換つて、昔の大衆文學も今はもう一の古典となりかけた。

古典とは何ぞや？

手製の定義に曰はく、古典とは、つひぞ其第一ページをさへも覗いて見たことのない手合までが、少くも其書名だけは、或ひは其中の一二句ぐらゐは、兎も角も聞きかじつてゐるといふのがそれであると。

按ふに、今日では、膝栗毛とは抑も如何なることを意味するかをすら理會してゐない學生、いや、紳士、學者も、恐らく絶無ではないであらう。併し其人達と雖も、多分、彌次喜多といふ名だけは知り、且つそれが一種の極樂とんぼの異名である事だけは、多少意識してゐるであらう程に、それほどに彼等の名は俚諺化されてをり、随つて膝栗毛は立派に古典化されてゐるのである。

さやう、膝栗毛は今ももう歴とした古典である。寺子屋が大震災以來一齊にバラツク扱ひにされて、寺小屋と書かれるのが恒例となつたと同じく、道中はミチナカ、十

遍舎一九はジフヘンシャとも一キウとも讀まれ、海道が街道と書き替へられるのは、或ひは遠い未來でもあるまい。況んや江戸の通話や卑語、各地の方言や訛り、名物や制度や風俗や習慣に至つては、何が何やら一切皆目わけのわからぬことゝもならう。いや、もう既に大部分は模糊朦朧となつてゐる。萬葉や源氏とは違つて、註釋の先蹤が丸でないだけに、此方域の探險は局外者の想像以上の難事である。のみならず、今のうちに踏査しておかなければ、其困難が更に幾倍加するのを知れたことである。諸博雅が本輪講を起されたのは此理を先覺されたからであらう。而して其講は既に積んで二卷を成し、更に第三卷に及ぼうとしてゐる。一鄙事、一訛語をさへも等閑にはせず、各家が其蘊蓄を傾注し、博引旁證、精を極め微を盡されたのを讀んで見ると、今更に難解の語句の多いのに驚かされ、いよゝゝ以て膝栗毛の古典化を意識するのである。否、此講本其物が、其完成の曉には、國文學上の一種の古典と調法がられ、長く廣く斯學の後進を裨益するであらうと豫言するのを以て序文代りとする。

大正十五年冬日

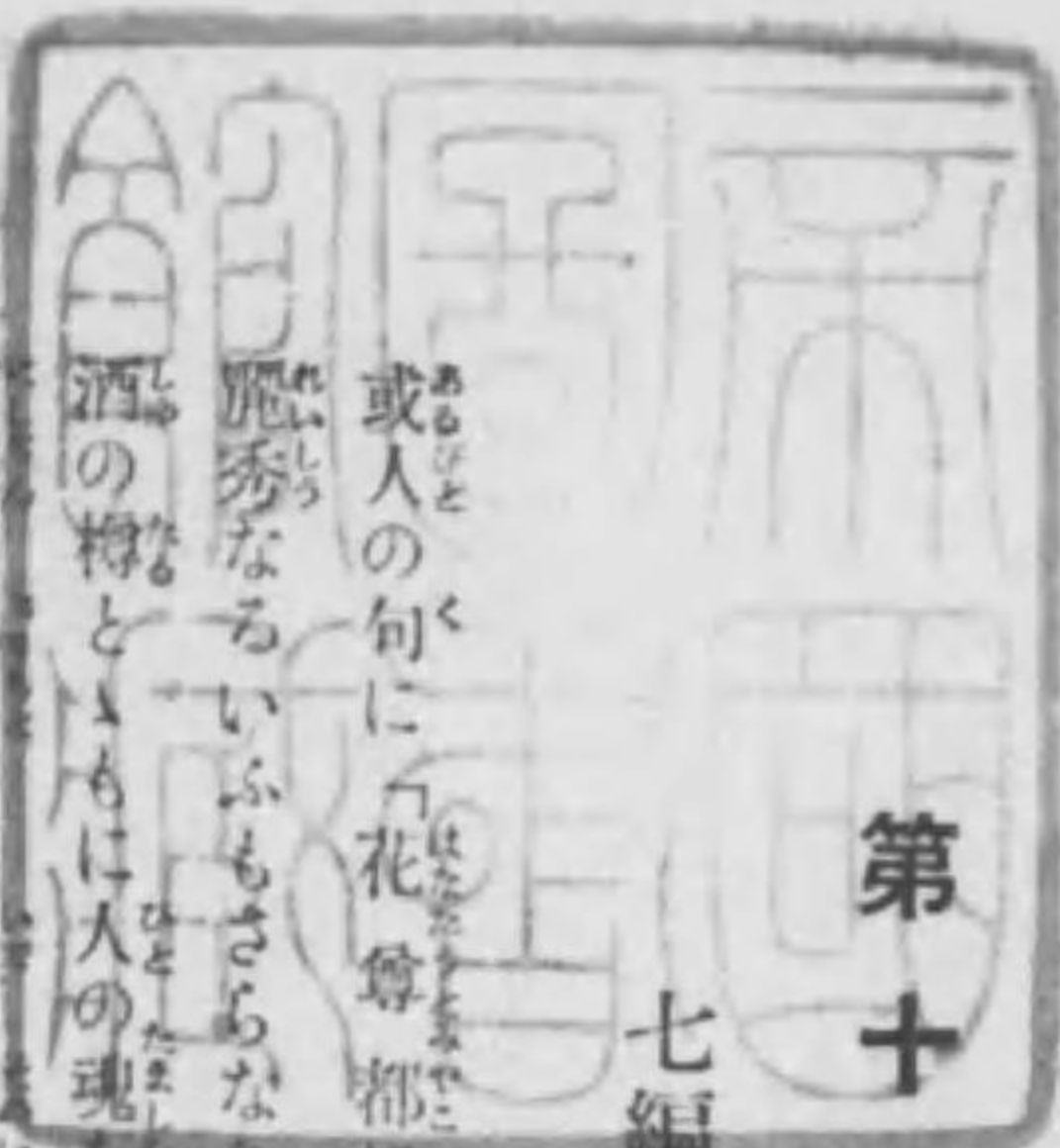
道 遙 人

東海
道中
膝栗毛輪講

第十四回

七編卷之上

鼠骨 若樹 竹清 仙秀
二葉 煙崖 鳶魚 共古



或人の句に「花尊都に本寺くかな」と詠たりしは、實にも寺院堂塔の廣大無邊にして其莊嚴麗秀なるいふもさあなり、殊に花の春、紅葉の秋は東西南北に名たる勝景の地ありて、加茂川名酒の樽とも人に魂を飛ばしめ、商人のよき衣著たるは他國に異にして、京の著だをれの名は、益西陣の織元より出、染色の花やぎたるは堀川の水に清く、釜元の白粉、川端のふしのこは雪を欺き、御影堂の扇、伏見の團扇に風匂ふ、香堂前の粽、丸山輕燒、大佛餅、醍醐の獨活芽、鞍馬の

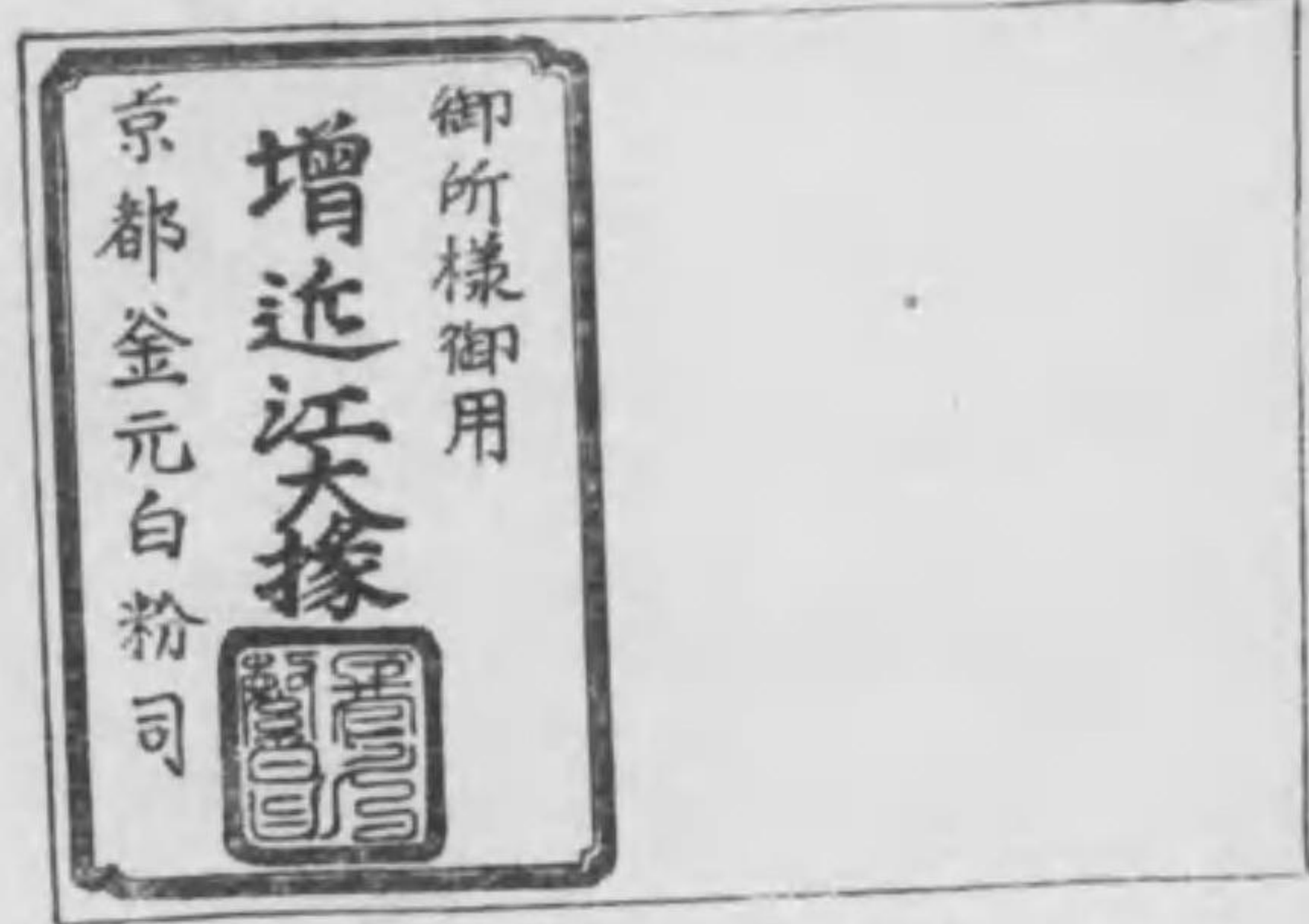
膝栗毛輪講

木芽漬は、庭訓往來にいちじるく東寺の蕪、壬生の茶は名物選に鼻たかし、其外名産奇製の品物
 あまたある都にたま〜入込む騒客の兩人、彌次郎兵衛喜多八とてぬけまのりの刷毛序にまぐれ
 出たれども、淀川の下り船に門違ひして荷物を失ひ、五條新地の一杯機嫌に早や香込して丸裸と
 なりたる、きた八の名にも似ず、同行の彌次郎兵衛が木綿合羽を借著せし程の仕合なれば斯る洛
 陽の地も面白からず、浮々と新地戻りの朝風身にしみ渡り五條の橋に差掛りたるに此所はいにし
 へ牛若丸の千人切し給ふ所とあれば、きた八惜々と打かたぶきて、

かゝる身はうしわか丸の裸にて辨慶じまの布子こひしき

○竹清 或人の句と云ふのは誰方ですか存じません。商人の好き衣著たるは他國に異にして京の著倒
 れの名は益々西陣の織元より出しと云ふのは、元祿會我物語の句に、まこと京は著て果て大阪は喰
 うて果るとかやとあり、又尾張の喰倒れ、堺の建倒れと云ふ諺もあるさうであります。そこで京の
 著倒れと云ふことになつたのでありませう。西陣はもと應仁の亂に西軍の陣所であつた處で、徒然
 草を見ても西陣では色々立派な織物が出来る。それから、染色の花やぎたるは堀川の水に清く、釜元
 の白粉、川端のふしの粉は雪を敷き、御影堂の扇、是は雍州府志に「扇は元と鷹司通城殿駒井氏製
 之、良賤常用之扇、小川井處々有之、然も御影堂の製に及ばず、其寺僧尼共にこれを造る」と

あります。伏見の團扇、是も名物でありませう。風匂ふ香堂前の粽、香堂前と云ふのは能く分りま
 せん。風匂ふとあるからは革堂の事ではないかも知れ
 ません。丸山かる焼、大佛餅、醍醐の獨活芽、鞍馬の



(標商)粉白の元釜

藤栗毛輪講

木芽漬は庭訓往來にいちじるくは能く分つて居る。庭
 訓往來の卯月十一日と云ふ處に「城殿、仁和寺僧作
 姉小路針、鞍馬の木芽漬、醍醐の烏頭布、東山の蕪
 西山の心太」と出て居ります。多分醍醐の獨活芽、鞍
 馬の木芽漬とございまして、次に出て居るのでありま
 す。夫から東寺の蕪、是は雍州府志には「西山の蕪菁
 東山の大根並に一双の珍味たり」と出て居ります。東
 寺の蕪も名物かも知れませんが、それから壬生の茶は名
 物選に鼻高しと云ふのは、私は其本を知らない。壬
 生茶と云ふのは東京でいふ京茶のことで、東京の京茶
 は葉の先の圓い奴で、他の國へ持つて行くと葉の先が



都 名 所 圖 會 所 載

四
 地味に依つて尖つてしまふと云ふ話がありま
 す。其外名産奇物の色々珍しい物がある。都
 に偶々入込んで来た騒客の兩人彌次郎北八が
 拔参りと申しても相済まぬが、其拔参りの事
 を書いた筆の刷毛序にまぐれ出て淀川の下り
 船が間違つて是は前篇に言ひました。荷物を
 なくして其から又京へ歸つて来た。それから
 今度足も前篇に五條新地で一杯機嫌の早呑込
 に北八は丸裸になつて一緒に行つた彌次郎の
 木綿合羽を借著したやうな始末で、どうも都
 へ出ても面白く無い、酷いことになつてうか
 うかと新地戻りの朝風が身に沁渡り五條の橋
 へ掛つた時に、此處は牛若丸が千人斬をした
 處だと云ふことで、或は此處では無いと云ふ

説もございますけれども、併し又辨慶が千人斬をしたと云ふ事にもなつて居ります。北八はさう云
 ふ古い話を聞いて、斯う云ふ風に裸にされて了つては、身は物憂いと云ふので、かゝる身は牛若丸
 の丸を丸裸と云ふ事に引掛けて、そこで辨慶の布子が戀しい。それだけです。

○若樹 冒頭の花尊の句は穴尊をもじつたのでせう。

○竹清 誰の句だか分らない。

○鼠骨 其内調べて見ませう。つまり一種の洒落ですな。

○若樹 そんなに古いものではないでせう。

○鼠骨 句の調子から言つても、新しいものでせう。

○若樹 商人の善衣著たるといふのは、古今集の序ぢやないか。

○竹清 成程さうです、古今集序か何かになんかそんな事を見た。近い處ぢや無い。

○鼠骨 業平の歌か。

○鳶魚 奇論だ。

○若樹 これは餘論ですが、古今集の貫之の序にある商人のよき衣著たるなどといふ譬喩は、私考
 へるに通常貫之が自分の頭腦から拈り出した様に解してゐるが、私は貫之が當時の諺を持つて来た

のだと思ふ。早い話が世の中はいつも月夜に米の飯と云ふ諺がある。蜀山人はそれを其儘世の中はいつも月夜に米のめしと上の句に仕立て扱又申しかねのほしさよと下の句を付けて一首の狂歌にしてゐる。さういふ風に貫之は當時の諺を旨く使つたので、貫之の頭腦から出たのぢやないでせう。

○鼠骨 さうでせう。

○若樹 起草の當時諺を持つて来たのが働きでせうな。

○鳶魚 さうでせう。此中の釜元の白粉と云ふのが分らない。

○竹清 白粉と云ふものは焼くものではないか。

○鳶魚 釜元と云はれるのは、何々釜元とか云ふのが名高いのはありませんか。

○竹清 ありません、下村などは京都の本家ぢやないですか、ア、云ふ家の事ぢやないですか。

○若樹 其前の西陣の織元より出し染色の花やぎたるは堀川の水に清く、と云ふのは此間京都へ行つて聞いて来たのですが、堀川は西陣の染物をやる處で、今も澤山堀川で水に晒すのださうで、堀川の水で晒す物は多く無地の物を晒す、堀川の水は染料を流すので始終汚い、夫から友禪だとか色物の仕上げは加茂川へ行つて晒す。

○鳶魚 川端のふしの粉。

○鼠骨 無論加茂川の川端でせう、川端と云ふ町があります。二條から三條までの間は皆、川端と云ふ。
○竹清 それは東の側ではないですか。



(標商)このしふの端川

○鼠骨 京都の東側を川端と云ひます。川端町と現になつて居るでせう。

○竹清 赤萬膏は川端赤萬です。

○鼠骨 疏水からズツと出て来た處が東川端です。それだらうと思ひ

ます。

○若樹 川端のふしの粉は文化板の京羽重大全の名職の部に御用御ふしの粉司、寺町通竹屋町上町川

端陸奥大掾とあつて、川端といふ姓です。

○鳶魚 ふしの粉。

○鼠骨 鐵漿を附ける五倍子です。

○若樹 雪を敷きは可笑しい。

○鳶魚 アレならばさうらしくない。

○鼠骨 白粉が雪を敷く方だ。

○竹清 上方のは白いのでせう。

○鼠骨 どう云ふ意味で雪を敷くでせう。

○二葉 糠の内へ入れた、五倍子を入れると色が白くなると云ふ話があります。

○若樹 此處はさういふ意味ではない、ふしの粉其物の色を言ふのでせう。

○竹清 伏見の團扇はどんな團扇ですか。

○鼠骨 一本の平竹、ア、云ふのです。

○若樹 京都寺町通川端陸奥の大掾と云ふのが、文化九年板の五畿内産物圖會の京都の部に在ります。



陸奥毛輪講

京都名所圖會拾遺所載

○鼠骨 成程、釜元白粉とある筈だから、處ぢやない。

○竹清 成程、伏見のは竹が平らになつて遊園扇式になつて居る。

○鼠骨 香堂前の粽。

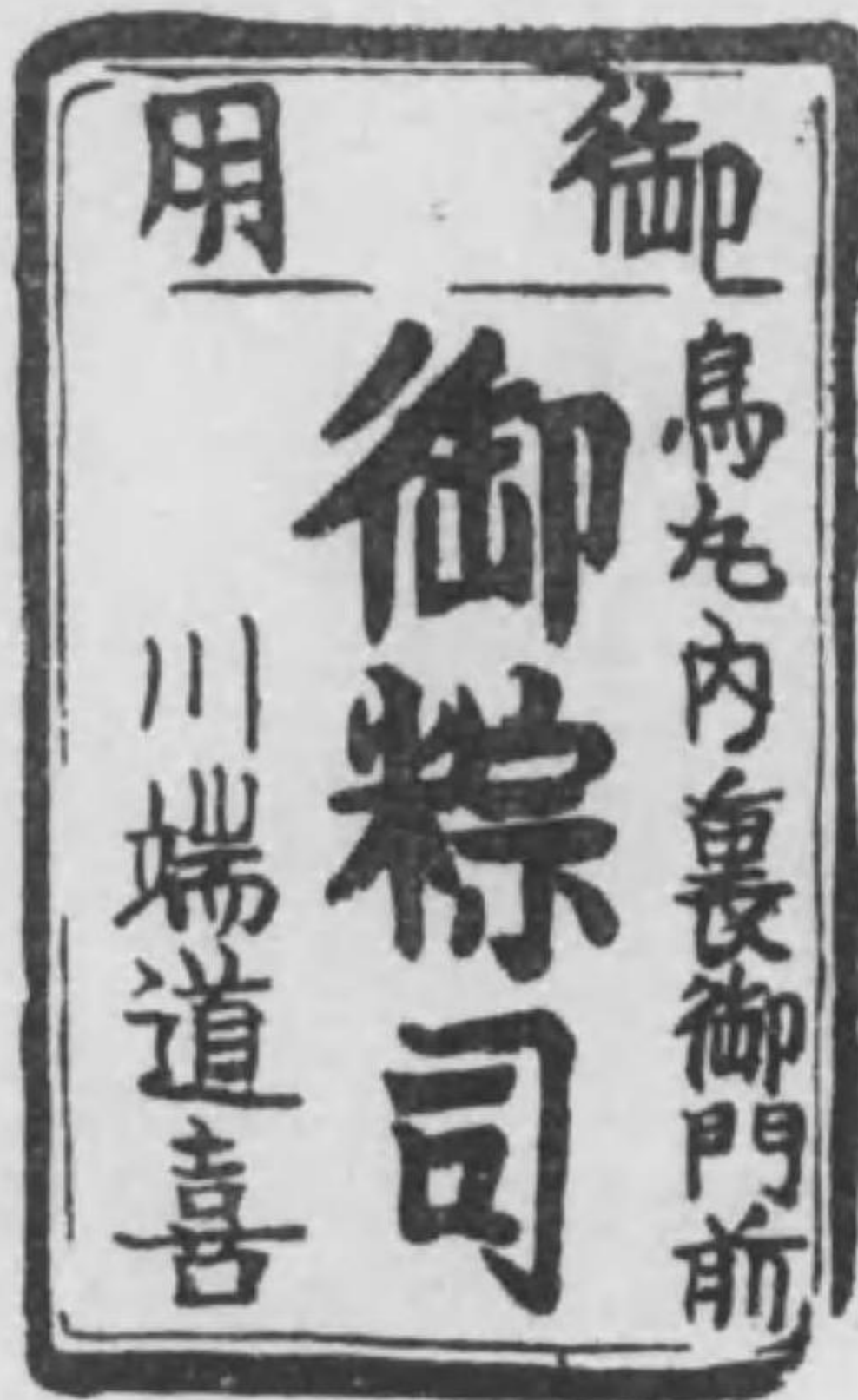
○若樹 是は革堂の宛字でせう。

○竹清 今彼處を氣を附けて見ると饅頭屋でね、粽屋は無い。

○若樹 有名な道喜の粽は此處で無い、是は何か間違ぢやないか、文化十年板の五畿内産物圖會を見ると東寺に蕪も無い、東寺では甜瓜と頭芋があります。

○煙屋 京都では西瓜天神と水火天神の例があるから、東寺は冬至の當字ではあるまいか。

○鳶魚 壬生菜はどうでせう。
○若樹 壬生菜は此處に在ります。



活芽、鞍馬の木の芽漬とある、これは古い名物です。鞍馬の木の芽漬といふのはアケビの葉を鹽漬にしたものだといふことです。

商標

○若樹 大佛餅は今でもあるが、圓山輕燒と云ふのはありますか。

○鼠骨 知りません。

○若樹 維新前には江戸にも根元は京都から来た圓山輕燒や大佛餅があつた。

○竹清 圓山輕燒は東京へ来て了つたけれども、京都にありますかね。

○鼠骨 知りません。

○若樹 狂言の宗論の中にも酬醒の獨

○二葉 文政版の食用通と申す本に「山女香」と云ふはアケビの若芽を煮染めたるものなりとも出て居ります。山女とは木通のことで又丁翁とも云ひますさうで、アケビの若芽を食用にしたのは古いことのやうです。これが鞍馬の木の芽だか何うだかは存じませんが、初め鹽漬にしたものを、後には醬油で煮染めたものではありますまいか。



五畿内物産圖會所載

○竹清 名物選はどんな本ですか。

○鳶魚 東海道名物選とか云ふ狂詩の本があつたやうに思ひます。

○竹清 其前ですが、丸裸となりたる北八の名にも似すと云ふ處は著ると云ふ處からでございませうね。

○鳶魚 さうでせう、北八と云ふから

著て居る、それが丸裸になつたと云ふ、大分例の拗ぢくつた句であります。
○鼠骨 東寺の蕪は天王寺の蕪と間違つたのでもありません。

膝栗毛輪講

○若樹 聖護院の蕪を思ひ違へてゐるのではありませんか。

○鼠骨 蕪と大根と同じですな、聖護院の蕪は。

○若樹 此七編(文化五年戊辰春板)の巻頭に左の如き作者の斷り書がある。

述 意

○洛陽の名所舊跡しるすにいとまあらず予若年の比浪花にありし時おり／＼上京して遊遊せしがそは十とせあまり以前のことなるゆへ悉く忘失し今此編にはやうやくその十がひとつあらわすのみ。

○礪にいへる如く僕浪花に七とせあまりも居住せしが花洛へは唯用辨の爲のみに登れば一覽の目をよろこばせしまでにて委しからず地理順逆もおほつかなし亦今の流行に照らしあはさばまわり遠くものゝおくれたることも多かるべし。

○五編目著述の前に予おもひたちて勢州に杖をせ參宮道中のおもむき今のむかしにかはれるあらしを粗あらはしたれば其心ざしやまず既に六編に及ばんとする時上京の念をおこし其儲とゝのひたるがはからずも類焼にあひてしからざればやむことを得ず予がむかし見しまゝをしるしてやみぬ故に今七編も右におなじければそれこれをさつし給はるべし。

○近比此書に類せし板本さまざま出たりしを予悉く求め得て配するにおの／＼滑稽の花實を備へて其おもむき尤ふかし恐るべし予が家の膝栗毛既に七編の老馬となりて他の駿足におくれんことをこや六篇にして筆をおくにしかじとおもひたりしに書林榮邑堂のあるじ連にすゝめて冊中の騷客が浪花の津にいたらん限りまであめよと乞ふによりつゝいなみかたくて終にこれを著するものならず。

東都通あぶら町のみどり橋

十返舎一九誌

これで見ると上方見物に出かける途になつて居て類焼の爲めに見合せたことが判る。夫れ故以前の記憶をたどつて書いた爲に随分間違もあるのは仕方がありますまい。

○共古 (講草より抄出して補ふ)京都是御承知の通り大分本寺があつて誓願寺は深草流義の本寺、干菜寺は六齋太鼓の本寺、知恩寺は鎮西四ヶ寺の本寺、知恩院は鎮西總本寺中の第一で其外いろ／＼の本寺があると思ひます。

京都は如何にも寺院堂塔の廣大無邊、殊に花の春紅葉の秋、申上ぐるまでも無く、嵐山の櫻、梅の尾の紅葉といったやうに、何れも東西南北に跨つて居ります。加茂川の銘酒、加茂川といふ酒の名

があつたと思ひます。加茂川銘酒の樽とともに人の魂をとほしめ、商人のよき衣きたるは他國に異にして京の著だをれ。京都人の著物は美しいものを著て居ります。これは京都の西陣の織元より染



五畿内物産圖會所載

凡製二白粉者入ニ水銀於釜一燒レ之故其本家謂ニ釜本一處々雖有レ之不レ及ニ洛陽之製一故稱ニ京白粉一
 其中袖岡越中某所燒爲ニ洛陽第一禁裏院中女子專用レ之とあります。川端のふしのこはゆきを
 あざむき、色の白いで、おはぐろに附けますふしのこ、御影堂の扇、伏見の團扇、香堂前の粽、丸



京都毛輪講

都名所圖會

山かるやき大俳も醍醐の獨活芽くらまの木芽漬等の名物を列ねてあるが、名物選といふ書を知りません。御教を願います。「ぬけまいりの刷毛序」に此言葉の起りに就て三説あります、四條家の畫風の横に刷毛を用ゐられますから其畫刷毛の序に御畫き下さいといふのと、又一は荷積問屋から荷を各店へ運搬するをハケルといふより其荷を届ける序にこれを届けて呉れといふをハケ序といふと、もう一つは經師屋の經師の序にやつてくれと云ふことです。是は重に糊刷毛から出たことです。丸裸となりたる北八の名にも似ず、著物を著たと云ふ事を北八に掛けて北八の名にも似すと云つたのです。五條の橋に差掛りたるに此處は昔牛若丸の千人切し給ふ處と、一體五條の橋で牛若が千人

斬をしたとは、私は存じませんが、恐らく間違では無いかと思ひます、辨慶が千人の太刀とらんとした事は室町時代の辨慶物語にあります。併し此時代の五條の橋は今の橋ではありません。初は松原通りに在り、秀吉の時此處に移されしと申します。かゝる身はうしわか丸のはだかにて辨慶じまの布子こひしき。此の狂歌の意は、かゝる裸身は憂し、牛若にかけしにて辨慶じまの布子著たならば寒いことあるまいと云ふのです。

斯て東に渡りて河原院の舊跡門出八幡も直通りとなして高瀬船の綱に引れて辿りゆく道すがら、北「思へば、詰らねへ事になつた、何卒古著屋でも見付けたら、どんなでも縮入が一枚ほしいが、彌次さんいゝ智恵は無へかの、彌「ナニ買すともいゝにしたがい、江戸つ子の拔参りに裸になつてけへるは當然だは、北「夫れだつて寒くてならねへ、彌次「そんなら幸こゝに湯屋がある、ナントちよつくり暖まつて行ねへか、北「ホンニこいつは奇妙く、彌次さんお先へ有難へと一日散にある格子造りの内の暖簾をくとりてすつと入かけ上つてはだかにならふとすれば、その亭主「モシノゝこなさん誰じやいな、何さんすのじや〜トとがめられて北八あたりを見るに湯やでなし、北「エ、いめへましい湯屋かと思つた、亭主「ハ、こらの暖簾にゆのじがあるさかい、それで洗湯かと思ふてじやの、アリヤ濟生湯といふ振出し薬の名じやわいな、彌「ホンニこいつは大笑ひ

だ、北「又一倍寒くなつた、いめへましいト小言云ながら行先にしみたれの古著や一軒あり、店先に古布子古あはせつるしあり、北八彌次郎兵衛をくどきて布子一枚求めんと件の店にたちてひねくり廻して、こんの布子をとつてすかし見て、北「モシこの布子はいくらだね、古著やの亭主「ハイ〜こつちやへお掛なされ、コレ茶もてこんかいな、お煙草の火もないわいな、赤のひとつちやと下んせ、北「イヤ茶も煙草もいりやせんコリヤア幾何だと云ふに、亭主「ハイ〜そりやきやうとうよムります、お安うして上ふわいな、小僧「ハイお茶あがりなされ、亭主「長吉そりやお温いじやないかいな、なぜあつて茶々あけんぞい、小僧「イヤお茶さまが朝は茶がゆじやさかい、茶々焚などおつしやつてで御座ります、それはきのふ焚たままの茶々ござりますわいな、彌「いかさま昨日のお煮花程あつてとんと河童の尻のよふだ、イヤ尻のついでに尾籠ながら御亭主さん手水に行きたい、おうらをちよつと、亭主「ハイ〜雪隠へお出かいな、小僧「雪隠は温ふはムりませぬ、能ふ沸いてじやあるぞいな、亭主「ナニ雪隠を誰が沸したぞい、小僧「それじやて〜今の先、私が参じたさかい、直ぐ行て見なされほつほと煙が出てじやある、亭主「エ、汚い事云ふ奴じや、北「そんな事より此布子はいくらだへ早く極てくんねへ、寒くてこたへられぬ、亭主「お寒くばもつと共方へ寄りなされ、そないによふ日がさしてじやわいな、昨日も著物買にお出たお方がコリヤきやうといぬ

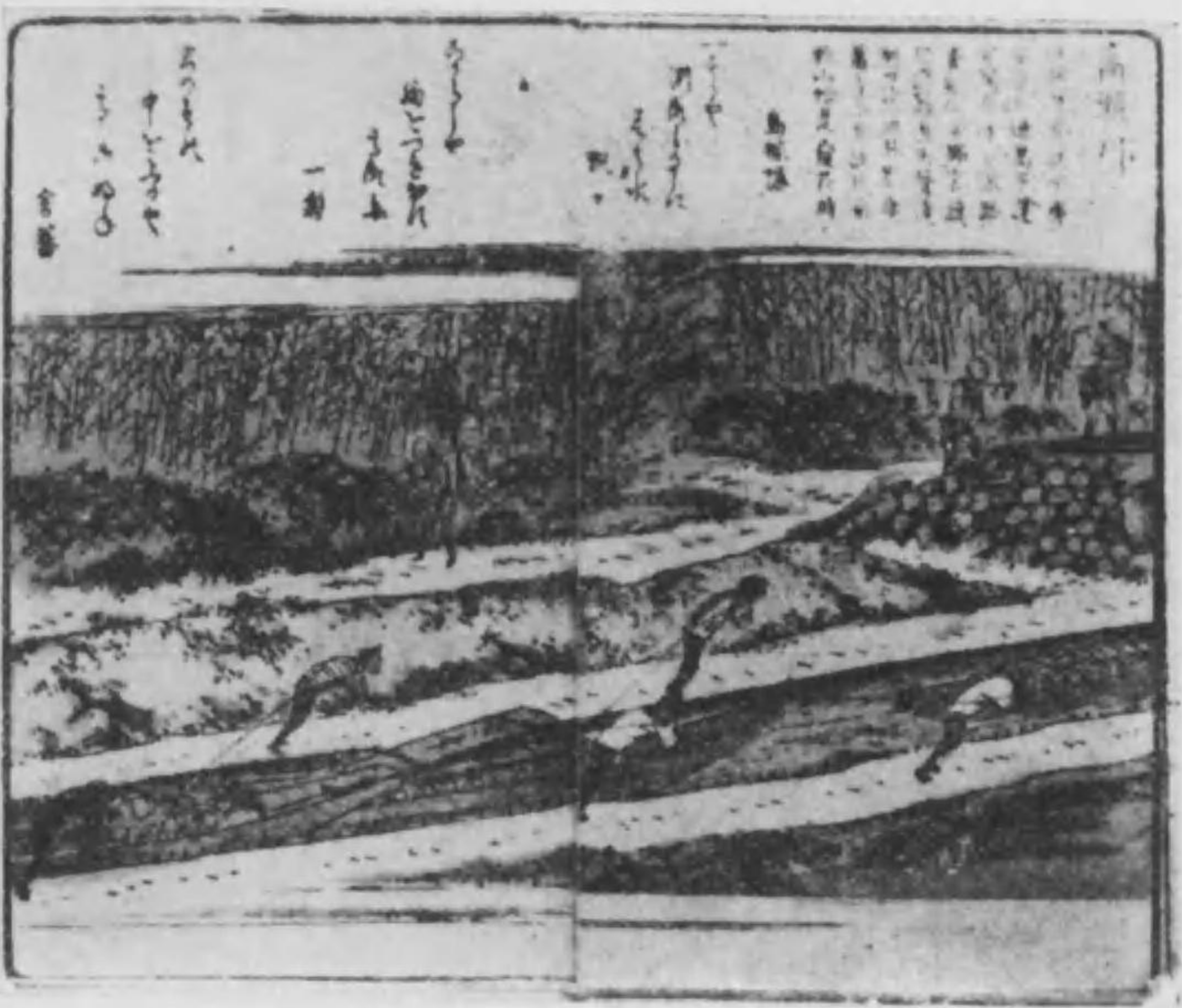
くひうちじやて、そこに一日ひなたほこしていなれましたが、其の御方がもふ著物買うて著いで
 もだんない、毎日此處の家へ日向ほこしに來わいなと此様に云てじやあつたわいな、北「エ、じれ
 つてヘコリヤア賣らねへのかどうだな、亭主「ハイ、かうじやわいな、北「安くしてくんねへ、亭
 主「ソノ紺のおひるじやなト算盤はつちく、三十五匁とんとぎり、じやわいな、北「高い、わ
 づちらは江戸の者だが古著は商賣柄でいくらも取扱つてゐるから、やるもんじやアねへ、本當の所
 を云なせへ、亭主「ハア御商賣柄とあればお前様も古著屋なされてかいな、北「イヤわづらは質商賣
 さ、亭主「質とあれば何かいな、お取りなさるのか、置なさるのかいな、彌「置くのが此男の商賣さ、
 北「それだから質に置時の算用からしてかゝらにやア買れやせぬ、此布子はとふしても一貫より外
 は貸めへから貳朱ばかりに買にやア損がいく、亭主「何いひじやぞいな、後家の質屋へ持ていても
 金壹分は物云はず貸わいな、北「飛た事をいふ如何して二分貸れやしやう、亭主「ナニ壹分つけん事
 はありやしよまいかな、北「夫れともお前じきに受なさるか、亭主「受るわいな、北「そふ云つても當
 にやアならねへ、夫よりか此間の股引の出入はどふしなさる、そして給の時貸もあるし、それも
 おめへ子供衆が脾胃虚して煩つて居るうへ、かみさまが疫病で死なれたけれと佛抱へて葬禮を出
 す工面が出来ぬとたつてのお頼み故、貸てあげたものを義理の悪い、いつその事此布子はその給



(載所本原)屋手吉

のかたに只取つて置やせう、亭主「ア、これ申とつとも厄たいもない事いふてじやわいな、わし
 が鳴がいつ疫病で死だぞいな、あたけたいな事はいはずはいなト亭主大きに腹立る、彌次郎兵衛
 おかしく、彌「どうも此男は口
 が悪くてなりやせん、了簡し
 なせへそして何角とめんどう
 な其の布子も一貫にまけて遣
 りなせへ、亭主「よござります
 朝商じや負けてあぎよわい
 なシャン、北「先は布
 子にありついたト彌次郎に代
 錢を拂はせ、かの布子をきて
 彌次郎兵衛に木綿合羽をかへ

し、此内を出ると、のれんを見ればとらやとあるにおもひよりて、
 和藤内三貫あまりの古布子老一くわんに求めこそすれ



高 瀬 舟

二〇

○仙秀 此狂歌は國姓爺和藤内の名の三官から出て、此三貫の價かどうも少いやうですけれども、是は何處からか引張つて居ますか。

○若樹 三十五匁で三貫になるでせう。

○鳶魚 そんな事でせう。

○仙秀 銀相場の關係で、三十五匁がザツと三貫になるさうであります。それだけの布子を和藤内の親の名の老一貫に求めたといふことです。虎尾とあるでの和藤内を引張り出したのでせう。高瀬船は當今の高瀬船と同じで、底の浅いのもございませう。

○鼠骨 高瀬船は、昔の疏水の曳船でせう。

○若樹 三條小橋、アレでせう。

○鼠骨 斯て東に渡りてと云ふと、一體五條橋を東へ渡つたのだらう。それに高瀬川は河より西にあります。それに拘らず、高瀬船の綱に引かれとあります。是も分らない。

○若樹 先刻も言つた様にこれも記憶違ひでせう。

○鼠骨 河原院の舊跡は六條に在ります。是は融大臣の舊跡でありますから是も可笑しい。是は六條河原ですからね。門出八幡は私は長く居つたが、行つたことはありません。一體此記事は非常に可笑しい。昔は斯うなつて居るのかと思ふ。

○共古 河原院の舊跡、五條橋通り萬里小路の東八丁四方にあり、融大臣の別荘なりし。後寛平法皇此勝地を東六條院と號せり。融公第三子祇陀林寺の木主仁康上人丈六の釋迦佛を安置し河原院と號せり。今五條橋の南、鴨川高瀬川の間に森あり、マガキの森といふが河原院の遺跡なりといふ。又門出八幡は松豊八幡とて五條橋西詰にあり。

○若樹 六條本願寺の内ではありませんか。

○竹清 八幡様は五條の橋の手前の御影堂の側に在ります。それぢやないか。

膝栗毛輪講

二一

○二葉 都名所圖會などで見ましても、御影堂の次に河原院の舊跡と云ふのがあります。五條橋の南と賀茂川と高瀬川の間には籬の森と云ふのがあつて、これが河原院の遺蹟であると書いてあります。

○鼠骨 それにしても東へ行つてはいけません。彼方は薬湯を提けて此方に荷を別にして歩く。

○若樹 濟生湯と云ふ薬はあることは有る。文化八年の京羽二重大全に、濟生湯三條東洞院東入、谷安映、とあります。處は違ひますけれども、兎に角濟生湯なるものは有つた。其時分は有名だつたのでせう。夫れから駿通に今でも古著屋は有るさうです。

○鳶魚 それから「ひなたほこ」は此前も困つたが、「ひなたほこ」でも「ひなたほこ」でも宜いが。

○竹清 日向ほこりですな。

○鼠骨 暖いと云ふ意味であります。

○鳶魚 成程ほこりするな。僕等の方では日向ほここと言ひます。

○竹清 お家様と云ふのは東京の何に當りますな。

○鳶魚 お上さんです、茶々だけは確かに江戸語でない、東京ではお茶と言ひます。茶々などゝは言ひません。

○竹清 お湯とは言ひますけれども「ブ、」とは言ひません、河童の尻。

○若樹 昨日のお煮花。

○鳶魚 煮た初だから。

○鼠骨 初でせうか。

○鳶魚 棒鼻とも言ひます。

○竹清 昨日のお煮花が今日はお煮末だ。

○鳶魚 今日はお煮尻かも知れません。

○竹清 河童の尻は他愛も無いことです。

○鳶魚 能く講釋師が言ひます。木ッ端の火だ、それを河童の尻と言つた。

○鼠骨 河童の尻は水の中で放るのだ。湯の中で尻を出したやうな勢ひが無い、ブーツと言はないと勢ひが無く無い。ブク〜云ふのです。

○若樹 彌次郎兵衛が手水にゆきたい、おうらをちよつとと言つてゐますが、江戸ッ子がお裏と言ひますか。

○鳶魚 江戸ッ子は言ひません。

○竹清 はどかりと言ひます。

○若樹 こゝは彌次郎が特に京語を使つたのでせうな。

○鼠骨 京都では雪隠が必ず裏に在ります。門口から一直線に通抜になつてゐる處からお裏と言ひます。下駄を穿き草鞋を穿いて居ても行ける。

○若樹 「もふ著物買ふて著いでもだんだない、毎日爰の内へ日向ほこしに來うはいなし」是は京の優長な所を言つて居るのだ。

○鳶魚 それから「だんだない」と云ふことは大事ないと云ふ處で能く淨瑠璃でも使ふが、京都言葉ですが、大事ないと云ふことをだんだないと本當に言ふでせうか。

○鼠骨 言ひますとも。

○竹清 「おひゑ」は木綿の縮入です。

○鳶魚 おひゑは上著のことらしい。慶長見聞集（關東衣服昔に替る事）愚老若き頃までは、諸人の衣裳木綿布子なり、麻は絹に似たればとて麻布を色々に染め、わたを入、おひへと云ふて上著にせしなり……又或る文に昔綿を多く入れて夜の者として夜著にする、是ををひへとも北の者とも名付けたり、故如何なれば裏に越後をするによりてなり、冬は北より來る、越後の國は北なり、其縁を取りておひへとも北の者とも名付けたり、又異名を布子とも縮入れとも云ふなり、とあります。

○若樹 「三十五匁頃とぎりノ、じやわいな」此時分どうですか、兩の相場は六貫位ですか。

○鳶魚 どの位でしたか、上方のは困りますな。

○若樹 そんなに違ひはしまし、狂歌で見れば見當が付きませう。三十匁を三貫とすればつまり六貫相場ですな。

○鳶魚 先づ一貫が十一匁五分ばかりに附くですな。

○鼠骨 「おひゑ」は坊さんから來たのぢやないか。

○鳶魚 さうすると一貫の方が安い。一分は十五匁だから、二朱は七匁五分ですな。一貫と言へば今の勘定にすれば十一匁五分、七匁五分位に買はなくちやならない。

○鼠骨 後家の質屋。

○鳶魚 大事を取つて貸さない。

○鼠骨 後家なら色男が行つたら貸しさうなものだ。

○鳶魚 一體後家婆は因業ものだ。質を受けて居る奴が質を置いて商賣にする者があるから、質は大さう儲かるやうな算用でせうが、餘程買った直より儲けて質を置かうと云ふのは随分酷い。マア商賣だと言ふからそんなものでせう。

○共古 後家の質屋とは寡婦となつて家業を續けるので用心して損の立たない様に、貸すにも内場にして金を出さぬ様にして居るからかう云つた。

○若樹 脾胃虚は。

○鳶魚 胃病でせう。

○鼠骨 消化不良消化機病。

○若樹 消化不良症だ。「あたけたいなこと云んすわいな」……一體是は季節は何時頃だらう。

○鳶魚 季節など構はない。

○竹清 季節は大方寒い時でせう。初から寒い時です。

○若樹 大阪へ行くと寒のやうになる。

○竹清 何でも熱いので何處を出て歩く處も無い。

○若樹 だから冬から春へ掛けてボカ〜熱いから春が熱いのだ。

○竹清 何でも今でも寒いことになつて居る。其前も寒い。

○若樹 大阪へ行つてからソロ〜熱くなる。

○鳶魚 それでも浴衣を洗つたのを幽霊と間違へて騒いだことがありませう。

○竹清 あの時でも何處かで慄へて居りました。

○鳶魚 成程河へ落ちて……。

○若樹 十年も十三年も掛つてから書くのだから忘れて了つて居る。

○竹清 一番先きに書く時と十年も経てば一九も上手になる。

○若樹 行つてから最近であれば始終頭腦にあるけれども、狂歌などやる人の頭腦にはそんな考へは無い。

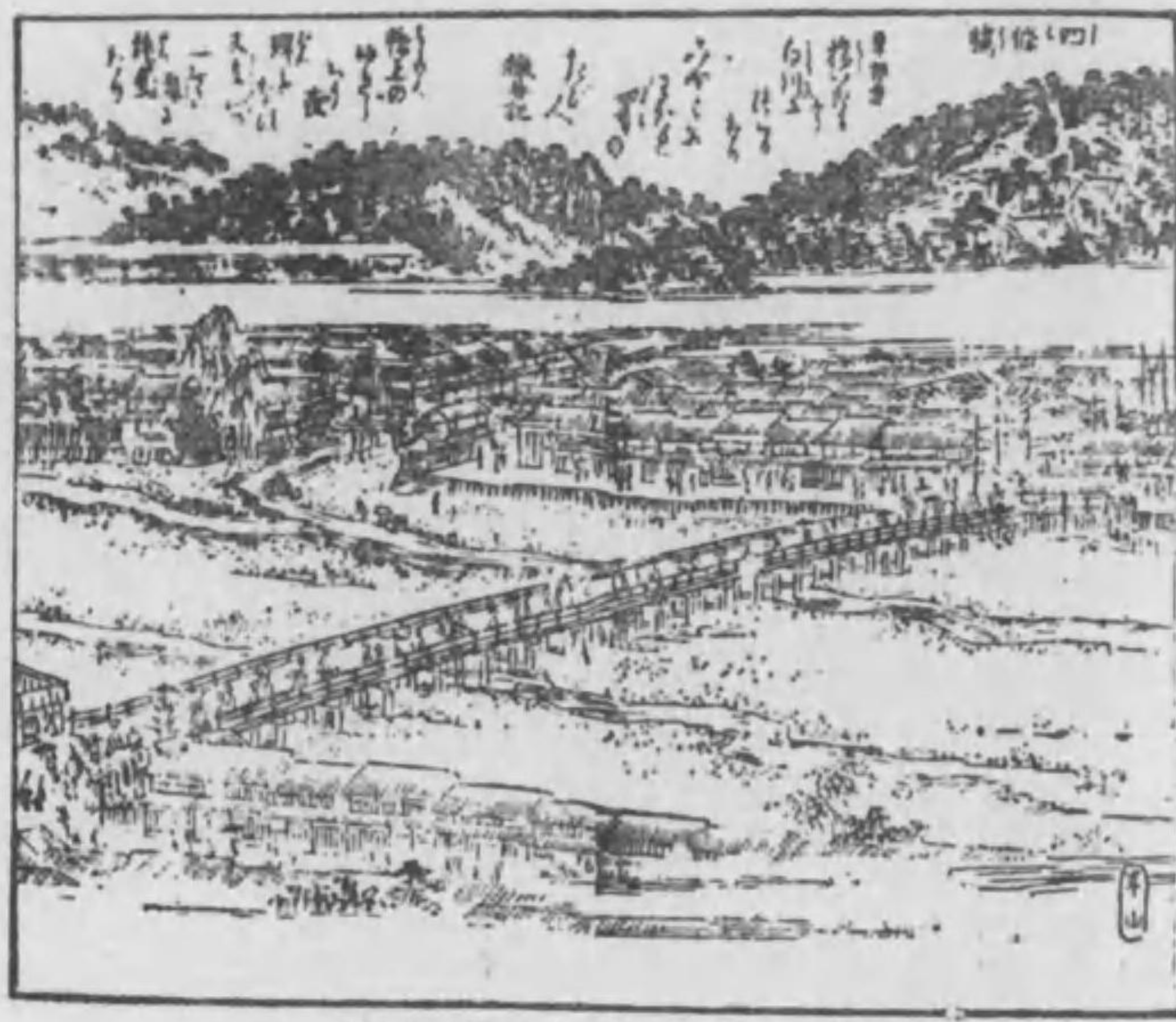
○鳶魚 季の無いのは其故でせう。

○若樹 季に構ふのは俳句だけです。和歌をやる先生もそれだから、狂歌をやる先生が軌道を外れて居るのは當前だ。季節は構はない。アレだけ暢氣だね。餘程觀察が單純だ。

○共古附記 虎屋とあるに思ひ寄りて「和藤内三貫あまりの古布子老一くわんにもとめこそすれ」とある狂歌は、戯曲國姓爺合戦に出る和藤内三官の事にて假作人物也。彼は肥前松浦郡平戸の漁夫、父は大明の鄭芝龍と呼べり。明帝を諫て入られず、去て日本に來り、名を老一官と改め、平戸の漁人の女を妻とし和藤内を生む。時に大明亂れて皇妹梅檀女、和に來る。和藤内父子これに仕ふ。後皇妹を妻に托し、明に入りし物語にて、彼地にて虎豹せしことあり。本文の狂歌、三官を三貫老

一官を一貫として狂せしなり。

それより北八はたちまちに元氣を得て、「ナント彌次さん凄じからう、古著屋奴をちやらほこではぐらかして覺貫に見落しは安いもんだ、見なせへしまだ袴垢も付ねへものを、彌紺の看板と見へておいらがお供のよふで丁度いゝの、北、時に此邊は何といふ所だの、こうてきに意氣な女がちら／＼するは、彌、ハ、ア紫帽子の野郎共か見へるから大方宮川町といふけんのだ、北、来るぞ、美しい妓共が来る、好い時おいらア著物を買てよかつた、萬更裸の上に其木綿合羽じゃア、彼奴等に摺違つても外聞が悪いト俄に襟かき合せて見へ張乍ら向ふより来るおやま藤子に摺違ひ通れば、一人のおやま振返り北八を見て、「初音さん見なませ、彼人さんの著物におつきな紋がついてじやわいな、ア、可笑ヲホ、ハ、ハ、初音、ホンニ阿房らしい人さんじやア、好かんのヲホ、ハ、ハ、と打笑ひ行過る、彌次郎兵衛も心付て「ヲヤ、ハ、ハ、北八手前の著物を見や、背中の横つちよに大きな紋所がくつ付ていらア、北、何處に、ハ、ハ、と振返り能く見れば、襦袢に染たる布子ゆへ、ちよつと見ては知れぬとも日當へ出ると大きな紋所あり、ハ、ハ、とすいて見ゆる、北、コリヤア大變々々、彌、ハ、ハ、ハ、襦の方には鯉の瀧登りが見へるから這奴帳のはぐらかし物だな、北、エ、古著屋奴が飛だ目に合しやアがつた、道理で安いと思つたふんのめして来よふ、彌、ナニうちやつて置やれ、皆手前が籠



四條橋(京みやげ所載)

棒から起つたことだ、先は商賣だもの仕方がねへ、北、エ、思々しいト眞面目になりて、眩きながら四條通に出れば名にし負ふ川東の生粹、祇園町の繁昌は兩側の芝居櫓太鼓を打まじへ、てんからてんからの音勇ましく狂言の名代看板華やかに對の派手模様著飾りたる東西の木戸番彌辛聲にて「サア、評判じや、ハ、ハ、今が三五郎の腹切じや、ハ、ハ、此跡があら吉と友吉が所作事評判々々々々と呼立る、江口で火なほといふは京大坂にては皆女なり、北八彌次郎兵衛が袖を引いて、女、モシナおまいさん方一幕見てお出んかいな、北、いかさまナント彌次さん京の芝居もひととき見やうじやアねへか、

彌「おもしろからう女中いくらで見せる、女よござりますわいな、わたしがどふなとするさかい
マアお出なされ、ト二人を両方の手にひつぱり引つれて芝居へはいり、二階にあがると棧敷番來
り二人を向ふ棧敷のまへがはへ入れる。

○二葉 古著を買つて北八忽ち元氣づきまして、古著屋を胡魔化し一貫に負けさせたは安い物だらう
と得意で居まする。彌次郎は、紺の看板を着て居るやうだ、丁度己の御供のやうだと、擲擲ひつゝ歩
きまする時に、意氣な女が彼方から來るので北八は好い氣になる、彌次郎も紫ばうしの野郎共が見
えるから宮川町見當だと申しました。紫帽子は役者の女形が頭にのつけて居ますものですから、大
方此邊は宮川町の見當であらう、芝居小屋の近くになつたので此様者が往來するのだらうと云つた
のでせう。其内に段々娼妓や藝者のやうな者に摺違ふと北八は例のおすましを遺る、女共は北八の
著物が可笑しいのでクツクツ笑ふのに氣附いて彌次郎が能く見ると幟のはぐらかし物、染返しの購
著ものであると云ふので北八も大さう怒つたが、仕方がなくブツ／＼言つて四條通りへ出ると四條
の河東で賑かな處、祇園町の繁昌、兩側は芝居に役者から仕送る派手な模様の著物を着て東西の木
戸番が鐵杖を出して評判々々と言つて客を呼込んで居る、其呼聲が今が三五郎の腹切ぢやく、
三五郎と云ふのは名高い嵐三五郎、其の跡が嵐吉と友吉の所作事と申す、嵐吉は嵐吉三郎、友吉は藤

川友吉といふ女形で其時分京都で一流の役者です。古くは烟草をのむに火繩で喫み劇場内でも火繩
を賣りましたもので、其後江戸では劇場で烟草盆を用ゐるやうになつても、之れを火繩と稱して居
ましたから、之れを賣る出方などを火繩と略して申しましたので、其の出方も江戸では男がやつて
居りますけれども、京大阪では女が其役をして居る。北八彌次郎は其女に引かれて芝居に入る、此



紫帽の子郎

方で云ふカツバですな。二階の棧敷、向う棧敷の前側と云ふから二階棧敷の前船と云ふ處へ放り込まれたのでございませう。

○鳶魚 宮川町と云ふのは今。

- 鼠骨 ありませんね。
- 鳶魚 芝居が有りますか。
- 鼠骨 イヤ女郎屋がある。

講 栗毛 猿 輪

○鳶魚 紫ほうしの野郎共が見えるといふと、昔は宮川町に男色もありましたか。

○二葉 祇園と續いて居るのでせうから、俳優どもも居たのぢやありませんか。

○鼠骨 川端に近い方で、四條から五條へ鴨川へ沿うて居る南北の町で、祇園町は東西の町です。宮川町は川縁を北四條の橋から南、それから東は祇園町と斯うなつて居ります。

○若樹 宮川町に蔭間でも居たものでせう。

○鳶魚 居たらしく見えます。此處には古い處ぢや、宮川町に鞍馬女と云ふやうな醜業婦が澤山居つた。アンニヤが居つたけれども此時分に男が居つたと見える。紫ほうしとありますから男色が居たでせう。

○鼠骨 男色も居たですが古くから安女郎が居たですな。

○鳶魚 此處では兩方居たことで無いといけない。妓ともあるから兩方居たことで無いと拙いね。

○若樹 「ちやらほつこ」

○竹清 是は山中先生に……。

○鳶魚 紋のかんばん、是は能く講釋師が仲間の形装を紺看板の梵天帯と云ふ、アレでせう。上へ著る物ですな。

○鼠骨 「ちやらつほ」と云ふものが有つたのぢやないか、阿呆陀羅經みたやうなもの……。

○鳶魚 それから木戸番のはで模様、此仕著は東京では立女形がする事になつて居つたさうだが、上方ではどうですか、それからモウ一つは上方で以て所作と言ふでせうな。

○二葉 是は私は分りません、所作とは言はないやうです。

○鼠骨 振事と言ひます。

○鳶魚 成程さうだな、此時分中賣殊に烟草盆や酒杯扱ふ奴は、火繩と云つたですな、火繩番衆と言つた。それを略して火繩と言ひますかな。

○二葉 此時代も江戸言葉で言つたかどうか分りません。

○若樹 今から十五六年以前迄は、京都に此芝居の引込み女があつたさうです。

○二葉 京都の方では女が附いて來ます。此の女を何と申しますか。

○鳶魚 茶ノ子、相撲場では茶ノ子と言ひはしないか。

○鼠骨 我々はやはり仲居と言ふがな。

○二葉 茶ノ子は仲賣と……。

○鳶魚 「京の芝居も一ト切見やうぢやねへか」

○二葉 一幕と言ひさうなものだ。

○鳶魚 此「ト切」は確かに上方語だね。

○若樹 モウ少し前に無かつたかね。

○竹清 此役者はチヨイと見て置きましたけれども、それは三代目嵐三五郎、雷芝、それから二代嵐吉三郎、璃寛、文政四年に五十六で死んだとあつたと思ひます。藤川友吉は能く分りません。

○二葉 三五郎は三代目ですな。

○竹清 さうです。

○鳶魚 嵐は有名な奴だな。

○竹清 是は扇松さんの領分だ。

○若樹 「兩側の芝居」今は南座一つだけです。京の四季のそして櫓の差向ひと云ふ文句はこれを云ふので南北對して居ります。

○煙崖 都繁昌記には、四條橋東大劇場舊有三座、寛政年間毀一一座、作三雜肆云々、路次其門爲三南劇場、在東隣、而滿三數軒、者爲三北劇場とあります。

尤も幕の内にて中賣商人聲々に「みづから宇治やま」餛飩頭よいかいな、「茶アあがらんかいな

茶々どふじやいな、「番付繪本」、彌「豪氣に大入だ、しかし江戸の芝居の半分でもねへ、北ア、退屈だ、一杯のみたくなつた、彌「おらア腹がへりまの大根だ、菓子でも買つて喰ふ、商人「みづから宇治山、北「何た手づからうつちやる、勝手にさつせへ、商人「餛飩どふじやいな、北「こいつが一番分つてゐる、コレ餛飩頭三ツ四ツくんなせへ、商人「ハイ、三文ヅ、で御座ります、隣棧敷の見物、「コレ餛飩頭屋さん、どうしたもんじやぞい、此方の辨當へしつぷしじや、商人「ハイ、お許しなされ、彌「アイタ、、豪氣に足を踏だ、商人「ハイ、是はモシちとお許しなされ、北「コリヤどふじやアがる、人の頭の上を金玉を引摺つて通りやアがる、エ、汚ねへ、隣棧敷の見物、太郎兵衛「チ、權兵衛さん、何をかうておるでたぞいな、權兵衛「太郎兵衛さん待てじやある、俺今彼處の棧敷では氣味味いもの喰じやさかい、ソレ見てゐて遅なつたわいな、サア、此様なもんじやと竹の皮包を出す、太郎兵衛「ハア、鯖のすもじかいな、コリヤきよとい、その飯は辨當の代りにして、肴は割して酒の下物にさんせ、夫がよいわいな、權兵衛「さよじや、竹の皮は持いて草履の鼻緒たてるわいな、イヤ時に一盃やろかいな、と小さな猪口を取出し、風呂敷に包し徳利より注で呑む、北八是を見て小聲になり「彌次さん見ねへ、甘さうに飲をるが羨ましい、彌「エ、忌々しいことを言ふ男だ、北「エ、お坊さん、お餛飩一つ上やせうと、己が食ひ残した餛飩一つ、隣棧敷

の子供にやる、是にて脚を付て酒をのふといふ下心なり、太郎兵衛「コレハお有難ふ御座りますわいな、北「お前方ア好い物をあがりなさる、太郎兵衛「お前も御酒は好かいな、北「左様々々飯よりは好物さ、太郎兵衛「ソリヤ好いお楽しみじやわいな、権兵衛「さんも一つ戴こかいなヲト、コリヤ好い酒ぢやな、権兵衛「さよじやホンニお隣のお客御退屈じやある、是れなと一つあがらんかいなと茶碗を差出す、北八手に取より早く戴きて、「ハイ有難う御座りやす、太郎兵衛「しかし冷はせめばぬるい茶なり、北「エ、茶だそふなベツベツ、太郎兵衛「おぬるなつたじやある、北「とてもぬるい序にどふそ是へ其徳利のをうめて下さりませ、太郎兵衛「これはしたりコレ見なされ斯様になつたわいなと徳利を逆にして見せる、彌「ハ、業晒しな、北八小聲に「忌々しい餛飩一ツ棒にふつたとぶつ／＼口の内に小言云ひ乍らふくれてゐると、此内樂屋にて拍子木「カッチ／＼、見物「イヨ口上さまア、口上「とうざい／＼、拍子木「カッチ／＼と此内口上も濟み幕の内にて、太鼓「てん／＼てれつくてん／＼、拍子木「カッチ／＼カチ、ハ、ハ、三味「ツ、テン／＼／＼。

○鳶魚 「みづからは菓子昆布を結んだので、それへ砂糖を附けたのだと聞いて居ります。それから「うち山」と云ふのはどんなのか分りません。番附繪本／＼この中賣の賣聲ですが、是は東京で

は繪双紙番附と言ふ、番附繪本とは言はぬやうです。上方とは違ひませう。それから「おらア腹がへりまの大根だ」是は練馬の大根を拗つたのでせう。それから「水からうじ山」と言ふものだからそれを地口的に「何だ手づからうちやる勝手」にさつせへ」と言つたらしい。それから竹の皮は持つて參つて草履の鼻緒をすけると、鯖のすしの上の方の魚をはがして酒の肴にする、斯う云ふ事は細かい事を言ふ積りで書いたものでせう。それから餛飩を隣の子供にやる、處で是にて足を付けると云ふのは關係を持つこと、傳手を拵へると云ふことです。

○若樹 引繫りを拵へることせう。

○鳶魚 其足で、東京でも足など云ふ例は遊廓、花柳方面に悪足を拵へると云ふ、情夫でも出来ると思ふ、宜しく無い方に悪足が附くと言ふ「茶屋の土瓶を北八に渡せばもつけな顔して」は不思議な顔などといふやうな工合に使つてありますが、「もつけ」と云ふ言葉が分りません、是は御教へを願ひます。「業晒し」は前に出て居ります。「棒に振た」も前にあつたやうであります。先づ私の氣の附きましたのはそんなものです。

○竹清 「もつけ」はもつけの幸ひと云ふことです。

○鳶魚 さうなんでせう。北八が受取つて、是は難有い、思遣りのある人だと思つて受取つたのでせ

う。さうすると「もつけ」の語原が分りません。

○煙崖 「もつけ」の幸ひは盲龜の浮木から来たのではないですか。

○若樹 一番初に、「ごうぎに大入だ、然し江戸の半分でもねへ」是で江戸ツ子の負け惜しみを遺憾なく振廻したのですね。

○鳶魚 芝居の大きさは東京の方が大きうございませう。

○鼠骨 さうだらうか。

○若樹 此處ちやさう云ふ意味かしらん。只江戸ツ子のやせ我慢を現したものと見ればいゝぢやないか。

○鼠骨 やはり芝居は上方が本場ですから……。

○鳶魚 入物は東京の方が大きいです。

○鼠骨 今では少し大いか知らない。此邊ではどうか……。

○若樹 簡奴は大入だ、けれどもナニ江戸の半分も無いと江戸を振廻したのです。

○竹清 モウそんなものだな。

○若樹 竹の皮、此時分は江戸だつて東京だつて竹の皮で色々包んだけれども、明治の末になつてか

ら東京などでは竹の皮が高くなつて今は皆へぎと替へた、併し京都では今でもやはり竹の皮を使つて居る。非常にそこは床しいと思ふけれども早晚是も無くなるでせう。

○竹清 先年甲州に行つた時にへぎを使つて居るので不思議に思つた、其時分に東京では竹の皮を使つて居つた、明治三十五年頃でせう。其頃に甲州ではへぎを使つて居た。

○鳶魚 尤も甲州は竹が少うございまして彼處は竹が細い。竹の皮になるやうな竹は無いでせう。

○竹清 東京の方がへぎになつても上方が竹の皮となつて居るから可笑しく思つた。

○若樹 是も早晚無くなる。

○竹清 第一竹の皮の鼻緒と云ふものを知らんでせう。

○鳶魚 貧乏鼻緒と言ふと。

○竹清 竹の皮をよつて鼻緒を立る、それは知らんでせう。竹の皮の草履で無く鼻緒が竹の皮です。

○鳶魚 普通臺所穿きは皆さうです。それから荒物屋へ行くと別に貧乏鼻緒と言つて賣ります。

○二葉 竹の皮鼻緒は中以下の家では大抵使用したもので、私共も子供の時代には穿かされました。

○鼠骨 「鯖の酢もじ」是は京都と大阪が多くやる、其鯖は酒の肴にし、竹の皮は草履の鼻緒になる、此處は京都人がしみつたれの極端な所です。

○鳶魚 一體鯖は江戸よりも上方で珍重される。

○鼠骨 鯖のすしは、京都などでは祇園祭に必ず鯖の鮓を使ふ。其鯖の鮓なる物が非常な御馳走になつて居る。鯖の鮓屋も澤山あります。

○若樹 生魚が少いから。

○鳶魚 東京あたりで生鯖などは餘り結構な物でない。

○竹清 鯖は下魚です。

○鳶魚 下魚でも鰹や真黒は旨いが鯖は旨くない。

○二葉 此地の鯖は私の方のと何うも味が違ふやうです。秋鯖は嫁に喰はすな杯と申す 諺もございまして、味が至極好いものです。

○仙秀 東京の鯖は大きいのが、私の國(陸奥)の鯖はもつと小さい、だから味が違ひます。全く不味い物と思つて居りますが、青森では鯖を海から釣つて來たばかりのを喰はせる、それが餘程振つた御馳走になつて居ります。

○鳶魚 どんな野蠻人でも旨く無い物を喜ぶ譯は無い。

○若樹 京都では鯖の鮓は好い物になつて居る。

○鳶魚 實際旨いのでせうか。

○二葉 私共の國では鯖の丸鮓と云つて背開きにして内部へ飯を挟み、箱に詰めて押をかけて七八分の厚さに切つて客に出します。ナレ鮓の方はまた違ひます。

○鼠骨 さうかと思ふと一方に贅澤をして居る。大阪では宗十郎町あたりへ行くと非常な贅澤なもので鮓などが京都は生魚が無いので、西園寺侯など大抵生の魚は喰はない。魚は一鹽の物が一番美味しいと云ふ。それを人が食通だと褒めたが、安んぞ知らん彼等は幼い時から生魚を喰つた事が無い。そこで天皇陛下の事を聞いて見ると、明治天皇陛下は殆ど生魚を召上らない。成程幼い時から喰べなかつた者がチヨイとした生魚を喰つて反吐をつくと同じことで、一向食通でも何でも無い。それが西園寺に感心して、それにあやかつて皆鹽魚ばかり喰つて居る。偉い連中だね。生魚を御存じないので。

○鳶魚 京都の鯖の鮓は生の鯖でせうね。本當の鹽漬はありますまいな。

○二葉 皆鹽です。鯖の鮓は必ず一鹽あてゝ送りますもので、一鹽もので輸入して來るのです。

○鼠骨 チョツとした一鹽です、だから色が變つて居ます。

○仙秀 口上は序になる前に來るのですか。

○鳶魚 「しだし」

○鼠骨 端役と云ふ事ぢやないですか。

○鳶魚 端役、さうでせう。是は先へ大體の狂言の筋を言はせるでせう。伏線にするのでせう。それから「大根」是は實際上方で大根と言つたことがありますか。東京では大根と云ふ。やはり後の者と云ふことでせうな。何故大根と云ふのか、大根卸して卸すものだ。下へこき卸すものだから悪口を言ふと、語り上へ揚げないで下け可きものだ。扱さう云ふ風に言ひましたかね、それと鼠骨。

○竹清 鼠骨は今もありません。狂詩の續太平樂府の折助行に、折助字蒙六だとあります。此人は分らないが、肌寒看板襟、氣利頼被穿、喚掛膏藥首、振向入墨肩、可憐暫時裡、應是擲廿錢とあるから大抵是で分る。

○鼠骨 老して碌々たる故ではないか。

○若樹 「おちが来る」は落語の方から語原が出て居るのではありませんか。話の終りの時に必ず結末を附けると云ふことで笑ふから、其方から轉じて来て居るのではありませんか。

○鼠骨 落語が、落ると人がどよめき渡るからでせう。

○鳶魚 京都では火消人足のことを、火方鼠骨と言つた。

○鼠骨 鼠骨頭巾と云ふのはあの鼠骨だね。

○鳶魚 一體鼠骨頭巾と云ふのは、錢が小さくて本當は法祿頭巾と云ふのださうだ。さう云ふ事を言ひますな。

○若樹 火方人足が著る方の鼠骨が面白い。

○鳶魚 さうすると、火方人足はどうして鼠骨と言ふか。

○若樹 やはりそれは分らない。字を蒙六と云ふのでせう。

○竹清 鼠骨頭巾の方なら譯は無、何時も鼠の字を書くから。

○鳶魚 老人が被る頭巾。

○竹清 アレを被つて居ると随分鼠骨したやうに見えるから。

○鳶魚 折助は明和安永頃から言ひ初めたですか、折助さんは何故遅いと云ふ。何でもねえ、役者が中間になつた時に折助と云ふ名にした、それが傳播したと云ふ事が明和頃の何かにあつた。だからモツと古い所に折助と云ふ人間があつたやうに書いてあります。百文の錢を眞中から折つて使ふからと云ふ説もありますが、どうも分らない。

○若樹 人名にするのが宜いかも知れないが、最う少し穿鑿しなければねえ。

○鳶魚 唯、此處で大方言へさうなのは、折助と云ふ言葉は明和安永以来の言葉だ、それより前は言はなかつたと云ふ事は言へる。それは浮世草紙にある、折助は上方では中間の事を言つたらしい。けれどもそれは後に實際用ゐられたやうな形跡が無くて却つて明和安永頃から言ひ出したらしい。

○若樹 折助さんは何故遅いと云ふ歌が上方で流行つたのぢやないか。

○鳶魚 其歌が流行つたのは明和安永でせう、片方の浮世草紙の方は寶永あたりからですから大變距離が遠過ぎます。

○若樹 距離は遠いけれども、やはり西の方から来た言葉なんだらう、来たことは……。

○鳶魚 来たことは来たかも知れませんが、向うに在るのだから向うから持つて来たと言ふ方が宜いかも知れませんが。

○若樹 流行歌は大抵西から来る。江戸で出来た流行歌は殆ど無い。

○鳶魚 有つても少いですが。それから狂歌ですね。「だいなし」紋が附いたのをだいなしと言ひます。紋の附いて居らぬのもだいなしと言ひますね。紺看板の方は紋が無い。裾の看板は、模様が付いて居る筈です。

○二葉 裾模様がある。

○鳶魚 アレは看板だ、紺看板の圖を一つ入れなければならぬ。「だいなし」は無紋ですな。

○若樹 同時に臺なしにしたと云ふのは無茶苦茶にしたと云ふ所へ掛けたのでせう。

○竹清 詰り北八は古著の布子を着て居つたものだから旨祿だなんて言はれた。それからツイ喧嘩を始めて頭芝居を見ることも出来ず、詰らぬ事にして了つたと云ふ事を言つた。棒に振ると云ふ所から古手と掛け、だいなしは、臺なしと掛けた狂歌でせう。

夫より行々て祇園の社にまいる、御本社の中央は大政所牛頭天王、東の間は八王子、西の間は稲田姫、聖武天皇の御宇吉備大臣、唐土より歸朝の時播磨の廣峰に垂跡し給ふを崇奉れりといふ、其外攝社末社記すに違あらず參詣日々に群集し、茶店夥多祇園香煎の匂ひ高く齒磨賣の居合拔賣藥の言立て浮世物眞似能狂言、境内に所せきまで満々たり、此所にも種々方言可笑味あれども其趣、感和亭の著はす舊觀帳に事古りたれば、茲に略す、彌次郎兵衛北八悉く巡拜して南の方樓門を出ると、二軒茶屋豆腐田樂の名物にて赤垂したる女共大勢門に立てしやべる、「お休みなされお休みなされ、此へ御遣入なさらんかいな、コレナお支度なさらんかいな、彌ハ、ア此所が川柳點に、豆腐切る顔に祇園の人だからと云つた所だな、アレ北八見や、此奴は妙だ」と覗いて見れば、女の豆腐切る音、「トント、トント、トント、北、ホンニ面白い、イヤ時に此所で一杯やらかしは

どふだ、ちと腹が北野の御神木だ、女「サア奥へお這入りなされと此内兩人奥へ通る、女「お茶あがりませ、北「田樂で飯にしよう酒も少し、女「ハイ、彌「京では何でも他國者と見ると、途方もなく高く取るといふ事だから油断はならぬ、北「ホンニ夫れ、三文でも割をくつちやア業腹だト此内女盃を持出、口取に茶の浸物、井に入持出、女「唯今おでんが出来ます、マア一つあがりなされ、彌「よし、モシ女中、酒はいくらづだの、女「ハイ、私の所の御酒はよござります、六十匁がへで御座りますといふ、彌「エ、それじやア分らねへ、此井はいくら、女「それかいな、五分で御座りますわいな、北「飯を早く頼みます、女「ハイ、畏まりました膳を二膳に飯ばち田樂持「ハイおでんが出来ました、彌「這奴は變な田樂だ、女「コリヤ葛ひきじやわいな、おむしのは只今彌「田樂はいくらづだ、北「ハ、如何に先へ値を聞かんとつて、田樂は聞すといふじやねへか、サア一杯はじめねへ、彌「ヲット、成程好い酒だ、水ッほくて根から呑めぬ、もう一杯續けよう、北「コレお前小言を言ひ乍ら獨で呑、ちと此方へよこしねへな、彌「時にははいかぬ、モシ、何ぞ肴を一つ、女「ハイ、と馳て硯蓋を持来る、彌「この硯蓋はいくらだ、女「ハイ二匁五分でござります、北「這奴は高へ、彌「へ、うつちやつて置や餘り吝しくしやアがると俺が困らせてやる仕法があると段々肴を出す毎に、其値段を聞て、出た丈の物残らず食しまひて、彌「サア、

ア、女中勘定を頼みます、女「ハイそれへと書付をはかりに添へて持来る、彌「ドレ、北「八見やざつとした所が此書附だ、北「チャ、拾貳匁五分たア豪勢に高へ、貳朱位のものだ、彌「次さん負て貰ひなせへ、彌「イ、ヤ安いものだ、ソレ釣を持て来な、サア、北「八荷物が出来た、是を皆持て歸るのだぜと硯蓋大平、井などを皆鼻紙にて拭き片付るゆる、北「八彌次さんそれをどふする、彌「コレ女中コリヤ皆持つて歸りやすで、女「イエ夫は、彌「ハテ先刻に此井はいくらだと聞たら五分だと云たじやアねへか、そして硯蓋はといへば貳匁五分だといふ、よしが大平が三匁、よしか此鉢はと聞たら、これが三匁五分と貴様が言つたに違へはあるめへ、其處でめた所が拾貳匁五分渡したから言分はあるめへ、女「ヲホ、ようじやらくとてんごう言ふおかたじやわいな、ヲホ、彌「イヤホ、じやアねへ本當に持つて歸る。

○若樹 此祇園の境内に色々の物賣などの出て居る有様が感和亭の著はす舊観帳に在ります、と云ふのは京都の事でないと思ひます、兩國の廣小路の事を言つたのであります。それと違ふのを寄せた。

○鳶魚 お負けに其時分書いて居ります舊観帳の三編中に一九が書いてある。だから少々自家廣告の氣味があります。

○鼠骨 齒磨賣の居合抜、賣藥、浮世物まね、能狂言など實際有つたでせう。

○若樹 さうでせう、境内にみち／＼たりとありますから。

○鼠骨 怪しいではありませんか。

○鳶魚 有つたのでせうな。

○若樹 舊觀帳は言はなくても宜いが、是は物真似をする九官鳥から舊觀帳が出て居るのでせう。舊觀帳は名所圖會など出来た當時名高かつたでせう。

○鳶魚 それから少し前の攝社末社ですな、此違ひはどんなでせう。

○竹清 攝社の方は格が上だ、とかなつて居ますぜ。本宮にゆかりある神、又はかり宮が攝社攝宮で、本宮にゆかりの有る無しに關はらず社司の意で祭るのが末社だとかいふことです。

○煙崖 祇園社の縁起は宮地氏の神祇史では南都常住寺の僧十禪師圓如大法師が託宣をうけて貞觀十八年に愛宕郡の八坂郷に鎮祭したに始り、後に陽成天皇の元慶年中京都に疫病流行の際神威を感じて藤原基経が此感神院を建て五間の神殿を造つて天神、婆利女、八王子を祭つたので此社を祇園天神堂といひ祭神を祇園天神と稱す、又感神院は初め圓如出身の關係、上山階寺に屬したが、後此寺も社も延暦寺の勢力下に引附けられ社は圓融天皇の天祿三年から日吉の末社となり、寺は翌々天延

二年に天台別院となつたと見える。

○若樹 祇園の處に色々の者が出て居るが、其中の浮世物まね。

○鳶魚 總ての物の假聲です。

○竹清 猫八みたやうなものです。

○鳶魚 聲色といふと役者ばかりだけれども、さうでなしに總ての口上を真似る。

○若樹 今ありますか。

○鳶魚 今は落語の方になつて了つて居る。

○鼠骨 是は主として役者の假聲ぢやないか。

○鳶魚 少し違ふやうだ。役者のやるのは寶曆頃から假聲と云ふものが分れた。浮世物まねは此時分のは特に色々な物まねをして御話をする、身振をして話をする奴です。だから落語に近いものなる。

○若樹 能狂言はほんとうの狂言でなしに照葉狂言といつた様なものでせう。

○鳶魚 本當の者ぢやない。東京で言ふ豆藏、アレが浮世物まねと云ふ者です。是も此頃は無いでせう。



京都名所圖會所載

○竹清 「祇園香煎のむ高くとあります。此處は茶店で香煎を用いたものでございます。それは中島棕隠の四時雜詞に「祇園廟下通衢、有四五家、響呼香煎者上、其製合三研太唐米、薑苡仁、蜀椒之類、作粉屑、人喫湯時點少許於椀面、奇芬頗可喜、所謂水茶店、皆必進其香湯、祇園香煎之名、所以籍于四方也」とあります。

○若樹 「南の方、樓門を出ると」二軒茶屋、今は一軒中村屋だけが残つて居る。東だけ残つて西は絶えて了つた。今は立派な料理屋になつてゐる。

○鼠骨 堂々たる料理屋だね。

○若樹 馬琴と交遊のあつた京都の橋本經亮の

橋窓自語に「祇園の社の南門外、二軒茶屋はいとふるきものにて、むかしは東西二軒とも藤屋にて東の方は西より飲食を持ち通ひしが、今時より百年ばかり前に、藤屋貧窮の頃ほかよりましたすけたりしもの、終に東側をおそひて中村屋といふになしたり、さるから今に中村屋に井戸雪隠なかりしを今世雪隠はいでしかと井戸はなし、又祇園社僧以下五月末と十二月末とに、藤屋のゆかに幕をはり寄會し侍る時、茶や雑煎といふものを出せり、これは味噌汁に小串さしの焼餅を入れて、それにこぐわし(今云香煎也)をちらしたる也」とあつて元は兩方藤屋であつたのが、中古東の方が中村屋になつたと書いてある。今は其の東の新しい方が残つて西の古い藤屋といふのはなくなつて了つた。中村屋といふのは今は堂々たる料理屋です。今でも所望すれば、トント、ンと所謂形式だけはやるさうですが、これは特別の場合でなければ滅多にはしないさうです。

○鳶魚 祇園の二軒茶屋を眞似たのが、深川の二軒茶屋です。是は眞似たと書いてあります。

○若樹 都名所圖會の拾遺の二軒茶屋の圖に和蘭人が三人腰をかけて豆腐を切る所を見物してゐる圖があつて「阿蘭陀か細工にいかぬ我國の祇園豆腐の和らかな音」といふ狂歌が載つてゐる。

○竹清 茲に狂詩が二つばかりあります。狂詩畫譜に、二軒茶屋、先出座禪豆、終無三田樂來、拾置現銀客、藝子邊徘徊とある、一つには續大平樂府に不唯上手剪豆腐、亦能爲藝有白犬、客來十分腹

服後、殘之田樂試擲遣とある。是は文政の物で古いのは安永です。

○鼠骨 是は京の四季の歌の中にも載つて居る。粹も不粹も物堅い二本さしでも和らかう祇園豆腐の二軒茶屋」とある。

○鳶魚 成程アレは京の四季ですな。

○若樹 「豆腐切る顔に祇園の人だから」と云ふのは、是は川柳點には違ひないが、これには附句か何かありません。前に何か付いて居なければ面白くない。

○竹清 成程京の四季の處に書いてある。

○煙崖 四時雜詞に「祇園廟南兩箇飯酒店。舊有レ名、俗呼ニ二軒茶屋ニ鴨東諸樓酣譚徹レ明之客、多撃ニ娼妓ニ投ニ此店ニ喫卵酒云々。又曰く兩店同賣ニ豆腐串ニ女奴各著ニ茜布蔽膝ニ有レ邀レ客選ニ杯盤ニ者上、有レ當レ几斫ニ豆腐ニ或炙レ之者上割切方正、手逐刀移几板隨鳴如レ有レ擊レ節、咄嗟辨出之捷、皆成ニ于女手ニ兩店以レ之得レ名」とあります。

○若樹 「腹が北野の御神木」

○竹清 是は木村さんだ。

○仙秀 この頃上方で流行つた歌、竹は八幡の御神竹、梅は北野の御神木、とか云ふから、やはりそ

こから腹が減つて来たを北にかけたと云ふだけの事でせう。

○竹清 葛引田樂、おむしの田樂、おむしは味噌です。

○鳶魚 葛引は。

○若樹 餡掛でせう。

○二葉 餡掛は葛を濃くドロ／＼にしたもの、京阪でいふ葛引は葛を薄ッすりしたもので、葛の入つた清汁のやうに聞いて居りますが、如何なものでせう。

○竹清 成程、だから「こゝろつは變な田樂だ」と言つたのか。

○若樹 田樂は安いものでせう。だから直は何處でも定つて居るやうなもので聴かなくても宜い。

○鳶魚 此「わたくしの所の御酒は能御座ります。六拾匁替で御座りますといふ」六拾匁は二兩だから一兩替り、酒は幾らで一兩だらう。

○竹清 一樽。

○鳶魚 一樽一兩ちや高い。

○鼠骨 一駄でせう。

○若樹 一樽二分で買へるかな。

藤栗毛 輪講

- 竹清 それぢや餘り酔ふことは無い。
- 鳶魚 宜いでせう。並の酒でせう。
- 鼠骨 上方ではそれ位でせう。
- 若樹 是もモウ少し調べなければいけない。
- 竹清 秤を持つて来る。
- 鳶魚 是は分りませんね。
- 二葉 是は例の金を量るのではありませんか、小粒などを量る……。
- 鳶魚 何処何厘と云ふ奴ですか。
- 鼠骨 「北八見やざつとした所が此書付だ」
- 鳶魚 「ざつと」は大凡のこととせう。
- 鼠骨 大凡此書付だ。
- 竹清 全體二軒茶屋など無暗と取るのでせう。
- 鳶魚 さう云ふ傾きがありますぜ。
- 鼠骨 つまり書付の來るのを北八などの目には面白く思つた。ざつとした處が斯う云ふ風に書付け

て持つて來る。是位な事でも仰々しく如何にも準備の事をやつて來ると云ふ譯ではないか。

- 鳶魚 つまらない、一錢でも忌々しい。それは成程さうかも知れない。
- 鼠骨 本當に書付を出したものだらうな、恐入るね。
- 竹清 斯んな處を見物して歩く奴はウンと錢を取るんぢやないか。祇園前の清水あたりを歩くと。
- 若樹 今でも取ります。今では御規則で値段付が出て居るが、何錢とかいた下によりと小さく書いてある。併し二軒茶屋なんぞは定値段で堅い家ではなかつたらうか。
- 鼠骨 より流だから。
- 竹清 黙つて食べるとよりで取られる。
- 鳶魚 より以上取られる。
- 鼠骨 浅草なども洋食一品八錢よりと書いてある。よりは小さい。
- 鳶魚 お上りさんだからね。
- 鼠骨 吾々が眞面目な程、眞面目な處は無い。
- 若樹 東京だつてさうだ。暴る店では取れるだけ取る。
- 竹清 さう云へば伊勢の二見あたり朝日館とか、賓日館とか、却つて立派な奴は取らない。やはり

變桿な奴が這入ると取られる。

○鼠骨 蝶螺の壺焼など喰ふと取られる。それで二軒茶屋のつまらなかつた事が分ります。

○鳶魚 怪しいものゝ方が取られる。二軒茶屋は怪しかつた事が分る。

○若樹 「チャ〜十二分五分たア〜こうせへに高へ〜二米くらの物だ、彌次さん負て貰ひなせへ」
是は江戸ツ子の根性を現はして居る。

○鼠骨 彌次さんに言ひつける處が面白い。

○鳶魚 料理屋の勘定を直切る筈が無い。

○鼠骨 古著屋の勘定と同じだと思つて居る。

○若樹 「よふぢやら〜とてんごういふお方ぢやはいな」能く淨瑠璃などにあります。

○鳶魚 「てんごう」は此前有つたやうに思ひます。

○若樹 五分とか三匁とか、是もチョツとどちらかと云ふと錢勘定は分らない。だけれども斯う云ふ事をやらうと眞面目かどうか知らぬけれどもやつた奴が有るに違ひない。

○鼠骨 誰か此先生が以前に有つたのでせう。皿、井などを持つて歸る。餘り高いので腹を立つて持つて歸るといふ事が……。

○若樹追記 山東京山が文化十四年丁丑に京都に遊んだ時の紀行の中に（京山此年歳五十六）京都の料理屋の食物の麓末なものと、高價なることを指摘して居る。時代も略同じであるから、参考の爲めに左に掲げよう。

「生洲、生洲は江戸にても耳に轟きたる酒店成ば、友人春琴、予と僕三人、松源といふに至る。七月二日なりき。献立は椀もり、家鴨のころ煎、葱の薬味、もり汁、鯛の赤味噌、常の汁よりも薄し鯉の生もり、山葵三杯酢、硯蓋、くし子、玉子焼、生姜梅漬、梨子海老の焼たる吸物、小鯛の角切、白味噌、鰻一尾を二つに切たり、串は無之、大平にもりて出せり、春琴も予も酒を好まざれば飯を喫す。居家器物都て江戸の煮賣屋の様なり。高瀬舟の通ふ流は渡り二間計り、向岸に板塀の年經たるが崩かゝり、上り薪の積たるが見ゆ、流れは清冷なれども、様々のいぶせきもの流れ来る。對岸の僅に足を入れるべき程の處を舟頭歩行して高瀬を率、客を入れる座敷は貳間四方程に臥間の隔有、入口によしの簾を掛、酌する女粧ひもせず、衣服も常の下女なり、料理は江戸の煮賣屋の如くにして價は江戸に十倍せり。食すべき味あるものは家鴨のころいり、味甘けれどもよし、鰻は江戸の大道賣の如くにして價も倍なり。京は二軒茶屋も、妓を招く名家も生洲も同じ献立なり。夏は魚肉稀なる故、硯蓋に串子と玉子焼、生姜の梅漬、何方にても出す料理といふものにあらず。江戸の素人の

料理、心も無もの、手づかみの料理に異ならず、都て京にて物を食するは錢を食するなり。江戸の人、京にて物食はんと思ふべからず、夢にだも八百善金波を見ず、丸山の寮うかむ瀬も魚肉に貧しければ例の串子なるべし。若大金を投じたらんには、料理も格別かは知らねども、三人にて貳分金位にては何國も生洲の如し恐るべし」とあり。

ト眞面目になつて風呂敷につゝもふとする故女膽をつぶして「モシナわたしの云たはお肴の事でムリますわいな、彌、ハテ肴の直段きく氣なら此硯蓋にもつてある肴はいくらだと聽やす、それを此硯蓋はといつたら貳匁五分だと云つたじやアねへか、女、それじやて、それがまあ、彌、ナニいさくさがあるもんだトやつ返しついで所へ委細をきいて前垂したる男、勝手より出「ハイこれはあなたの御尤もよござりますお持なされませ、その代り道具の代物は戴きましたがあがつたもののお拂ひはまた戴きませぬわいな、それを御勘定下さりませ、彌、成程く、食たものは高が知てる、拂いやせういくらだ、男、ハイ七十八匁五分でムリますわいな、彌、途方もねへ事をいふ、おいらを盲だと思ふかコレエたつた五百か六百が物を食せておいて大それた事を拔しやアがる、男「イヤ私方では何じやあるとお肴は大阪から歩行荷で取寄ますさかい、駄賃がゑろう掛ますわいな、彌「肴はそれにしてやろうが青物は高が知れてある、アノ始に出した菜の浸物はいくらにつく、

男「ハイあれはな七匁五分、彌「ヤアあれが七匁五分たアあんまり人をうつむけにしやアがる、三文か四文がものだ、男「そないにおつしやりますな、ありや京の名物で東寺菜と申ますわいな、私し方では別に作らせまして蟲のくた菜は退ますわいな、そして蕈も太い細のないやうに撰出してあけるわいな、むさいお話しやが糞も絹ごしにしてかけますわいな、彌「飛だ事をいふそんな事があるもんか何でも食たもの、代は二朱ばかりやらう、男「イエ、左様じやありませんわいな、ハテ高いと思召すならあがつたものを残らすお戻し下さりませト此一言に困り、彌次郎兵衛躍起となりてせり合た所が理窟づめにあつて大へこみとなりまじくすれば、也、エ、面倒な彌次さん始らねへぜ、彌「いま、しい言分があれど勘定づくで恰好がわるい了簡して遣ろうよく覺へていやアがれ、トにらみまはして立上りほう、この所を出れば、女「よふお出又お近いうらにへ、彌「糞をくらへハ、ハ、ハ、

又しても祇園の茶やに田樂の味噌をつけたる身こそ口惜しき

○竹清 「そじやて、は東京の言葉に翻譯すると「それだとしてですな。それから「いさくさ」と云ふのはナニ言分が有るものかと云ふやうなことだ、うつむけにしやアがる」人を馬鹿にして居ると云ふのと同じやうな意味だらうと思ひます。味噌を付たる」前にも遺損ひをした癖に、又しても祇

園の二軒茶屋で、田樂の味噌と向うを見損をしたと云ふ意味の事に掛けたのです。此遺損つたことは誠に口惜しく思つたと云ふのです。藤井さんの諺語字典に器物に味噌の附いて居るのは甚だ見苦しいものだ、それで味噌を附けたのは見苦しい、遺損ひしたと云ふことを味噌を附けたといふのと同様に説いて居ります。

○鳶魚 甲陽軍鑑などには味噌を附けたと同じやうな意味で一鹽を附けたと書いてあります。

○竹清 此説と違ひます。

○鼠骨 鹽を附ければ清めるのです。

○鳶魚 さうでない、一鹽を附けると云ふのは、甲陽軍鑑などには敗軍のことを書いて居る。それを見るときは僕の僻案だけれども、弱つた者には鹽を附ける、ビリリツとさせる譯だ。モウ少し大袈裟に言へば眼に物見せる處だ。ビリリツとさしてやれば生が附く、此味噌を附けると云ふことは能く分らぬやうに思ひます。

○若樹 器物に附けるのは随分こじつだけだね。

○鳶魚 苦しい方だ。それから「うつむけ」も、仰向けならばビックリするのでせうが、「うつむけ」にするると云ふのは押伏せられたことでせう。押へ付けて、押へ取をする、と云ふやうな事ではな

いか。

○若樹 うつむけると云ふ方は刑罰の尻を叩く方から來はしないか。

○鳶魚 百叩きではありませんか。

○若樹 茲に「いまくしい言分があれど勘定づくで恰好が悪い」、是は錢にこだはつては穢いから、マア好い加減にして置く、斯う云ふ譯だな。此處の瘡我慢の處が面白い。

○鼠骨 何處でも土で居るから宜い。

○竹清 東寺菜と言つて居る、東寺菜は名物ですな、詰り東寺の近所では野菜物が能く出来る處ぢやないですか。

○若樹 それから茲に「理窟つめにあつて大へこみとなりまじくすれば」……。

○竹清 マジく〜とあります。これは顔の形容ですが、チヨイトこの「まじまじ」などはわからんですな。

○鼠骨 まじろくではないか。

○竹清 「彌次さん始らねへせ」

○若樹 此前に有りはしなかつたか。

○竹清 つまりどうも面倒ぢやないか、お前此處で争つて見た處が結局間に合はない譯だと云ふのでせう。

○若樹 京都で有名な醫者の山脇家の人で、玄坤といふ人の文化十一年に書いた瀧堂隨筆に、京都と江戸の氣風の比較が書いてあるが、其中に恰度此彌次喜多の失敗に似た談が載つて居る。夫れを見るとき、京都で勘定の時に書付と秤とを持つて來ることが分る。二葉君の言はれた様に、これは銀相場だから秤にかける必要があるのでせう。其文に「(前略)京都の人酒食に奢らざるにはなし、東西南北の酒樓皆繁盛して、毎日相應に來飲の客あるなり、然れども江戸人の如く綺麗に金をつかはす、翠樓酒樓に登ても酔のまわらぬ間は胸算用してゐる心あるなり、予一日洛東南禪寺門前の奥の丹後屋(湯豆腐名物なり)へ遊んで、衆人と席を盛んにして娛樂して居たる處、隣席に町人三四人隨分風體よく店手代か一家の主人と見える人物なり、此者酒を飲つて酒肴の料を問ふ、婦女料の書付と秤とを持ち來り、町人書付を見て胸算用と相違したりしにや、婦女を喚んで書付を見せ、此書付は臺所の勘定場にて相違したることにてもありや、餘程價貴きやうに思ふなり、勘定人へ左様申すべしと申したり、婦女其趣を勘定人へ達したる處、相違無之候と答ふ、町人それにて不思議なふなる面色にて、酒肴の料を一つノ一に聞けり、婦女は困りたる面色にて、硯蓋何程鉢肴吸物等イチ

イチ丁寧に價を口述すれども、不承知の様子にて、懷中より算盤を出しバチノ一と勘定して、初て合點のきたる様子にて、價貴し少々ひくべしと云て、餘程の間論じたるが定り直段の事故一分一厘ひき候こといたし不申と幾遍も論じ合ひけるが、遂に其價に銀子を遣し歸りけり、予同伴の士は皆大諸侯の藩中なり、士の心より右町人の爲體を見物して大に歎息せり、江戸表にて上方根性と云て卑しむる筈なり、最至極せり云々」。

それより境内を出元の四條通りを行に、日も早や七つ下りとなれば、急ぎ三條に宿を求め足休んと辿り行、先に立て近在の女商人、何れも頭に柴薪或は梯子連木槌杯を戴きて四五人打連立ち「梯子買はしやせんかいにやア連木いらんかいにやア、北、コウ見ねへ豪勢な物を頭へのつけて行くは彌」アノ又尻を振態はいハ、ハ、ハ、女商人「薪買はしやせんかいにやアト行々て河原に出ると彼の女共各と爰に荷を下し摺火打にて賣などのみて休む、彌」ハ、ハ、ハ、流石は都じや何奴も小綺麗な面つきだ、ちと冷かしてやろふか、北、又お前へこまされようと思つて、彌「馬鹿ア言ふな手前じや有めへしト煙管を出し女商人のそばへ寄り「御無心乍ら火を一つバツバノ」ハ、ハ、ハ、時にお前方ア飛だ重てへ物をよく頭へ置いて歩きなざるの、女「さよじやわいな、北、此位な物を、俺なんざア甘日や三十目ある石を頭で振廻したものだ、女「お前さんは鬚師屋の粉挽じやあるわいな、彌」エ、

手前黙つてゐろへ、女「お前さん方アどうぞ此連木買うておくれんかいな、彌「ナニ連木かア、かいてへがコリヤア細い俺等が所じや何でも材木のやうなそして四角な連木でなくちやア間に合ねへ女「ヲホ、、四角にした連木でおむし搦んすなら大方搦鉢も四角じやあるわいな、彌「そふとも、俺が所じや穴倉で味噌を搦る、女「ヲホ、、氣疎いきさくなお方じやわいな、アノ連木お厭なら、梯子買ておくれんかいな、彌「ハ、、梯子面白へいくらだ、女「今日は何もよふ賣んさかい、安して上よわいな六匁下んせ、彌「貳百斗なら引受やうさ、女「アノじやら〜いふてじやことわいな、もらつと買うて下んせ、彌「厭だ〜、女「お前さん此様にあぢようしてあるわいなモシ五匁にあぢよかいな、彌「いや〜、女「よいわいな是持ていんだら呵られよふ貳百に買てあぢよわいな、彌「ヤア負るか情ない事をいふ、女「きやうとう安いもんじやわいな、彌「いくら安くつても梯子買てどふするもんだ内もねへ辭に、女「よいわいなサア持ていなんせ、彌「這奴は誤るありやうは俺は旅の者で今宵は三條に泊らうといふのだから梯子を買ても仕方がねへ、女「何言んすぞいな入ん物をつけさんす事はないわいな、彌「ソリヤもう直をつけたが不肖だからいらねへ物でも袂か懐へ這入るものなら買てもやろうが何を言ても此梯子だから恐れる〜、女「そじやてゝわたしらをなぶらんしたのかいな此方や商賣じやわいなそないなこと厭じや持ていなんせト女共四五人口々

にやかましやかましくやべり立て、彌次郎を中に取巻き責立て、總て此女商人は皆至て氣の強きもの故なか〜合點せず、物見高い京の人達何事やらんと折重なりてくるりと取巻くに彌次郎兵衛遊られもせず、大きに困りはて種々に言譯し、又はりこみ言て見ても一向聞入ず相手は皆女のことなり喧嘩にもならず詮方なく錢二百文出してやりと〜梯子を買取り人の見る前捨られもせず見物どつと笑ひて散る、彌「こいつはいくちもねへめに合つた北八其處らまで擔いでくれ、北「エ、飛だ事をいふお前持なせへな、彌「又一ばんへこんだごうはらな、

いかにせん梯子の親とこのよふなやつかいものをひきうけし身は

○仙秀 祇園の境内を出まして元の四條通へ行くと既に日も只今の四時過ぎだ。早く三條へ行つて宿屋に泊らうとして行きますと、近在の女商人が頭に色々な物を載つけて四五人も連立つて参る。北八と彌次郎を見掛けて買つて呉れと言掛けた。さうすると北八はどうだ頭へ載つけて行くのはナカナカ偉いぢやないか、さうすると又あの尻の模様は随分可笑しいと言つて笑つて居る。やはり頭に物を載せますから腰で調子を取らねば巧く行かぬと見えます。後から見た見た恰好は良くなかつたかも知れません。そこで商人共が河原へ行つて荷を卸して摺火を點けて烟草を呑むのはどうして是は四條派の畫か何かで無ければ見られない圖であります。追がは都だ、どいつも綺麗な顔をして居る、

どうか一つ冷かしてやらう、お前は此前も失策つたから止したら宜いだらう、笑談言ふな手前ぢやあるまいしと夫から煙草を出して商人の側へ行つて、火を貰つて到頭色々な事を喋舌つて「鱧鮓屋の粉ひき」是は私には分りません。色々な下らぬ事を言つた擧句、梯子を買はされまして大に弱つた。そこで此狂歌で「いかにせん梯子の親とこのやうな」どうしたものだらう、梯子の親と云ふのは二本のことでございませう。此親と横になつて居る短い方の子とそれを引掛けて、斯んな厄介物を引受けたがどうしたら宜いだらうと云ふのでせう。

○若樹 親子を引受けたのでせう。

○仙秀 親と子のやうな厄介物を引受けて、どうしたら宜からうと大に落膽した狂歌のやうです。

○鼠骨 「うどん屋の粉なひき」

○仙秀 石臼をひき廻す。

○鼠骨 ひかないで肩へ掛けて、石面が下の横の方に附いて居つて、肩へ掛けて廻る。鱧鮓屋の粉なひきは石臼が廻る。此ぐるりの方の長いのが横になつて、其横のを肩へ掛けて押して行く。之をグングン歩いて廻る、頭の上を臼が廻る。大きな臼、丁度直徑が三尺位な臼だな。

○鳶魚 頭でやるやうに見えます。

○鼠骨 二人で斯う俯向いて長い棒を持つて、かういふ風に揉み杓みたるやうな事をして時々入れてやる。

○若樹 馬の代りだな。

○鼠骨、牛だつてやる、驢馬がやり居つた。

○仙秀 随分情ないな。

○鳶魚 成程それで分つた、前には分らなかつた。

○鼠骨 京都で言つて居る、鱧鮓屋の粉ひき、素麵屋の粉ひき。

○若樹 此悪口は面と向つて言はれても彌次郎北八などには分らん譯だ。

○竹清 何だか悪口と思つたらしいが何だか分らん。「よく頭へきけて歩行なさるの」頭へ載せるのとを京で「きけて」と言ひますか。

○鳶魚 「きけて」とは言はんでせう、埼玉縣では「けいて」と言ひます。

○竹清 「上総とか上総あたりでは「つツけて」と言ひます。

○若樹 此處らの言葉は今聞くと馬鹿に田舎臭いものになります。

○鼠骨 成程「きけて」と書いてある「四角な摺子木」、「穴藏で味噌をする」。

○竹清 そんな譬喩がありますか。

○鳶魚 無いけれども穴藏は四角と言つたな、嘘だらう。

○鼠骨 嘘は嘘だがどうして言つたか。

○鳶魚 大い摺鉢と云ふことを言つた。

○鼠骨 石倉から間違つたのか。

○鳶魚 さうぢやない、大い摺子木と言つたから、丁度穴藏を見立つてそんな事を言つたのでせう。

○鼠骨 穴藏が如何にも突如として居る。

○鳶魚 穴藏だから圓いのは無い、四角だ。

○竹清 穴藏で味噌を摺るのぢや穴藏が摺鉢か。

○鳶魚 摺鉢だ。

○若樹 此間 京都へ態々見學に行つたお土産だが、爰に書いてあるのを見ると「近在の女商人何れも柴、薪或は梯子、摺子木、棹などを頂きて」とありますが京都で聞いた話では柴薪など、梯子などを賣りに出るのは場處が違ふ。此の様な女商人は北山一帯から出るが八潮、大原、梅ヶ畑とか白川、各々出る處に依つて、賣物が定つて居る。例へば梯子だとか今の火燧みたやうなもの

か、ア、云ふ細工を賣りに来るのは、高尾の下の梅ヶ畑の方から出るのだ。白川あたりは花賣が來るとか柴、薪は大原から出るとか……。だから此處らで柴、薪、梯子、摺子木などを賣る女商人が四五人連れ立つて來るのは可笑しい。

○鼠骨 それは絶対に無い。

○若樹 是は一九が能く事情を知らないで書いたと云へる。

○竹清 白川から花賣が出るのですか。

○若樹 さうださうです。梯子や脚櫓などを賣る方だと先づ梅ヶ畑邊から出る。

○鼠骨 畑の婆と云ふ奴です。それは高尾の下です。

○若樹 さういふ細工物を持つて來る、何れも頭に載つて來る女は今でも然うださうだが、西の方の外れ北野の先あたりに泊る宿がある、それへ女が泊つて居て良人が拵へたのを自分の家から女の泊つて居る宿屋へ持つて來て、夫れを毎朝擔ぎ出して市中に賣りに出る。毎朝梅ヶ畑から出て來るのではない。夫れで兎に角一段落著いて錢が纏まると、それで米を買つたり、日用品を色々買つて自分の家へ歸るので、これは昔から今日でもやつて居る習慣ださうです。

○竹清 私は畑と云ふのは雲ヶ畑と思ひましたが、梅ヶ畑ですか。

○若樹 梅ヶ畑です。やはり直き掛直を言ふことは今でも非常に盛んなものだ。之を直切らないで買ふ奴は馬鹿だ。

○煙崖 掛直ばかりでない、以前嵯峨邊で酒の席へ来て菓子など押賣されるのには閉口でした。

○竹清 大原女と云ふのは柴を賣る。

○鼠骨 重に柴ですな。

○竹清 白川を通つた時に千日坊主を掛けてある、ハチな、是は藥にするのかと思つたら、種子を探つて作つて賣る、澤山な千日草です。

○若樹 皆是はマア花賣だけれども、白川あたりから出る。一般に娘として花賣をしなければいけないので、頭へ色々な物を載つけるのを幼い時から稽古するんだつてね。

○竹清 彼處を通ると藥で拵へた此位な面白い物がある。綺麗な奴は八錢、汚い奴は六錢だ。何にしても此處らの女は頭へ載せて居る。是は面白いものだと思つた。丁度叡山上りの道でした。後で聞いたらアレは白川あたりののが載せるので、本場の梯子など載せるのはアレは用ないさうだ。

○鳶魚 よか／＼鮎屋の女が太鼓をドン／＼叩いて賣つて来る、アレは皆襦袢で拵へてあります。

○竹清 それを畑の婆と云ふのは帯を大きくして、綿を入れて拵へるのが自慢だ。だから藥で作つた

のは本場ぢやない。

○鳶魚 アレはドン／＼太鼓を叩いて居る奴の頭はナカ／＼アレは只の者では出来ない。アレは軽い。風の吹く日などあの上に色々な玩具の旗など幾本も挿して斯うやつて歩く。ナカ／＼歩けないよ。

○竹清 京都などのは随分重いものでやつて居る。

○二葉 無論地方の遺風でせう。私共の國で魚を賣る商人は皆女ですが、大鹽ほどある盤臺へ魚を一パイ入れて頭へ載せて居ります。

○鼠骨 もとはあの深い五郎櫃と言つて櫃があつた。丁度五郎櫃の大きい周圍が曲尺一尺五寸位あります。其内に魚を一パイ、魚の不漁の時には草を入れる、或はうんだ苧を緯にして持つて来る。色々な物を内へ重い物を入れます。加藤嘉明が松山城を築く時に砂持をして居つた女が總て頭へ載つて持つて行つた。夫以來五郎櫃なる物を女に持つことを許されたと書いてあります。

○若樹 やはり梯子の事をオヤと言ひますか。

○竹清 横木をかう云ふのは木と云ふ字を書いて讀ませます。子があるから親と附けたのでせう。

○仙秀 梯子買つたばかりでこんな趣向が出来るから大變なものだ。厄介物でも何でもない。

斯くて四條通を寺町へ下りてゆく道々も梯子の持重りして咥きながら、「ナント北八手前附合を知らぬものだちつと斗り持てくれろへ、北」如何さまお前、心からとは言ながら氣の毒なこつた、嘸重たかろこうしなせへ、アノ女共のやうに頭へ乗て持て見なせへ、彌「成程々々ト手拭を疊み頭へ載、其上へ梯子を載せ、両手に持添へ行くと、往來の人「コリヤ何しやいな浮雲てならんはいな彌「ハイノ、向がさつぱり見へねへで歩かれぬ、往來の人「コリヤじやうもんが行くそふじや、水持て出やしやんせんかいな、じやうもんが行くどは火事があるそふなと云ふ事なり 往來「何處にじやうもんが行ぞいな「アレ彼處へ梯子持て行くわいな阿房よ、彌「何吐しやアがる、往來「腐拔な和郎じやハ、、彌「イヤ此篋作奴等ト梯子を頭へ載たなりにぐつと振返れば、其梯子跡先にて往來の頭をこつつり、往來「アイタ、、何じやいどめつそうな此人中で長い物横たはしにくさつてえらい馬鹿じやな天窓どやいてこませやい、彌「ナニ噓言吐しやアがる、往來「俺の額が痲癩がなふなつた其處らにや無いか見て下んせ、彌「エ、俺が知るものか馬鹿な面な、往來「豪い願な和郎じや、たゝんでこませやいと何れもきかぬ氣の者と見へて大勢どやくと立掛れば北八止て「コリヤア此方らが悪かつた、誰方も御了簡下さりませ、サアノ、彌次さん歩行びなせへ、彌「忌々しい奴等だ、北八どふも一人では持れぬ跡の方へ肩を入れてくれぬか、北「トレノ、コリヤア俺

までを飛だ目に逢せる、

是もまた話しのたねよはるくと京へのほりし梯子一脚

彌「エ、歌どころじやアねへ、何卒放擲つてしまひてへものだト今は二百の錢も惜からず厄介物の梯子打捨て行かんと、往來「少なき横町へ這入りそつと捨置き遊んとすれば、折悪しく人に見咎められて、詮方なく擔ぎ歩き、又何方へぞ捨んノ、と思ふ内、浮々と三條通りに來りければ宿引と見へたる男「モシナお前様方お泊りかいな、彌「泊りく、宿「此方の内方へお出んかいな北「お前何處だ、宿「ツイ彼處じやわいな、サアノ、お出んかいなト打連て大橋の方へ行く。

○二葉 此處も何も無いやうに思ひますが。

○若樹 此處もやはり匪へきけてと書いて傍に乘の字が書いてありますね。

○二葉 「じやうもんが行そふぢやお水もて出やしやんせんかいな」此前山中先生の御話で聞いたが、火事が行く時に町々で桶で表へ水を汲んで出すと云ふ話がありましたかと思ひます。

○若樹 「じやうもん」は何ですか。

○鳶魚 法被の事ですか。

○若樹 人足の代名詞ですか。





原 本 挿 畫

○鳶魚 火事が行くかは、彼地に限る。東京では火事に行くとは言はない。京都では火事が行くと云ふ。

○若樹 火事が行くとはい言ふまい。

○鼠骨 言ひますな。

○鳶魚 だから此處で「火事が有そふな」といふ事はいけない。「火事が行そふな」でなければならぬ。僕の近所に上方の人間で何時でも火事があると、火事が行く／＼と言ふ、能く笑つたものだ。鳶人足の事をおじやうもん／＼と言つて居る。僕はそれを知つて居る。

○仙秀 今竹梯子の内へ石が這入つて居る。さうしてガタ／＼行くから火事が行くと云ふことが分る。

○竹清 それは吾々も聞いた。梯子の内へ石を入れると云ふ、それは竹梯子を推へるから音をさせるのでせう。やはり車の下に輪を付ける理窟でせう、危いから。

○二葉 北國の方では火事の竹梯子へ石を入れる處が多いやうですな。

○鳶魚 東京ちや竹梯子ですな。

○竹清 梯子が面倒です。中心點を巧く取つてやらんと、横木の出張つた所が肩に丁度當るやうになつて擔ぎ悪い。此處が肩に當つて歩き悪い。苦しいから仕事師は片方へ石を附けて歩かなければならぬ。

○鼠骨 「痰癆」

○鳶魚 漢方醫の方に有るのだらう。

○鼠骨 そんな事は有るまい、尤も癆を切ると白い痰みたやうな物が出る。私が額の痰癆が其處らにや無いか見て下んせ、是は餘り一九が書き過ぎたね。斯う云ふ事を附てやる。是で僕等は、厭になつて下ふ。餘り落語的だから。

○鳶魚 併し一體此時分に茶番が盛んに流行つたこと、夫から俗談が流行つた、さう云ふ時代だから此影響は十二分受けて居る。

○鼠骨 時代精神か。

○竹清 チョツと巫山戯るんだな。

○鳶魚 詰り悪洒落です。洒落も兎に角普通でない。

○鼠骨 好い加減の洒落は可愛いが此處まで行くと少し憎體になる。

○若樹 梯子が非常に伏線になつて、餘程此梯子だけは能く使つてあるね。

○鼠骨 實に巧みなものだね。

○若樹 狂歌は唯、梯子を擬人しただけです。「京へ登りし梯子一脚して京へ登ると云ふことに掛けてある。

○二葉 登ると云ふ處だけが掛つて居るのです。

○鳶魚 梯子乗りも餘程危い梯子乗りだが、誠に心細い藝當だね。

厠をお裏といふ

安永頃の板本女大樂に「若衆の寝間にも多くしな有て寝間へ入る前に裏へ行くもあり、是れ若衆は體の弱き者故の事也」上方で厠を裏と呼んだ。江戸ッ子が厠を裏と呼ぶ事は無つたらしいが、囃り草松の落葉の卷

に「弘化三年春より夏に至りて紫磨屋の番頭と云ふ戲言其流行驚く迄なり、あるは手遊び團扇様の物に迄わたれり、此頃流行の風邪を鷓屋風杯も云り、殊におかしきは商家の店先へ水虎の物かりに來たるに番頭の驚き困じたる様を寫し、錦書出たり、こは又一時の戲畫乍らのかつばの尻に由て名高き一證とも云へし。」此記では何か或る反物屋の番頭が丁稚を鷓殺した大評判が行はれたに基因したらしいが、本来反物に縞が多いから反物屋を鷓屋と呼び、反物を剪刀で切るに必ず裏より行ふより男色を鷓屋の番頭と綽號したと聞た。乃ち後庭を裏と云たので、開卷驚奇俠客傳五集四卷等にも男色をウラムキと訓せ有る。(南方熊楠)

第十五回

七篇卷之下

筑波 二葉 若樹 共古
仙秀 鳶魚 煙崖

既に其日も早や西に落ちて家毎に灯火を照し門閉す頃三條小橋を打渡りて彼の旅籠屋の方に著たるに、宿引「サア、お泊りさまじやわいな、宿屋の亭主「コレハお早うお著で御座りますわいな、彌「アイお世話になりやす、亭主「お荷物は、北「此梯子一丁、亭主「コレハ氣疎お荷物じやわいな、コレ、お蛸や奥へ御案内申さんかい、女「ハイ、お出なされませと奥へ案内するに連立二人は座敷へ通ると、亭主來りて「今晚はお客様がいこお少なふござりますさかい、お湯は焚ませぬ、ツイあこの小橋下る所にきやうとう綺麗な湯がござります、これへなとお出なされ、北「俺らアい、から彌次さんお前住なら往つて來なせい、京の水で洗ふところせへに色が白くなるといふことだぜ、彌「此上白くなつちやアつまらねへからよしやせう、亭主「時に貴客方は近在からお出かいな、北「イヤ俺等ア江戸でござりやす、亭主「かいな私は又梯子をお持なされたさかい、コリヤ近在のお方でお宿へ買ふてお歸りなさるのかと存じましたが、として江戸のお方が梯子を何なされ

ますぞいな、北「イヤ是には譯がありやす、アリヤ江戸からことづかつて來やしたのさ、亭主「ソリヤ何としてあないな物を、北「聞きなせへ俺等が心安い者だが、生れは此京の人で、今江戸に世帯を持つてゐやす所へ京の親元の方から遙々とアノ梯子をかつがせてよこしやした、其譯はかの親御が無筆と云ふ事で、人に手紙を書いて貰ふも面目ねへと言事かしてアノ梯子斗り寄越した心は、登つてこいといふ心意氣で御座りやせう、其處で又其息子が返事を寄越してへが同じくこれも無筆で、いろはのいの字も書ねへ癖に飛だ負惜み、わつらが今度御當地へ來ると言つたら幸のことだからことづけてへ物があると云ふに依て、随分何でも届けてやるふと云ひやしたら、聞きなせへ、汚ねへ乞食坊主一人とアノ梯子を寄越して、是を親父の方へ届けて呉ると云ひやす、其處でわつちがコリヤア梯子はいゝが坊様は生てる人だから持つて行くに難義だと云やすと、其男の云にはそんなら梯子斗り持つて往て京へ著たなら、どふぞ坊様を一人頼んで、其坊様に撞木計り持せて、梯子と一所に親父の所へやつて下せへと言やすから、ソリヤア何故さうするのだと聞きやすと、イヤ京の親許から登つて來いと云つてよこしたから、其返事だと頼まれて持つて來やしたのさ、亭主「ハ、ハ、梯子を遣つて登れといふは聞へてじやが、其お返事に梯子と又坊様に撞木計り持して遣るとはどふじやいな、北「ソリヤ登りたいが金がないと云ふころ、亭主「ハ、ハ、出來まし

たわいな、しかし遙々の道中梯子の事なりや柳行李へもよふはいるまいに、嘸御難儀にあつたじやある、北「イヤなか／＼そふでもござりやせぬ、道中するには梯子を持って歩くが飛だてうほうなものさ、馬杯に乗るに梯子を掛けて乗ると途方もねへ乗よくしてして川々を越に徳な事がありやす、大井川でも阿倍川でも臺越といふをすると川越の賃銭が四人前に、かの臺の賃が一人前出す所が梯子持参と云ふものだから川越の賃銭計りで臺の賃がかすりになりやす、お前方も是からもしも道中しなざる事があるなら必ず梯子は持たざるがいゝ、コリヤ人の氣の附ねへてうほうなものでござりやす、亭主「イヤ誰も道中するとなニ梯子持ていこといふ氣が附ものかいなハ、ハ、時に只今仰しやつた坊様は此所でお雇ひなさるのかいな、北「そふさは是非雇はにア成やせぬ、亭主「さよなら幸ひのこつちやわいな、私方に世話致して置あります好いほんが御座りますわいな、是をお連なされませ、只今お引合申しましよかいト起上らんとする、北八肝を潰し「モシモシ待てくんせへ、今急には入やせぬ、厄介物の梯子を引請て困るさへあるに、又生た坊様を取込でどふするものだ、ノウ彌次さん、彌「イヤ／＼ソリヤ手前の係りだから俺は知ぬが、何にしる其坊様を早く頼むが宜さそふなものだ、北「エ、お前迄が飛だことをいふ、亭主「ハテ今貴客の云ふてじや通りなら、是非共お頼みなさるのじやないかいな、北「それはさうだけれど、亭主「何じや

あろと私へお任しなされ、北「そんな事より俺ア早く飯が食てへ、亭主「御膳も今上ますが、坊様はどふじやいな、北「ヲ、サ坊様早く食てへ、腹がへつて堪へられぬ、亭主「ハイ／＼畏まりましたわいなト勝手へ起て行くと程なく女飯を出す、食事の内種々むだあれども餘り管々しければ略す。

○共古 こゝの處は別段説明することは無いやうでございます。初に「氣疎いお荷物じや」と云ひますのと、それから「氣疎い奇麗な湯」と云ひます。是は京都人の方言ですが、こゝで氣疎いと申しますのは、仰山な御荷物だと云ふのと同じです。それから次に「江戸からことづかつて來やしたのさ」と言ふ言葉がありますのは、傳言、言使ひと云ふ意味で其事を承はつて來る、使と云ふ意味から「ことづつて」と云ふことが出て居るのでせう。外には無いやうに思ひますが、何處かございましてらやつて頂きたい。

○若樹 「今晚はお客さまが、いゝおすくなふござりますさかい、お湯は焚きませぬ」から餘所へ行つて貰ふと云ふことは、都會の特徴でございませうか。

○共古 是は馬喰町あたりの宿屋は、必ずこんなやうです。

○鳶魚 馬喰町以外には、聞きませぬ。あれは百姓宿です。

○若樹 此處の今晚はお湯がございませんと云ふのだから有ることは有る、無いと云ふのぢやない。

○共古 私共の知つて居るところぢや、場末、静岡の宿外れとか、場末の宿屋では事に依るとぢやない、時々御泊客が少いと湯の儉約をする。其時は湯札を呉れる。

○鳶魚 安い百姓宿、今では商人宿でせうが、さう云ふ處でも今では湯が出来ませんなどは云はなくなつた。それから「京の水」ですね。京の水と云ふのは昔の化粧下です。どういふ製法が分らないが、「京の水」と云ふ化粧品があります。

○若樹 あつたでせう。

○鳶魚 鴨川の水は色を白くすると云ふところから来たのでせう。

○共古 やはり鴨川の水で洗ふと云ふ意味と同じです。

○若樹 元染物の方から来て居るのではありませんか。京の水では晒しが好く出来る、晒しと云ふ方から来て居るのぢやないか……綺麗になる……。

○共古 京女の綺麗と云ふことは、京の水の綺麗の方で、染物だけぢやないでせう。

○仙秀 京の水といふ白粉が出来て居ります。鴨川の水が綺麗だといふのでこんなことになつたのでせう。これを對比してみるのには三馬の店で賣つた江戸の水でせう。尤もこれはおしろい下ですが。

○鳶魚 それから江戸の水が出来たに相違ない。それから「今江戸に世帯を持てるやす」、是は世帯と

書いてあるけれども、口では「しよたい」と言ふ。處で世帯と云ふ字は、甲陽軍鑑の中に、新參の衆の十分の一所帯を取る人ある故心猛くとも肩身すばりて」とあります。それは古參だけれども祿が少いから新參者の祿の多い者に對して恥しい、祿の事を此處では所帯と言つて居ります。それに「世帯」とは書いて無い、所帯と書いてある。だから世帯と云ふ方が間違つて居るので、所帯と云ふ方が宜いんぢやないかと思ひます。どうでせうか。

○若樹 世帯と云ふのは、漢字があつて當嵌めたのではないですか。

○鳶魚 サアそれはどうでせう。世帯と云ふ字は見掛けないやうですが、所帯と云ふのは東鑑にもあるらしい。あの時代の事柄であるらしい。

○二葉 上方では總て所帯と云ふやうです。關東の方では折々世帯と云ふ人もあるぢやありませんか。

○鳶魚 實は所帯が宜いやうに思ひます。

○若樹 今では世帯と云ふことは餘り耳にしない。

○鳶魚 東京人でも所帯と云ふ。東京ぢや所帯持と云へば一軒の主人と云ふ意味に使つて居る。是は荒浪君の方に願ひたい處ですが、川越の賃銀が四人と云ふこと、蓮臺の時は四人前取ると云ふことは、成程擔ぐ人が四人だから四人分出す、其外に臺の賃を一人分と云ふこと、是は實際の御話を伺

はなければ想像が附かん事だらうと思ひます。

○煙崖 享和年間に幕府へ届出でた大井川の川越規定に依ると、歩行川越の直段は九十四文より八十文迄とありまして、臺乗兩人乗一丁に川越が六人とあり、同一人乗一丁には川越が四人とあります。是で見ると臺の賃は幾らともありません、又近く安政六年十月二日故星野恒氏が渡川の際には「渡船番所に九十二文と指示せり、旅客一人の渡錢と思ひたるに、即ち昇夫一人の賃料なり、旅客一人の蓮臺四人にて、之を昇げば旅客一人の渡錢三百六十八文とす云々」若し水増せば賃料を加へて九十六文とす」云々「故に九十六文を以て渡川賃料の最高限度と爲す」と記されてあるから、時代に依り水量に係りて多少の増減はあつたものと見えますが、最早右の間に於ては別に臺の賃は無かつたやうに思ふ。或は其以前には臺賃があつたのかも知れません。

○鳶魚 幾人乗つても、乗つた人数だけ取る、又蓮臺の賃銀を別に取る、處で駕籠昇は二人乗つても駕籠賃を取らない。

○仙秀 昇賃の中に駕籠代も籠つて居るのでせう。

○鳶魚 此處ぢやア籠らない。

○若樹 蓮臺なる物は人足と蓮臺の持主とは違ふから違ふのでせう。

○鳶魚 此處だけは違ふやうに思ふ。駕籠昇とは違ふ。

○若樹 人足は肩車だけで済みますから。

○仙秀 さうすると客の要永に應じて、人足は蓮臺を別に借りて來るといふわけでせうか。

○竹清追記 驛遞志稿(享和二壬戌九月)「大輦臺に乗て安倍川を渡るものは、別に其輦臺錢として人夫二人の賃錢、小輦臺は一人の賃錢を償はしむ」とあります。

頓て膳をひきたるに宿の亭主は北八がちやらくらにのつた顔して慰み半分、これもふしやれものなれば、年の頃六十近きうそよくれたひけむしやくしやの大坊主壹人誘ひきたりて、亭主「イヤもふめし上りましたかいな、時に只今お話し申しましたは此坊で△りますわいなト引合すれば此坊主はなひしやけにてはなごへなり「ハイ是はひやうお泊りなはれました、愚僧名はひやんでつと申します、内方の旦那どのがお話しゆへ参りました、強「コレハ御苦勞、サア〜これへ〜、北「コリヤ御亭主さん、だん〜おせわだが氣の毒な事がありやす、亭主「何じやいな、北「イヤ無様ながらアノお方では間に合ますめへ、なぜといふにちつとばかり素人狂言でもしたといふやうな坊様でなけりやアなりやせん、亭主「ソリヤどしたもんじやいな、北「イヤさつきお話し申した通り、先の親元へいつて登りてへが金がねへといふ返事した上でかの息子が三百兩なければ登ら

ねへといふものだから、その心意氣をせになりやせん、所てかの盛衰記の梅が枝が無間の鐘の所作事、撞木を柄杓とちつつけてチ、アチン、ア、三百兩の金がほしいなアなどと、その坊様にやらかして貰はにやアならねへと云ものだからむづかしい、亭主「イヤよござります、此坊もありやうは馬鹿村變之助と申て以前は宮芝居の女形をやりおつたものじやさかい、ゑら出来じやわいな、幸いこちらの娘が今無間の鐘習ふてじや、何も慰みちよほ語らしてやらしましよかいな、

丸哲「ひやりましよとも、わし梅が枝をひやるさかい、どなたぞへん太をやて下んせ、彌「コリヤ面白、鼻くたの梅が枝に北八、源太は手前が相應だ、北「エ、馬鹿ア云なせへ悪いしやれだト眞面目になり、小言云てる内、亭主が指圖に十三四の娘三味線を抱へてくると、内の女房下女飯たき迄次の間にかたまり、丸哲ほうをそゝのかしながら見物する、彌次郎おかしく、彌「コレ北八アノ通りかみ様や女中たちが見物してじやが、一ばんおちをとる氣はねへかどふだト袖をひかれて、北八すこし浮れがきて、北「いかさま見物が多いとはりやいがある、まゝよ源太におれがならふ、其變り云草は出たらめにやるがいゝか、丸哲「ひよござります、サアノおとらさん、へん太の出端からやてくだんせ、彌「ハ、ハ、ハ、髭むしやくしやの梅が枝もいゝが、源太が轆を染返した著物著てるも珍らしい、北「コレノとうざい、ト此内娘淨瑠璃を語り出す「夜ごとノ、

かよひくる梶原源太景季、千歳がおくを伺へば丁度よい首尾幸いとすつと通れば、梅が枝は火燧にとんと身をそむけ、そらさぬ顔でふくきせる、北「コレ何が機嫌に入ぬやら、めつきりと持せぶり、われらがよふな浪人の饑た襟にはつかれまい、淨瑠璃「すんどたつを待しやんせ、丸哲「座敷ばかりをふとめるひやづで、けふこゝほらはれたは文でひらせて合點じやないか、淨瑠璃「にくい男と目にもろき涙は戀のならばせなり



梅ヶ枝

に、コリヤ手短かにやつてくれう、コリヤ坊主イヤ梅が枝、産衣の鎧はどふした、丸哲「ひよりや聞へませぬへんださん、北「エ、寄なといふ即滅と三百目に曲たわいの、北「ナニ打殺した、ソリヤ何故に、丸哲「そもや私が便毒から骨疼にな

つて山歸來のむ程に、氣種はじく、此ひやなを助けたいばかりに、ひやねならたつた三百目で、ひくいひやなを落すか、ア、ひやながおしいなア、三下りうた「二十八十六でふみ付られて二九の十八でつい其心、四五の廿なら一期に一度わしや帯とかぬ、丸哲「エ、何じやの、人の心もひらずに歌いくつさる、ほんにひよれよ、彌「イヤ待たトこれも堪へられず、勝手にゆきていぜんの梯子をみせの間に横たをにしてありしを引さけ来りかもるにうちかけ二階のきどりにて彌次郎中段に登りながら手ぬぐひを疊んで大盡風にちよいとあたまにのせて「サア、源太が母の安壽のやくだ、サア和尚やらかしねへ、丸哲「傳へきくふけんのひやねをつけば有徳自在こころのまほれよりはよの中山へ遙かの道は隔たれど、ほもひつめたるあが念力、此ひようづばちをひやねとなぞらへ、ひしにもせよ、ひやねにもせよ心ざす所はふけんのひやねトきせるおつとりいろくある、此時彌次郎梯子の上よりうちがへの錢をばらくと投出しながら自身に淨瑠璃語る、彌「其金爰にと三百文うちがへの錢投出す、深山おろしに山吹の花吹散すやうにはあらで、丸哲「爰に三文かしこに五文拾いはつめて、ひやん百銅コリヤ雇はれの賃錢さきどりとはいがたいトかきよせて袂に入んとするを、彌次郎梯子の上から丸哲を引捕へ、彌「ソリヤやるのじやアねへ俺がのだトひつたくろふとするに、丸哲はやるまいと争ふ拍子に鴨居に掛たる梯子はづれて、彌次郎兵衛

ひつくりかへり、どつさり落ちると梯子は丸哲の上になり、娘もひばらの骨を打れて、わつと泣出せば彌次郎腰背を撫さすりながら「アイタ、ウ、ウ、丸哲「ア、ウ、ノ、亭主「どしたぞやいノト家内中が狼狽へたちてたばこ盆ひつくりかへすやら行燈をうちこかすやら座敷中たどまつくらとなりて泣くやらわめくやら大騒と成亭主やうくあかりを持来り「ア、コリヤいとめはどふじやい、イヤ梅が枝がおかしな目をしおるわい、コレノ氣を儘かにせいやい、丸哲「ア、ノ、苦し、私や悔りしてはつとほもふたへいやらしてひん玉が上の方へつたわいなアイタ、ノ、彌「ソリヤ困つたものだ、モシノ御亭主さん、梅が枝がきん玉をつるしあけました、北「きん玉の上つたにはよい事がある、先刻見れば此處の店に錢膏藥といふ看板が見へたが、それをほんのくほへ張と金が下る、亭主「何云はんすぞいな、錢膏藥首筋へ張つたて、何下るものかいな、北「ハテ下る理屈だ、何故と云なせへ錢が上れば金が下る、亭主「エ、何のこつちやいな、丸哲「ア、私やどふやらよいやうじやが、娘さんは如何じやいな、宿の女房「コレ誰なと一はしり寸伯さんへいてたらんかいな、丸哲「私やもふよいかい醫者様よんでこうわいな、其かはりお寺へは誰なと外の者をやらんせ、亭主「エ、何ぬかしくさるぞい、北「ホンニお氣の毒なこつた、娘こは何處を打ちなすつた、亭主「腫腹ゑらう打おつたて、痛がりますわいな、彌「いたいひはらはは都の生れ人にどや

されひよんなめにあはれてお笑止千萬な事だ、亭主「イヤお前、人の娘に怪我さして口台所じやあろまいがな、彌「ハ、ハ、ハ、人の娘に怪我さしたとは私やどふやら恥づかしい、亭主「イヤ笑ひ所かいな、總體こなさん達はけたいじやぞや、彌「けたいとは何がけたいだね、亭主「何がとはちよこいふてじや、よふ思ふても見さんせ、私や此年迄宿屋しておつたが終に梯子持てきた客を泊めた事はないわいな、一體遠國のお方が何しに梯子をもてあるかんすやら、こちやとんと讀めんわいな、もしも屋根から踊りこむ衆じやないかと、家内のもんがほやいてじやあつたが、成程やばなことしかねん衆と見へるわいなト亭主やつきと成少し言葉あらしく云、此おどり込とは上方にては夜盗の事をおどりこみといふ故なり、もとより彌次郎兵衛むか腹立成ば、彌「イヤおめへ可笑しな事を云ふ、俺らアしらきてうめんのお旅人様だ、おつにひねくつた事を云ふと了簡がなりやせぬぞ、亭主「ヲ、いしこやの、何云ふたてよこなたたちが梯子持てござんしたから起つたことじやわいな、女房「是いなアそないな人に構はずと、こち来てくだんせ、いとがアレノ、ひよんな目つきしてじやわいなト涙くみて騒けば亭主もうろくして、「コレ見やんせ、もしもいとめがしにおるとこなさんは解死人じや、そふ思ふてるやんせ、女房「アレノ、たわいがないわいな、亭主「コリヤ目がまふたのじや、ヤアイおとらヤアイノ、女房「いとイのふノ、ト夫婦は娘をかき抱き水よ氣

付よと騒立て泣わめければ彌次郎は俄に狼狽へ出して、彌「エ、コリヤ北八、どふしたものだろ、俺アもふ此處にやアゐられねへ、亭主「コリヤノ、お虎死んで呉れな、どふじやぞやい、女房「お虎イのふ、亭主「お虎やアい、彌「エ、情ないコリヤ堪らぬノ、トうろくして立たり居たり騒きたつと、亭主「コレこなさんどつちやもやることならんぞ、彌「ハイノ、何處へも行きはいたしませぬ、コリヤノ、北八、全體手前が悪い、何の有體に云へばいよものを、ちやらくら腔を吐いたからおこつて無間の鐘だの何のと、ろくでもねへ事を始めたから、此の騒になつた、もとは手前が發頭人だから解死人はそつちへ譲るぞ、北「ヲヤ飛んだ事をいふ當人はお前だわな、彌「そんなら拳をして負けたほうが解死人だ、北「馬鹿アいひなせへ俺ア知らぬノ、ト此内醫者も來り藥など與へさまノ、介抱する内、娘やうノ、いき吹き返せば、みなノ、あんどし、彌次郎むねでおろしおちつきて此上はあやまるにしくはなしと、北八を頼みだんノ、訛事をしてあやまり證文を書きて、やうノ、と此いさくさ治まりける、もつとも北八が判にて鹿爪らしく書きたる、その證文、

一 札之事

一我等此度ひらがな盛衰記淨瑠璃之内安壽の役相勸候所實正也然る所梅枝無間之鐘相撞候節其金是に罷有越申之打替之鳥目投出し候連梯子爲二候故丸哲との陰囊御釣上被成井貴殿息

女江怪我爲致候段全右梯子鴨居へ打掛候より事起候趣預ニ御腹立一無ニ申譯一段々誤入候所御了簡被下 忝け存候然る上者已來御宿御無心中候共梯子抔決而持參致間敷候爲ニ後日一仍而如レ件

月 日

當人 彌次郎 兵衛
證人 北 八

○仙秀 前から引續いて坊さんを頼んでやつた處で、この平假名盛衰記は元文四年四月十一日初日、文耕堂、三好松洛、淺田一鳥、竹田小出雲の四人で作つた淨瑠璃で、竹本座で上場したのです。それから、此ちよほの語原をおきよしたい。

○二葉 調べて見たがどう云ふ處から出たか分らない。

○鳶魚 ちよほと云ふ奴は、芝居の床本は臺詞を抜くのだから、印しが附けてある、その印からチヨボと云ふ名稱も起つたのだと云ひますが、斯う云ふ子供が語つて居る處でそれを使ふものではなからうと思ひます。

○仙秀 素語とちがつて人形又は役者の動作に合わせて語るのだから、ちよほ語りには又別のコツがあるさうです。それから此本では淨瑠璃の三字に「ちよほ」の假名をふつてゐる。大方は床の字を

「ちよほ」とよましてゐるのも参考すべきものです。

○共古 語原は知りませんが、ちよほはチヨットと云ふ意味と別段變らない、一くさり語る、チヨットと語ると言つたやうなものでせう。モウ少し前の「北八ちやらくら」のつたかほしてなくさみ半分是もぶしやれ」とはどう云ふ事ですか。

○鳶魚 前にありましたよ、可笑しな洒落と云ふ事だせう。それから「ちやらくら」はどう云ふ事ですか、嬉遊笑覽に輕業の鳴物に用ゐる銅角をチャルメラといふ、茶廬哮喘を訛つたのであらう、人は銅角を哮喘といふ、又長崎の歳事記には唐人の葬儀は「チャンメラ」(哨哨)を吹くといふこともあるから、「ちやらつほこ」だの「ちやらほら」だのと云ふことは、此「ちやらふら」の訛つたものであらう、斯う云ふ事に書いてございしますが、私もさうだらうと思ひます。それはどうかと云ふと「ちんぶんかん」といふのと同じやうに、何を言つて居るのだから、支那の譜で分らんからでせう。さうして此處ぢや樂とか色々の字が書いてありますが、文藻行潦には太平簫と書いて「ちやらめら」と假名が附いて居つたやうに思ひます。それから俳諧の方では「飴賣の唐人笛や麥の秋」、あの飴賣の吹いて來るのは「ちやらめら」とか「ちやらもら」とか云ふ物だせう。あれから來て居りはせぬかと思ひます。

○共古 つまり斯う云ふ處で「ちやらめら」から「ちやらくら」が出ましただけでせう。此時に使ふ言葉「北八がちやらくらにのつたかほして」と云ふとは、つまり「ちやらくら」に浮されると云ふ事です。

○鳶魚 何れ「好い加減節」と云ふ位のことになりませう。

○共古 「ちやらつほら」と云ふのは、

○鳶魚 「ちやらつほら」といふのも同じ言葉の變訛でせう。

○共古 「どぢやれ」といふのは、どんなことですか。

○鳶魚 そんな事があつたやうに思ひます。

○共古 「女申達が見物してじやが、一番落をとる氣はねへか、此「落」はどう云ふことですか。

○鳶魚 落を取る、又ドツとくるといふ、芝居の通言です。ワル落といふのは見物が失笑するのです。オチを取るとは今なら拍手とか、喝采とかに相當する。

○仙秀 膝栗毛に書いてある文句は本當の平假名盛衰記と合せると大分落ちて居ります。

○共古 澤山落ちて居ります。「そらさぬ顔」是は分らん。活版本にあるのを見たら「火燵にとんと身をむけそしらぬ顔」とありました。是が本當かと思ひましたが、原本を見るとさうでない。「そら

さぬ顔」と原本にありました。此處は源太が千年の處へやつて來ると、梅が枝はどうだと云ふと火燵の方へ身を向けて、來た所の源太をそしらぬやうな顔をして居る、持てゝ居るやうです。ところがさうでない。「コレ何が機嫌にいらぬやら滅切ともたせ振」、是は丸で裏を言つたやうに淨瑠璃に書いてあるのかも知れないが、樋口さん淨瑠璃は。

○二葉 芝居などでするとンと烟管を突き火燵を背にしてソット見る畫面の見得、そらさぬ顔して源太を見る、アレぢやないか。

○共古 それは好い方です。

○二葉 マア好い方です。心で言つたら狎れると云ふ方です。

○共古 ところで何が氣に入らないのか。

○仙秀 それは外に身受の客がついて居るのですから、「めつきりと持たせぶり」の下に此本にはおちてゐるが「大名客の襟に付」とあつて「われらがよふな浪人の」とありますから、澄し込んでゐるたから源太の方が邪推したのぢやないか、と思ひます。「じんとなつをまたしやんせ」ですから。

○鳶魚 「そらさぬ顔」と云ふのは澄した顔です。

○共古 普通の言葉ぢやない。

○若樹 アレと此處とは意味が違ふのぢやないか。普通謂ふ「そらさぬ」と云ふのは向うの意を承けて居ると云ふ意味ぢやなくなつて居る。

○鳶魚 別段義太夫言葉ぢやない。「そらさない」と云ふことは「かけ障らない」やうな顔をして居ると云ふ事なんで、何處で使つてもさうなるでせう。

○共古 さうですか、詰りそらすのか。

○若樹 今の言葉の意味で言へば、そらさぬと云ふのは向うの意を迎へて、自分に思はない事を向うの意を迎へると云ふやうな意味に使つて居る。

○共古 さうすると此千年の仕打が、源太が其處へ遣入つて来る、火燧の方へと身をそむけた。

○鳶魚 かけ障らないやうにと云ふから、向うが腹を立つて居つても喜んで居つても相變らない、同じ調子で行くから人が知らないやうだ、といふ意味に見たい。

○共古 「何が機嫌にいらぬやら」、何か腹を立つて居る、さう云ふ言葉が其處に出る。腹を立つて居ると云ふことはそれで見えて居る。

○若樹 此處は所謂ボンヤリと素知らぬ顔で宜い譯です。此時代に於て素知らぬと云ふことはどれ程の意味を持つて居たかと云ふことですね、それはマア追つて考ふべしとして……。

○仙秀 「滅切ともたせ振、我ら斯様な浪人のかびた襟にはつかれ」まいといやがらせを言つてゐます。だから外に客がありましたので、どうしても源太先生邪推して居ると思ひます。

○鳶魚 「かびた襟にはつかれまい」

○共古 古くて汚れくさつた著物を著て居るから、襟につくと云ふのは、好い方の客に附くのは宜いけれども、身装の汚いやうな物を著て居る方にお前は心を寄せはすまい。

○鳶魚 一體襟につくと云ふ言葉が分らん。その襟につくと云ふ本が分りません。

○共古 是は女の情ぢやありませんか、襟につくと云ふことは、例へば御客が歸る時に肩に手をやつて御客を……と云ふやうなところぢやありませんか。是は情が襟につくと云ふ言葉の出所でせう。

○若樹 モウ少し他に語原がありさうですね。

○鳶魚 錢膏藥はどんな膏藥ですか。

○共古 圓い按摩膏でせう。錢の大きさ位の圓い、アレを肩へ附ける。

○若樹 「二八十六で文附けられて」と云ふことは原文にありますか。

○仙秀 二八十六の方は三下りうたとあるから當時のはやり唄でせう。

○鳶魚 「二八十六でふみ附られて、二九の十八でつい其心、四五の廿なら一期に一度」双蝶々曲輪

日記にも「二八十六で文付られて二九の」とある、此の淨ろりは寛延二年の作ですから、陸栗七著作以前から行はれて居たのでせう。

○若樹 當時の流行言葉でせう。

○共古 十六で艶文を附けられて十八で其氣になつた、唯二八だの二九だのと九々を入れただけで、何れ其當時の歌を採つたのでせう。

○若樹 「山歸來香程に〜氣種は」

○鳶魚 種は肺物と云ふことでありませう。

○二葉 「産衣の鎧はどふした七なん即滅」と云ふ事は言つて置かんでも宜いが、八幡太郎の源太の鎧、アレでせう。私共は何ですか、川崎千虎さんの畫の講釋の中に在つたのを見るに「平治物語」の卷一に「八幡殿の幼名を源太とぞ申しける、二歳の時院より進らせよ御覽せんと仰を蒙り給ひて、態と鎧を緘し袖に居てぞ見參に入れけるを、さてこそ源太が産衣とはつけられられ、胸板に天照大神正八幡大菩薩と鑄つけ進らせ、左右の袖には藤の花の咲かゝりしたる様を緘せる也とありて、藤色の絲を花の色にかたどり萌黄色の絲を藤の葉にかたどり、段々に色をかへて緘したるもの云々」と書いてあります。

○若樹 それが語原でせうが、此處は淨瑠璃の方の産衣の鎧の意味を少し言つて貰はんと一般讀者に分らない。

○二葉 私は其盛衰記を讀んで來ませんでした。

○若樹 要領を少し入れて貰はんと困る。あとで入れて下さい。

○鳶魚 あとで入れませう。

○二葉追記 平假名盛衰記の神崎の里千歳屋の場を見まするに、こゝで云ふ産衣の鎧は、源太景季が頼朝より拜領した鎧の名に、平治物語の八幡太郎の産衣の鎧の名を、源太の名に因みて持込みしまでとあらうと思ひます。後世産衣の鎧と云ふは、藤色と萌黄色とを段々に緘したものだとして「よろひ雑考」と云ふ書にあるよし、千虎氏もかゝれて居りますから、藤色と萌黄色との段々緘しと大綱みて見たらよからうと思はれますが、どうでせう。

○仙秀 それから無間の鐘の信仰と云ふのは此以前からすでに盛んでしたらう。

○鳶魚 モウ信仰しない時分ちやありませんか。

○若樹 「七難即滅と二百目にまけたわいの」と云ふのは七と質とかけた洒落であつて丸哲が上方言葉でひらなんと言つて居る、上方では「し」を「ひ」と言ひます。「叱る」ことを「ひかる」と申し

ます。

○二葉 是は御經の七難七福から来て居るでせう。

○若樹 「しち」質と云ふのを「ひち」といふ。

○鳶魚 七難即滅七福即生は、何から来て居りますか。

○二葉 圓山應舉が七難七福の繪卷の序文には仁王經とあり七難を地震、洪水、火災、鬼難、水難、盗難、病難とありました。

○鳶魚 さうすると其ズツと跡の方に「成程、やば(奇怪)な事しかねん衆」是は東京で危い事だ、危いことをやばいとか云ふ事が分らん。それを一つ御傳授を願ひたい。

○若樹 隠語でせうな。「やばい」といふ語は現今では掏兒仲間とか、泥坊社會の隠語になつて居る。隠語集の中に出て居る。

○鳶魚 危いを「やばい」とありますか。

○若樹 あります。

○鳶魚 譯は分らんですな。

○若樹 全く分らん。

○鳶魚 「オ、いしこや」のは。

○共古 健氣に同じで、「いしくも馳参じたり」など申します。此處はよくもさう云ふ事が言へたものだ。「いし」は健氣といふやうな事だけれども、よくもそんな事を言つたと云ふ意味です。

○仙秀 「痛いひ腹は都の生れ人にどやされ」と、其次に「人の娘に怪我さしたとは私やどふやら恥かしい」是も何かの口合ぢやないですか。

○共古 「自體我等は都の生れ」と云ふ朝顔日記の文句があります。

○仙秀 私や人の娘に怪我さしたといふ事はどうやら恥かしい。

○鳶魚 是は何か有るだらう。

○二葉 御話を願ひませう。前の方は、喜撰ですから分りますが……。

○仙秀 こゝらでせうか、清元の喜撰に有るかと思つてしらべて見たが無いやうですよ。

○若樹 「ちよこいふてじや」

○筑波 口合、東京で言ふ語呂でせう。

○若樹 「ちよこいふて」は猪口才な事と云ふのぢやありませんか。

○鳶魚 猪口才と云ふのはどんな事でせうか。

○若樹 チョツとした才と云ふことではありませんか。

○共古 伊勢の方言ではチヨキリと言つて滑稽な事、江戸では猪口才と言ひます。今本文で申しますのは猪口才な奴と云ふ意味であります。

○鳶魚 下手人、手を下す人と斯う云ふ方は見付かりましたけれども、解死人と云ふ方は見付かりません。「松屋筆記」などには、台記だの玉海だの、あの時分のものに人を殺した犯人の事を解死人と言つた證據を澤山擧げて居りますけれども、出處は何處とも明かして居ない。唐律の闘殺の條に下手人と云ふ字があります。喧嘩をして其人を殺した場合に下手人とあります。道中方日記には正徳四年十二月十二日、松平紀伊守被仰渡に「解死人と書候文字、向後下手人と相認可申旨被仰出候」とあります。是までは解死人と書いて居たのでせう。

○若樹 是は跡で解の字を宛てたではありませんか。音便でしたのかも知れません。

○鳶魚 昔の官人が任滿ちて滞りなく引繼ぎが濟んだ趣の文書を後任の人から取つて朝廷へ差出す解由といふものがある。被害者があつて加害者が知れる、それで一件は濟む、即ち解死人なのでせう。

○若樹 「小言て」ほやと云ふ語原が分つて居ますか。意味はぶつ／＼言ふのだらうけれど……。

○鳶魚 それがほやくのか分りませんか。

○仙秀 「加判」は。

○鳶魚 加判だから本人の外の判をすることを加判と云ふ、今で言へば證人だ。「しかつへらしくは「鹿瓜らしい」と言ひますね。

○若樹 俚言集覽には「然有つ可し也」、同増補に「然りつべきらしの略語歟といふ」とあつて眞面目の意味でせう。蜀山の狂歌の弟子で後に俳諧歌を唱道した狂歌師に鹿津部の眞顔といふのがある。此證文にて事治り宿の娘も次第に心よく中直りの酒酌かはして夜も更ければ二人はやがて打臥したるに程無く夜明て案内の人々起立たる物音に目を覺し支度調のへそこ／＼に立出るとて、強「コレは大きにお世話になりやした、とにいろ／＼なことでお氣の毒な、亭主「御機嫌ようお出なされ、女房「モシ／＼お梯子がムりますわいな、強「イヤもふそれはこちらにおるてくんなせへ、今日は所々見物して晚程またお世話になりやせうから、亭主「イエ／＼お持なされ、そしてこちや晚程はおさし合があるわいなト一體亭主はこの二人をうろんに思ふたりし故梯子も預かるゝ氣味悪く如何なる後難やあらんと受け付けざれば、詮方なく又かの梯子をうち擔ぎ此處を立出で、北「ナント今日はどうの方へまごつくのだ、強「イヤまだ東山に見物してへ所があるが、マアけふは北野の天神

様へ行きやせうとだん／＼道をたづねてほり川どふりに出北、時に思ひ出した事がある、ソレ伊勢の古市で京の人と一座したが儘にその人は千本通中立賣とやらいつたが北野の天神様へ行く道だといつたじやアねへか、彌「ア、サ邊栗屋の與太九郎が、北「ソレ／＼其奴が所へ尋ねていつて酒でも呑で遣ろふじやアねへか、彌「ナニあたじけなすびが呑せるものか、北「處をおいらが術に懸て呑倒そふト往來の人に千本通りを尋ね中立賣に至り邊栗屋與太九郎の方へやう／＼と尋ね當りてれいの梯子をのきに立掛て、彌次郎「御免なせへト格子戸をあけてはいれば、與太九郎「誰じやいなコリヤ珍らしいよふお登りじやわいな、彌「扱マア伊勢では大きにお世話になりやした、與太「なんのいなサアこちはいりんかいな、北「ハイお久しうござりやす、與太「イヤ是は／＼まだ表にお連様があるそふじや、北「二人ばかり誰もおりやせん、與太「夫でもアリヤ何じやいな、彌「梯子のことかへ、與太「何じや梯子お持せかいなコリヤきよとい、北「イヤお前のところは中立賣ひよいとあがる所だといひなすつたから、もしも高い所なら梯子掛て登ふと思つて態々求めて持参いたし升た、與太「ハ、ハ、ハ、コリヤおでけじやわいな、時に何もお愛相がないお支度は如何じやいな、彌「アイ今朝宿屋で食べた儘中食は未だ致しやせん、與太「ソリヤお楽しみやじわいな酒なと上たいが此邊に酒屋はなし、北「酒屋はじつきにお隣に有るじやアねへか、與太「イヤあこでは小賣は致しません

わいな折角のお出お燗草でもあがりなされ、北「煙草はこつちのだから勝手に致しやせう、與太「お前方せめてもちつと先へよつてお出なさるときやうとい者があるわいな、桂川の若鮎生きておるのを鹽焼か魚田にするかねからはからうまいの何のといふよふなこつちやないわいな、イヤまだ四條の生洲が近いとお供していこもの、あこの鱧は加茂川で晒してとつと違ふたものじや、きやうとうまいがな、そしてあこは玉子焼をゑらうよふしてくはすわいな、何じやあると是程に大きう切おつてほつと息の出るのを南京の薄鉢に盛て出し居るが味いといふては根から含んで持やうじやわいな、ホンニ夫よりまた秋にお出なさるととり／＼の松茸じや、當所の名物でこれが又外にはないないな、新しいのをすましの吸物にしてちよつと山葵落して酒の肴に致そなら、とつともふなんほ喰ふても飽きがないわいなト話ばかりして何も出さぬ故、北八堪へかねて、そつと拔出て隣の酒屋へ飲に行、話に身を入れて與太九郎は一向北八の逃たるをしらす、與太「イヤ最一人のお方は何處へいかんしたぞいな、彌「もふ歸りやした、與太「はて借ねからしなんだわいな何時の間に入んで、あつたぞいな、彌「今松茸のお吸物の出た時中座致しやした、與太「ソリヤ残り多い後段にまだお菓子のお話し致そもの、彌「イヤもふ先程から大きにお馳走になりやせぬ、お蔭でひもじいお暇致しやせう、與太「イヤお待らなされよいところへお出たわいな少とお話があるわいな、アノ



都名所圖會所載

伊勢の古市でお付合申した時の事いな、あの時の入
用金壹兩じやあつたが俺や算用違ひして金壹分貳
朱此方から出して置たさかい、コレ見なされ、道
中の小遣帳におやまの書付も何も彼もこないに細
に書付て置いたが内へ戻つて算用して見るとお前
方一人前百廿四文ヅ、俺の方へお貰ひ申さねば算
用が合んわいな、僅かのこつちやさかいどしても
だんないが取にしくはないさかい、お二人分貳百
四十八文お貰ひ申ましょかいな、彌「エ、お前も今
となつて穢ねへ事をいふ、そればかりの事うつち
やつて置きなせへ、こつちでも立換へた事があり
やす、與太「ソリヤ上るのがあらば上るさかい云ひ
なされ算用は算用じや、マア此方へ取るのが此通
りじやさかい斯しましよわいな、はしたを負けて

あぎよわいな貳百文くしなされ、彌「エ、けへぶんの悪い其時取ればいゝものをと小言八百いへど
も合點せず、かれこれとせり合た所が果しつかず彌次郎面倒也とて二百文出してやるト「ハ、ハ、ハ、
ハ、コリヤ御きんとうじやわいな、是からお前方は天神様へ行かんすじやあろ、そしたら序でに平
野さま金閣寺へ行かんしたがよいわいな、遅なるさかい早う行て戻らんせ、彌「大きにお世話トふ
くれづらして立出れば隣の酒屋より北八によつこり出来りて、北「如何だ御馳走がありやしたか、
彌「いめへましい目に逢つた、何の手前が尋ねてよらすともいゝ物を錢貳百只取られた、北「ハ、ハ、ハ、
ハ、どふして、彌「いゝは其代にアノ梯子の厄介ものをこゝにうつちやつて置いて困らせて遣り
なせへ、彌「ナアニ困るもんたぢきに賣て錢にするは、あの野郎めに梯子まで只取られてつまるも
のかやつはりかついでゆかふト夫より道を尋ねくゝ行程に森の下といふ處に至る。

○鳶魚 「今日ほどつちの方へまごつくのだ」の「まごつく」が分らない、それから「あたじけなす
び」が分らない。

○共古 それは唯、茄子に掛けた言葉で、あたじけない奴だと云ふ「な」から来て縁語にした。

○鳶魚 かたじけなといふ、「な」を茄子に持つて來たのですか。かたじけをあたじけと語路にした
のですか。それで「あたじけな」といふ事はどうでせう、それが分らない。それから東京でも申す

やうですが、「御きんとう」といふことがあります。ごきんとうが分らない。

○共古 均しいと云ふ事です。

○鳶魚 均當と云ふことでせうか。

○共古 私はさうだらうと思ふ。

○若樹 喜といふ字が書いてあります。

○共古 金銭でも何でも共通り返して毫も違へないのが均當です。ちやんと均當する。

○若樹 今でも見て居りますのに、均と云ふ字を書いたものは無い。

○共古 言海などにさう云ふ風な説明があると思つて居ります。「きんとう」と云ふことを能く言ふ。

「御均當様」と言ます。

○若樹 此「まごつく」はマゴくすると云ふ處から來て居るでせう。「マゴく」と云ふことは形容だから説明しにくい。

○共古 「根からくんで持やうじやわいな」南京の薄皿に盛て出し居るが味いと云ては根から……。

○鳶魚 味がいゝから嚙込んで了ふのも惜しいと云ふのでせう。

○共古 「魚田」は魚の田樂でせうな。

○鳶魚 是はさうでせう。

○若樹 茲に口で以て斯う云ふやうな色々な御馳走して歸す趣向は、狂言の鱧庖丁から考へ附いたのだらうと思ひます。鱧庖丁に伯父さんの處へ行つて口でごまかされて歸るのがあります。多分それからとつたのでせう。一九は趣向を狂言から取るのが常套手段ですから……。

○共古 今は何處の家も餘り南京の薄皿はありませんが、南京の薄皿と云ふ物はナカノ、貴い。井になつてゐるものもある。好い焼で大明嘉靖位の年號はチョツと書いてあります。昔はよくあつたものです。

○若樹 此時分に流行つたのでせう。文政二年の愚佛先生の太平新曲に江戸者嘲京の題下の中に、鉢



京都名所圖會所載

藤栗毛繪講

遺ニ南京一出ニ煎枯といふ一句があります。京都の生洲は同じく太平新曲中に「憶生洲無錢、扇長火滅生吉明、鮓嘉常與ニ佞陶爭、非ニ是寒中囉ニ鮓貌、何論大儀荷葡棚」。又同題で「松源松清固無緣、丁稚生洲我當前、無レ那財布抛不響、纒殘豆腐一挺錢」と見えて名高いものであります。傍證とすべきは上方で云ふ起し繪、東京で言ふ切組燈籠、切り抜いて組立てる錦繪、是が上方から江戸に來たのは文化文政あたりですが、最初江戸に來た切組繪は多く京の生洲などの畫であつた。江戸でもそれを其儘板にして暫くの間は其まゝ行はれて居たといふことです。それで見ても生洲が京都の名物であつたことが分ります。

○鳶魚 其時分に四條の生洲の事を描いたものがありませうか。

○若樹 都名所圖會に生洲の圖が出てゐます。

○仙秀 「あたじけなすびが呑せるものか」ところをおるらが術に掛けて呑倒そふ、術は手段に掛けてと云ふことでせうけれども、術と云ふ言葉は弘前の方では今でも用ゐてゐます。つまり忍術、劍術などの術から出たので、彼奴は術に掛けてやるかと云ふ、術策といふ意味ですな。さういふ古めかしい言葉が今でも田舎に残つて居る。

○共古 吉利支丹の魔法と事ふ方から來て居る、天竺徳兵衛などは術でせう。出さない物を出さして

やる。

○仙秀 反對に術にかゝつて了つた。

○若樹 北野様へ行く途中で、千本通中立賣と云ふ處は、北野から二三町こつち手前ですから、丁度道程も無理が無く出來て居る。

此所は至つて賑かにて芝居などもあり、見世物豆蔵讀賣講釋、又唐茶釜と異名せし霞寶張の水茶屋體なるもの所々に在り、是れに可笑しき趣向あれども作者思ふ處あれば省きぬ、是より北野天満宮社内へ掛る道に茶飯田樂を賣茶屋夥しくあり、赤前垂の女軒に出て「あなたお休みなかいな、茶飯おでんあがらんかいな、茶ちやあがつてお出んかいな、彌「モシ」わつちらア天神様へ參詣してけへりにお前の處で休みやせうから此梯子を此所に置てくんなせへ、茶屋「ハイ」お預り申ましよわいな、早う行てお出なされ、彌「お頼み申やすと梯子を茶屋の門に立掛て置行過て「ヤレヤレ重荷おろした、何の歸りに寄るものか、ナント北八、梯子を捨て智恵はどふた、北「ハ、ハ、ハ、面白くもねへと經堂前より右近の馬場に至る此處は何時借馬夥多出て馬の稽古あり見物夥し、北「ヤア凄じい人だ何かあるさうだと立寄て人を押分け見れば馬のかけを乗る人「ヒヤアトウノ、見物の間の聲「ワアイ引見物」皆ゑらい下手じや七軒戻かして腰がふなつきおる、アノ葛菫

玉見るやうな天窓の親父奴がえらう良う乗くさるわい、見物「アリヤ」したたこつちやわいな博勞の親方じや、見物「かいなアレあつちやの男見やんせ手綱を綾にとつてあないな手附しておる、アリヤ大方織屋の手傳じやあるぞい、そしてアレノ十二坊の弟子坊の珠數爪繰やうなこととして手綱持つてじやはいな、北「俺も一鞍乗てへな向に見てるる姉様にト人込の中女連が二三人立て見てる後へ廻り見物しながら前になる娘の尻をらよいと抓る、娘「ヲ、痛やの誰さんじやいな、コレお丸さんこち来てかしんかいな、丸「何じやいな、娘「誰じや「ら妾がお臀を抓たわいな、年増の女「ソリヤ女子の無い國で生れた人さんじやあるぞいな、かまわんすなほつて置んせ、彌「エ、北八か悪い酒落をするなへ、北「ナニおいらア知らねへと言ひさま憎さも憎し、かの年増女の臀を抓つてやらうと側目しながら、側に寄り年増の臀と思ひ負つてるる子の臀を思ふさま抓ると、子「ア、痛いノとわつと泣く年増の女「誰じやいな悪いことさんすわいな、負さつて居る子「アノおぢさんが抓つたわいのふ、女「エ、好ん人さんじやわいな、彌「堪忍しなせい、さりととは外聞の悪い男だト足早にすこ〜と此所を過て南の御門より入て天満宮の社へ参る、

お守を首にかけつゝとまんなさいふの宮をうつす神垣

北野天満宮は昔近江國比良社の神主良種神勅を蒙り朝日寺の僧最珍右京の文字等と力を合せて

靈祠を造り天徳三年右大臣師輔卿薨々たる大厦を改め營み給ふ今の北野宮これなり、社頭に渡邊の網が納しと言ひ傳ふ石燈籠苔蒸してあり、

網の名はいまだに朽ぬ石燈籠むかしを今に三ツほしの紋

東向觀音は梅櫻の二樹をもつて音神御手づから刻ませ給ふ所なりといへり、

御利益は四方にかほれる觀世音梅さくらにてつくり給へば

夫より社内を抜て平野の社に参る此御神は四座にて今木神久度神古開神比咩神也、

こゝろよく飯ふために本膳の平野の神を祈りこそせめ

○鳶魚 「豆藏」

○若樹 豆藏と云ふのは大道でやる手品師でせう。元は人の名でせうか、それが大道手品師の代名詞

になつたのでせう。

○竹清追記 寶曆八年刊俳諧俗談卷三に、貞享元祿の頃攝津國に一人の乞士あり、名を豆藏といふ、市町に出て常に重き物を捧けて錢を乞へ、又一人の小兒を梯に登らせて、其身は楊枝をくわへ、梯を楊枝の先へ立て、起居ゆく事にまかす、小兒も亦馴て怖れず、或は長き鎗を鼻の先へ、倒に立て行、または藁のしべ一筋を鼻の先へ立て其のしべ倒れず、唯練磨のみと云、また外に人あり、腹の

上に大きな臼を置いて仰て杵にてつかしめ、或は瓮を腹の上に置いて人二人、それに登つて躍ると云ふ、請身といふ類ならんかと云とあり。

○鳶魚 「から茶釜」はどうです。東京なら「茶まが」だ。

○二葉 唐金の茶釜で、茶まがの中に茶は無いと云ふ兩方へ掛つて居る。

○鳶魚 馬鹿に骨の折れた茶釜だな。

○共古 是は賣淫婦ですか。

○二葉 賣淫婦です。

○共古 中ノ森、下ノ森、上ノ森といふのがありますか。

○若樹 知りません。

○共古 併しマア有るとしてありますな、古い處には……。

○筑波 馬に乗つて居る者が「忍らひ下手ぢや七軒戻」

○鳶魚 是は上七軒。

○二葉 「うこんの馬場」など跡が残つて居りますか。

○共古 馬場は残つて居ります。そこでやはり競馬か何かあります。

○鳶魚 「經堂前」御經堂でもありませんか。

○共古 經王堂前でせうな。それは北野の中ノ森に在ります。足利義滿が、山名氏清と戦つて、氏清の首を獲たから其追福の爲に一萬部の經卷を納めた堂があります。それが經王堂です、それでせう。それが北野の中ノ森だから。

○鳶魚 經王は法華の事を言ふのではあるまいか。

○共古 それは知りません。

○鳶魚 一萬部法華が有るのでせう。一萬部誦誦するのでせう。供養の爲になるでせう。

○共古 「うこんの馬場」は北野の東の鳥居前より南、下でせう。

○鳶魚 「十二坊」はどうです。

○若樹 北野の地に十二坊と云ふ處があります。御寺が澤山あります。今でも十二坊と言つて居ります。あの邊から鷹ヶ峰へ行く、途中通る處です、富士谷御杖先生の墓などある處です。

○鳶魚 狂歌は三つ四つありますから、是非先生に願ひたい。

○共古 別に無い。掛けると云ふのは、財布を宰府へ繫けて、首へ掛けると云ふことを繫けて來たでせう。モウ一つ綱の名は今だに石燈籠、私は知らんけれども、渡邊綱が納めた石燈籠が北野に在る



都名所圖會所載

と見えます。

○若樹 今でもありますけれども、三ツ星の紋は付いてるない様です。これは只昔を今に見るから三ツ星の紋と渡邊の綱の紋を利かした狂歌の上のことだけでせう。

○鳶魚 「御利益は四方にかをれる」とは

○共古 香ると云ふのは梅へ掛けただけでせう。

○鳶魚 此處の観音は梅の木と櫻で拵へたと云ふ事です。

○若樹 此處に書いてありました。

○鳶魚 今度は「こゝろよし」だ。

○共古 本膳から平を持つて来ただけであります、久殿神は竈の神であります、今木神は菅公が斯んな處へ關係してゐるのでせうか。

○鳶魚 此處は平野社の方でせう。それは神主さんの方へ願つた方が穩便でせう。モウ此處は無いやうでもありません。樋口さんに願ひませう。

此處に紙屋川の邊に二軒茶屋あり、二人は空腹となりたるに支度せんと此茶屋にはいれば女共出迎ひて、女「よふお出たわいなヅイト奥へお出被成、彌「なんぞ味へ物があるかね、飯も食ひたし酒も飲みたしマアちよびとした物で一杯早く頼みやすぞト奥のゑん先に腰を掛ると女銚子盃を持出る看はほし鮎の煮びたしなり彌次郎、彌「早速これは有難へ、女中ひとつつぎ給へ、ヲットありやす〜、女「お看上よわいなコリヤわたしが心の丈じやぞへ、彌「ハア此鮎がお前の心意氣とはどふだ、女「わたしはナおまいさんが川鮎といふこつちやわいな、彌「コリヤ有難へ、そんならお前にもあけやせう、女「ヲホ、此生姜が何としてお前さんの心じやへ、彌「わしやはちかみイ、北「ハ、ハ、ハ、こちつけるもんだ、時に女中田樂で飯を早くくんせへ、女「ハイ〜、只今ト聽て女田樂と飯を持来る、二人は食事しながら見れば突立の彼方にさもむさくろしき出家二人、麻のころものよごれたるをきて是も田樂にて飯くひながら一人の僧の言ふを聞けば「ナント役戒坊、貴様髪は何處でゆぞいの、役「ヲ、持戒坊、わりさまも俺が結ふ所で結はんせ、あこはきやうとうよう結ふわいの俺や久しうのんこ鬚に結ふてじやあつたが今は流行らんさかい、コレ見やんせ雷子に結ふて貰ふ

だが、えらう氣持がよふて堪らんわいなと言ひつゝ、淺黄の頭巾を取れば此坊様身には麻のころもきながら頭は卷鬢にて芝居のやつしといふ髪なり、彌次郎北八を見て膽を潰し可笑き半分、不思議そふに覗ひ見れば、役ハ、ア成程よふ結びくさつた、俺や又此方の弟子坊に結せるが、もふノ月代が無茶じやさかい見て下んせ、何時の間にかやら斯様に刺こかしをつたわいなト是も頭巾をとれば鬢は頸窩にある刺下奴なり、彌次郎餘りに合點行かず堪へかねて、「モシお隣のお客様、俺等は遠國の者でござりやすが、所々歩いてゐる内いろく様々な珍らしいことも見聞しやしたけれど、御出家方の髪結たを見るは誠に今が始め、どうも合點が行やせぬ、幸爾ながらお前方は何處のお方でござりやすね、役ハ、ア此頭の御不審かいな、此方や空也堂の僧じやわいな、彌成程な話に聞てるやした彼の茶笥賣るお方だな、役ハ、さよじやわいな、此方の宗體は昔から山緒があつて、こないに身には染衣を著しながら天窓は大俗凡夫じやわいな、彌それで聞へやしたは何故又お前方のゐなさる所を空也堂と言ひやすね、役ハ、さればいな此方の宗體では如何したこつちややら代々皆えらい大食で、飯じやあろが何じやあろが、なんほでもよふ食ふさかい、齋非時によばれて往ても強附けられて、もつとくふや如何じやいなと人毎にいふたを直に空也堂と言ふわいな、持「そじやさかいコレ見やんせちよと此處へ來ても一人でお鉢三杯食ふたわいな、彌ソリヤ塗方

もねへ大食ひだもつともわつちらもくつたものさ、何時やらも信濃へ行きやした、ナニがあつちは飯處で御座りやすから先朝すつと起ると茶受にとて座頭の天窓程ある握飯を出しやすが、あつちの手合は子供でさへ夫を十四五程つゝも食ひやす、俺は折悪く氣分が悪くて碌に食もいけやせんんだが、十七八斗も食やしたろう、さうすると體て飯が出来たとつてその亭主が言ふには江戸のお客はおあんばへが悪いといふ事だから今朝は麥飯をたきましたとつて何がとろ汁を摺た程に摺た程に摺鉢の二十斗りも其處に並べてあると思ひなせへさうすると椀へ盛が面倒だと家内の奴等は皆共摺鉢一つづゝ引請けて麥飯を其中へ山のよふに盛て食ひおる、俺も絶食同前であるが麥は好物で堪へられやせんからせめて一摺鉢もやつて見やうと食かゝつた所が口當りがいゝからするノと何のことなしに滑り込で到頭摺鉢に五六杯も食やしたるふが今では頓と食が減やした、役「ソリヤお前も飯は素人じやないわいの、ナント飯盛さんせいかな、彌「アノ飯盛がこゝにもありやすかね、役「ハ、ハ、ハ、お前の言ふてじやのは道中の飯盛じやある、そじやないわいな、こちとらが仲間でするは、酒呑む衆が酒盛と言ふ格で飯を互ひに食ひ合ふを飯盛と言ふわいな、ちとやて見やんせ、幸に此方もまだ飯が食ひ足んさかい、相手欲さの玉手箱じやわいな、北「どふやら面白そふなこつたが夫れはどふするのでござりやすね、役「マア何じやあるとやて見なされ、モ

シ女中ちよと来て下んせお鉢のお替りじや、女「ハイ、ト飯鉢に一杯持来ると、役「サア始めんかい、イヤ亭主役にわしからやろわいなト茶漬茶碗に飯を盛つてさつ」と食ひしまひて、役「サア、お前さそかいなと彌次郎へ彼茶碗を突付て杓子を取「酒盛ならお酌といふ所、飯盛じやさかいお杓子致しましよかいなと彌次郎がもちたる茶碗へ飯を盛付ける、彌「コリヤ俺が食ふのかね、役「さよじやく、彌「ハ、ア聞へやした盃を廻す心だねと彌次郎彼の一杯の飯を食ひしまひて茶碗を役戒坊の方へさすと、役「コリヤ氣疎い押へましよかい、彌「イヤ先づ、持はてお前も一杯重ねなされ俺助てあぎよわいなト無理に又一杯盛付ると、彌「そんならお前助けてくんなせへト飯を盛てある茶碗を持戒に渡せば持戒坊三口程食ひて「是も酒じやと附差じやけれど飯じやさかい食差じや、彌「エ、お前の共鬨むしやくしやと不掃除な口中で食差はあやまるの、しかもソレ、水漬を垂してさ、持「ナ言ふてじやぞいなそないな事いふて飯盛附合がなるかいな早う食んして誰になと差んしたがよいわいな、彌「ソリヤ情ない扱々飯盛といふのはきたねへものだもふ、俺は御免なせへ、役「イヤお前麥飯を摺鉢に四五杯も食んしたと言ふてじやないかいな卑怯なこと言んす、かうさんせ一拳いかんせ、彌「そんなら拳でまいろうか、持「宜ろわいの、其代り否應とんと言さんぞやト彼茶碗の上へ盛添へて、持「サア、薩摩けんじやサンナ、彌「ムメで、持「トウライ

ゑらいか、サア、上りなされ共癖お鉢の替りじやト無理無體突付られ彌次郎面倒なりと我慢を起しやうくと食しまへば、役戒坊「最一つやらんせお鉢の替りめじや、彌「イヤもう、御免々々、役「コリヤやくたいじや、お前は田舎じやな麥や挽割の交たのをあがりつけてるさんさかいこないな一本木の米ばかりの飯はよふ上らんもんじやあろぞいな、彌「ナニ俺等の猪の牙のやうな飯でなくちやア食やせん、役「さるな是が猪の牙じやわいの、彌「そんならお前替目の合を頼みやす役「ソリヤ宜わいな、とても事の事に大きな物でお積りにしよじやないかいなト茶漬の入てありし井を打明て飯を盛へろくと食つてしまひ、持戒坊へ廻すと是もしたまよそつて食ひしまひ、サアあぎよわいな、イヤ飯でにちやくするト縁先の手水鉢へ井を入洗ひて「サアすましたわいのお積りじや、彌「イヤ、もふいかぬ、そしてきたねへ人が雪陣へ行た手を洗つた手水鉢ですました井それでどふしてくへるものか、役「そしたら此茶碗で、彌「イヤもう腹が裂るよふだ、夫に聞なせへ今の一杯やらかしてゐた時何か懐の中でぶつゝりといふ音がしたから探つて見たら越中禪の紐が切る位に腹が張り切て来たものを、もう、お宥し、役「ハ、ハ、ハ、もうよしなさいやわいな、女「御酒とおでんの代物八十文でござりますがお飯は五百七十二文戴きたうござり

ます、役「ソリヤ氣疎う安いもんじや割合に致そかいなト此代鏡勘定して半分の拂ひすれば、彌「ソリヤ餘りだお飯はお前方がしこたまあがつて俺はたつた一膳か二膳食たもの二ツ割とは不承知だね、持「何言はんすぞいな、一座で飯盛さんしたもののよふ食んはお前方の勝手じやないかいなト遣つ返しつ是も理詰に彌次郎詮方なく、とう／＼二ツ割にして此所の拂ひをなしければ僧二人は早くも先に立て出たるに、北「ハ、ハ、ハ、いゝ見世物だサア彌次さんどふだ行ねへか、彌「チ、サイきてへが餘り食過て動かれねへ、どふぞ手を引てそろ／＼立せてくれ、北「エ、意氣地のねへサア起なせへ、彌「コレサ手荒くしてくれな飯が口から出るよふだ、北「テモ汚ねへ事を言ふサア／＼立な／＼ト言ひつゝ彌次郎の手を取り引立れば漸々に起上りて出掛る、女「おゆるりとお出なされ、北「アイお世話になりやした、サア彌次さんいかねへか、どふする／＼、はじめから人を茶にして何ばいもやたらに飯を空也寺の僧

○二葉 「のんこ髷」は分りません。

○若樹 紙屋川は京都でかい川と言ひます。是は北野神社の西を流れる、昔是は禁裏の反故紙で紙を漉いた、北川の邊で紙を漉いたもので其紙を宿紙と云ふ、所謂薄墨の繪旨になるのです。

○煙崖 紙屋川は鷹ヶ峰の光悦寺の下を流れて此北野の西へ出て來るのですが、此川の水は茶に最も

可い水だと云ふことです。

○共古 「のんこ髷」と云ふのは知りませんが、何か芝居にはございせんか。

○二葉 芝居にあるかと思ひますが。

○鳶魚 「のんこ髷」は何かの畫で見たやうに思ひます。林君心當はありせんか、大將髷のやうな髷ですよ。髪をのんこに結つたと云ふことが何かにあつたやうに思ひます。



寛政十二
年板「役
者百人一
首化粧
鑑一所載

○仙秀 のんこ髷その物は私にも分りませんが、かの陶器師ののんこといふのは、その頃ののんこ髷といふのがあつた。その唄は松の葉にあります。西鶴物にも、のんやほゝ髷の事がありました。そのをどりをすきな所からのんこの髷名

を得たと云ふことです。そんなことから傳はつて來て、一種の結髪の方法が——恐らくその舞踊のさまが飄逸であらうと思はれる。のんこ髷のやうに結髪の方法をかしげに思はれるといふ意味ぢやありますまいか。チョット御参考に申します。

○二葉 それから「雷子」は役者の名ぢやないかと思ひます。ところが菓子器に雷子と云ふのがありま

す。丁度壺の細いやうな物で、蓋があつて頭の處へチヨイト何か附いて居る、それか知らんと思ふけれども、私には分りません。

○鳶魚 雷子は、上方役者でせう。嵐吉三郎の俳名です。吉三郎が始めた鬨でせう。

○若樹 一番終ひに住吉へ行つたのはアレぢやありませんか。

○鳶魚 アレは違ひます。

○鳶魚 「芝居のやつし」は。

○二葉 「つゝころばし」でせう。鬨の鬨がいやに生々しいやうな色ツほいやうな鬨をして居ります。

○鳶魚 描いた物はありませんか。

○二葉 ありません。

○若樹 「巻鬨」

○鳶魚 是は畫がほしいな、のんこ鬨は何か有つたやうに思ふ。

○二葉 此處では「のんこ」と「雷子」とそれから「そりさけ奴」是だけの畫が要りますね。

○鳶魚 「そりさけ奴」の畫は是は何處にもある。

○若樹 空也寺の僧といふと茶笏をかたけて必ず瓢箪を持つて居る様に畫くけれども、それは間違つ

て居ると云ふことが何かの隨筆で見たことがあります。一は鉢叩きで修行に出る處です。一は大服用の茶笏を賣る時に出る處で、全然別な時のことです。多くはそれを一緒にしてゐる。決して兩方一緒に持つべきものぢやない、それから食競をするると云ふのは是は空也寺といふところから、喰ふ

Pranias



(載所考雜貞筠)

○二葉 さうだらうと思ふ。

○共古 茶笏賣に来る。是は歳末に限るやうです。空也寺の事は宜いでせう。空也寺は天台宗の派に屬する、さうして仁明帝の皇子常康親王の子空也上人を祖とす、京の空也堂を本山として、一老の上人のみ清僧なり、徒弟は多く優婆塞にて瓢を叩き無常頌

文を唱へ又茶笏を作り歳末に市中に賣る、之を鉢叩と云ふ、上人は延喜三年に生れて天祿三年の九月十一日會津八葉寺にて往生、上人が關東に赴き玉ふは十一月十三日なれば毎歲此日歡喜雀躍念佛



原 本 挿 畫

を修す、是が空也寺の略縁起であります。

○若樹 閑田耕筆、アレは寛政あたりの執筆でせうが、空也の像の服装は元祿あたりとは丸で違つて居る。元祿時代以前には法衣を着て居ない、何でも素袍みだやうな物を着て居ると書いてあります。それは當時の圖書です、それが近世の畫かきが畫くと、何時代でも當り前の僧の形装をして居る。

○筑波 何かに書いてございました。それは素袍みだやうなもので、鷹羽のやうなものが出て居りました。

○仙秀 「相手ほしさの玉手箱」は、あけてくやしき玉手箱の口合です。

○若樹 此平野の二軒茶屋といふのは、藤屋と花

屋と云ふのださうです。

○共古 祇園の二軒茶屋と云ふやうな按排に此處にも有るかね。

○若樹 此處にもある。

○仙秀 「拳」ですな、これを御説明を願ひたい。

○鳶魚 「薩摩拳」は分からんやうですな。

○若樹 「猪の牙」のやうな飯といふと好い米の白くて綺麗に光つて居ると云ふ奴でせうね。

○鳶魚 「しこたま」喰つたといふのは、是は「しよこたま」と書いてあります。東京では「しこたま」

○若樹 飯盛をすると云ふことは架空でせうな。割前勘定が分らん。どうも片方は一人でせう。坊主は二人で喰つたのだから、つまり三分の二を坊さんが拂はなければならぬ譯だけれども、此割合は少し可笑しい。

○鳶魚 三割りと云ふ譯だな。

○若樹 北八は喰つてゐるかな。

○仙秀 本にはかいてありません。

○共古 幾分か喰つたでせう。「しこ」は怪物のやうで怪しいことを云ふ。

是より又天神の社内にかへりたるが、東の門より一條通りに入る道をしらすうか／＼ともときし南向の門を出たるに思はずもかの梯子を預けし茶屋の角近くなれば彌次郎兵衛心づきて、彌次郎待て先刻の梯子が矢張彼處に立掛てある、エ、こつちの方へ來なんたらよかつた物を、北八又後へ戻ろふか、北、成程彼處へ休まずに直通にしたらひよつと見付たとき例の梯子持ていけと云だろうしと云つて又跡へ戻るもごうはらだ、どふぞい、智恵がありそふな物だと、立止りて思案してゐるうち、うこんの馬場の借馬一疋はくろうがひいて來るを見るより、北「イヤい、事がある／＼ぞアノ馬の横腹の方にくつついて茶屋の前を通れば馬の影になつてゐるからよもや見付はしめへじやアねへか、彌「ヲ、サ夫がい、コリヤ大出來だ／＼ト後より來るしやく馬を見合ゐるうち、やがて側近くなれば二人とも並んで馬のかけに隠れゆくと、丁度彼の梯子を預けし茶屋の前に到りて馬は立止りて動かす、二人は駈抜て茶屋に見付られてはせん方なしと思ひ同じく馬の横腹の方へついて立止りゐるべくろう馬を打て、エ、このならずめは何しをるのじや、日が暮るはやいト打てども動かすやがて馬は小便をしやア／＼、彌次郎北八にとぼしりはねて小便だらけとなり、彌「エ、コリヤ又なさけないめにあふ事だ、北「ア、臭い／＼ソレ彌次さんお前の方へ流れるは、彌「畜生めが飛だ目に合せるこれは／＼トとびのけば、向の茶屋の角先にゐる女が目早く見付て

「モシナ／＼こつちやでムりますわいな、サアおはいりなされ、北「ソリヤこそ見付られた、彌「コリヤたまらぬ／＼ト一目散に駈出せば茶屋の亭主飛で出「コレナ梯子がムりますわいなオ、イノトよびたつれど耳にも入す二人は眞黒になりかけて行兩人はやう／＼息をはかりに駈いだして下の森をうちすぎもとの千本どふりに出今宵は鳴原の廊中を見物してやす見世もあらば一宿せばやと申合せて往來の人に道すがらを尋ね千本さがりて行程に町をはなれて東寺に至る。

手折んと手を出す人を鬼ならめ東寺わたりの花のさかりに夫より壬生寺に参りて、こゝに霞簀かどさきに立よせたるあやしの茶見世に引込れてその夜の宿と定め打臥たるが、翌日鳴原を見物し朱雀野より丹波街道を横切りに淀の大橋に至り爰より下り舟に打のりて大阪へとおもむきける。

○若樹 無いやうだな、ズツと後の方ですけれども、下の森を打過元の千本通にいで、今宵は鳴原の廊中を見物して安見世もあらば一宿せばやと申合せて往來の人に道すがらたづね千本下りて行程に町をはなれて東寺に至り」といふと、鳴原をいつの間にかうか／＼と通り過ぎたのでせう。東寺迄行けば鳴原はアトになる。此處は一寸可笑しい。

○鳶魚 其次に「鳴原を見物し朱雀野より丹波街道をよ／＼ぎりに淀の大橋」

○若樹 ア、成程々々、翌る日壬生寺からアト戻りをして嶋原を見物して、それから丹波街道を横切つて淀の大橋まで真直だから是は宜い。

○鳶魚 「手を出す」は茨城童子の手でも貸したかね。

○共古 世間で羅生門を今の東寺の仁王門とさう心得て居る人が多いいけれども、實は今の東寺の仁王門ぢやない、羅生門は羅生門、千本の四塚に此門の舊地があり、東寺の西の方に當つて大内裏の南門があつた、それが櫻が澤山あつたでせう。これを東寺の仁王門と一般の人は同じやうに心得て、その狂歌も出たのでせう。それから私は實は能く知らないが、先達て林君にも言ひましたが、出口米吉さんの説に淀の大橋が違つて居る。此淀の大橋と云ふと山城の久世郡淀といふ木津川に沿うて橋西とあります。淀の小橋と云ふのは淀の東の宇治川に架するものである。世間では小橋を大橋と言つて居つたのぢやないか。

○若樹 だけれども、それは京都の人に聞いて見ましたが、淀川は餘程流域が違つて居るから、文化あたりの地理で、今の説で行つては間違ふ筈だと言つて居ります。

○共古 さうですかね、ズツと古いところには皆斯う言つて居ると云ふのですな。

○若樹 外には無いやうですな。

第十六回

八編 卷之上

仙秀 若樹 共古 竹清 鼠骨
二葉 華洲 鳶魚 筑波 煙崖

押照や難波の津は海内秀異の大都會にして、諸國の賈船木津安治の兩川口にみよしをならべいかりをつらねて、こゝにもろくの荷物を繋ぎ、繁昌の地いふばかりなし、殊更花のはるは淀川に棹さしてさくらの宮にあそび、網嶋の鮎卵に酔を催ふし、難波新地の納涼に螢をかり、豆茶に腹をこやし、秋はうかむ瀬の月、冬は解船町の雪けしき、四季をりくのながめおほかる中に、目枯ぬ花の曲中はいつもさかりの春のごとくにぎはひ、道頓堀の芝居はつねも貌みせの心地して群集絶す、かゝる名譽の地を見残すも本意なしとて、かの彌次郎兵衛北八なるものふし見の畫舟に途中より飛乗してはやくも大阪の八軒屋にいたり、爰より舟をさがりたるは最早たそがれ時にして東西南北をわきまへざれば、人に尋ね問つゝ長町をさしてゆくほどに、境筋通を南にむかひ日本橋へ出たりければ、宿引ともこゝに居合せ兩人を見かけて宿の相談をしかくるに、早速きはまりすぐさま此長町の七丁目なる分銅河内屋といふにぞつれゆきける。

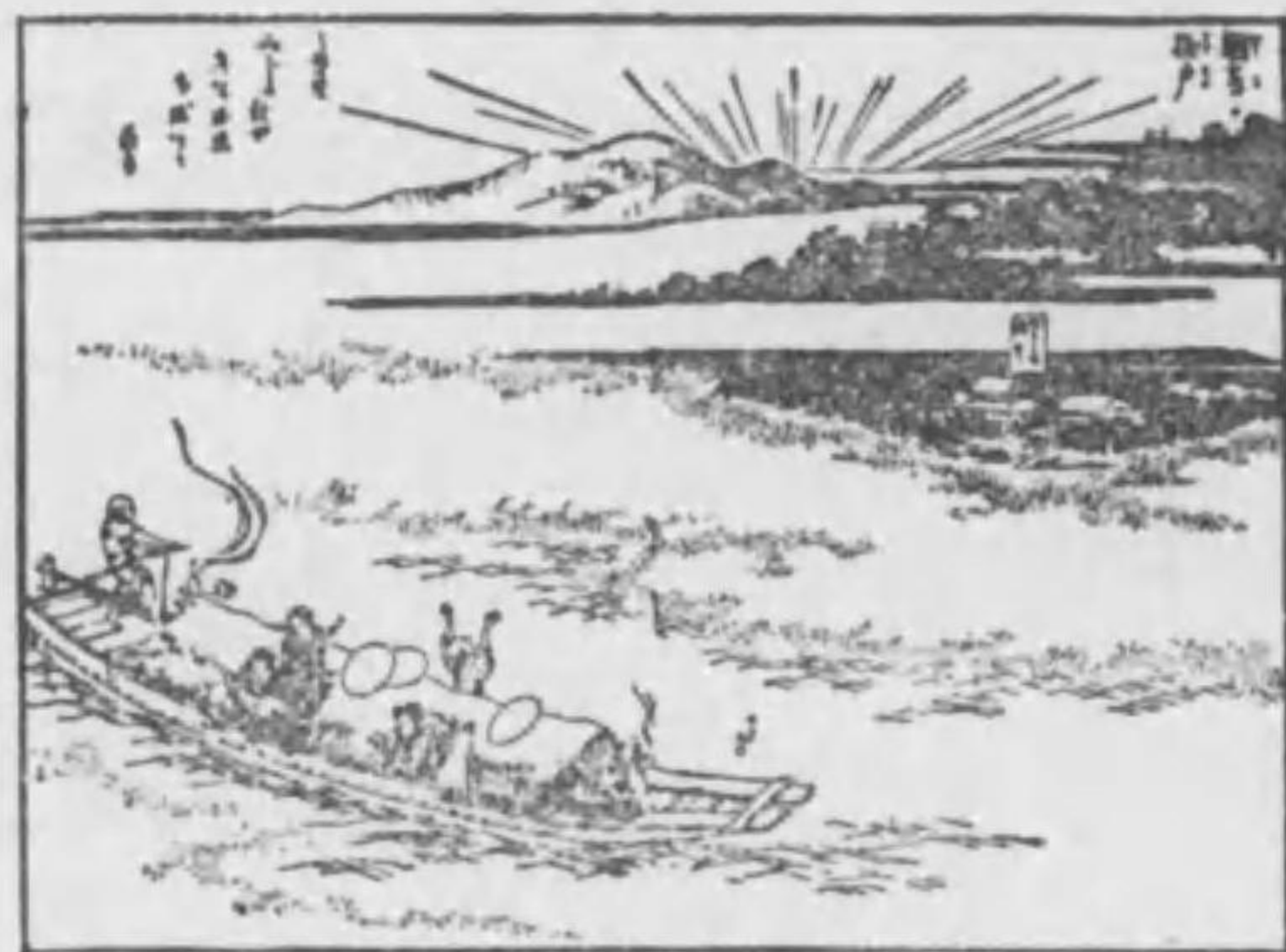


木津川安治川口

○二葉 此處は些ともども分らないですがね。
 難波の津は海外に秀でた所の都會であつた、
 諸國の商ひ船が木津川安治川の兩川口から出入
 りをして、此處に錨をつらね、茲に色々の荷物
 を輻湊して揚卸したり、或は又茲で賣買の取引
 をする繁昌な地である。誠に花の春には淀川に
 棹さして、淀川畔の櫻の宮で遊山をした。此櫻
 の宮に櫻は今さう無いさうですが、元はナカ
 ナカ櫻の有つた處ださうであります。網島は淀
 川畔に在る處で、鮎卵と云ふのは今も此料理屋
 が有るさうです。是はナカ／＼好い料理で、東
 京で言へば、チヨツと柳嶋の橋本と言つたやう
 な、マア意氣を兼ねた所の料理屋で、總て變つ



難波の服所載



難波の服所載

た料理だつたさうですが、今では總て當前の料理屋になつて居ると云ふ事でございます。夏は御承
 知の難波新地の納涼に、此處にも今はさう螢狩などはどうか知りませんが、元は随分螢が出たので
 膝栗毛輪講

登翁をしたのださうです。豆茶屋と云ふのは分りません。秋はうかむ瀬の月、冬は解船町の雪景色、是は何處だか私は存じません。どうか一つ御者を願ひます。四季の眺めの多い中に、のかりの花の廓は何時も眼の枯れない、何時も賑かな花の咲いて居るやうな廓であつた、道頓堀の芝居は常に顔見世狂言であるかの如く盛に群集して居る。斯う云ふ響れの地だから、これを見送すのも本意で無いと彌次郎北八は晝船の途中、是は晝船は分りませんが、伏見へ来る道で何でも何處かで夜が明けろのだが、京都から戻るので途中で乗つたのだから、夜が明けてから乗つたのぢやないかと思ひますが、此晝船は分りません。早くも大阪の八軒屋へ来て此處で船を上つたのがモウ黄昏時であつて西も東も分らない。又南北の方もどつちへ行つて宜いか知らない。人に尋ねながら長町、是は貧乏人の大勢居る處で、町並としては餘り宜い處ではないが、非常に賑かな處たさうです。そこを指して堀筋通を南へ日本橋の方へ出ると、宿引に逢つてそこで宿の相談が出来た。此長町七丁目なる分銅河内屋と云ふ宿屋に著いた。

○若樹 この異本に、殊更花の春は天保山の何とか云ふ事が書いてありませう。それはつまり後に幾版も何時までも膝栗毛が賣れて居る、天保後の新板と言はなくちや面白くないので、そんな字を入れたらしい。さう云ふ矛盾したものが出来て了つた。

○鳶魚 押照やは難波の枕詞でそれは和訓栞に喜撰式の説を探つて、潮出ると云ふ言葉から来て居ると云ふ説があります。それは三村君の御裁決を願ふ言葉でせう。それから難波新地の納涼と云ふのは、此難波新地は一體享保八年から出来ただけれども、其周囲は久しい開野原でありましたのを、明和の元年二月から其周囲を開墾した。それから文化の六年に能の定舞臺が出来、其年に大角瓶の興行があつて、その翌年、角瓶の定場所になつた。それから人家も建揃つて賑かになつた。其處に又深川移しの切店も出来て来た。何れ文化七年以後の話なので、丁度此本が出来たのが文化八年でございませうから、その盛んな町並になつた時の話ぢやない。其前の話だから登翁も出来たらうと思ひます。關取千兩幟にも「芝居は南米市は北相撲と能の常舞臺堀江々々と」云々とある。それから豆茶屋と云ふのは浪華百事談の中に瑞龍寺の表門より一町東に南へ通する道があつて、其西南の角の處に豆茶屋と云ふのがあつた。さうして天保には名のみ残つて居て茶屋はなかつた。其處には曉鐘成が住つて居つた。さうして豆茶屋の有つたのは何時の頃か分らないと書いてございます。此浪華百事談は明治二十七八年の頃に書いた物らしいでございますから、そんな事を言つたのでせうが、併し是で見ると此文化年代に豆茶屋は確かに有つたので、其場所は難波村らしいでございます。それから解船町は大阪町鑑に據ると若狭堀の南濱に在りと書いてございます。

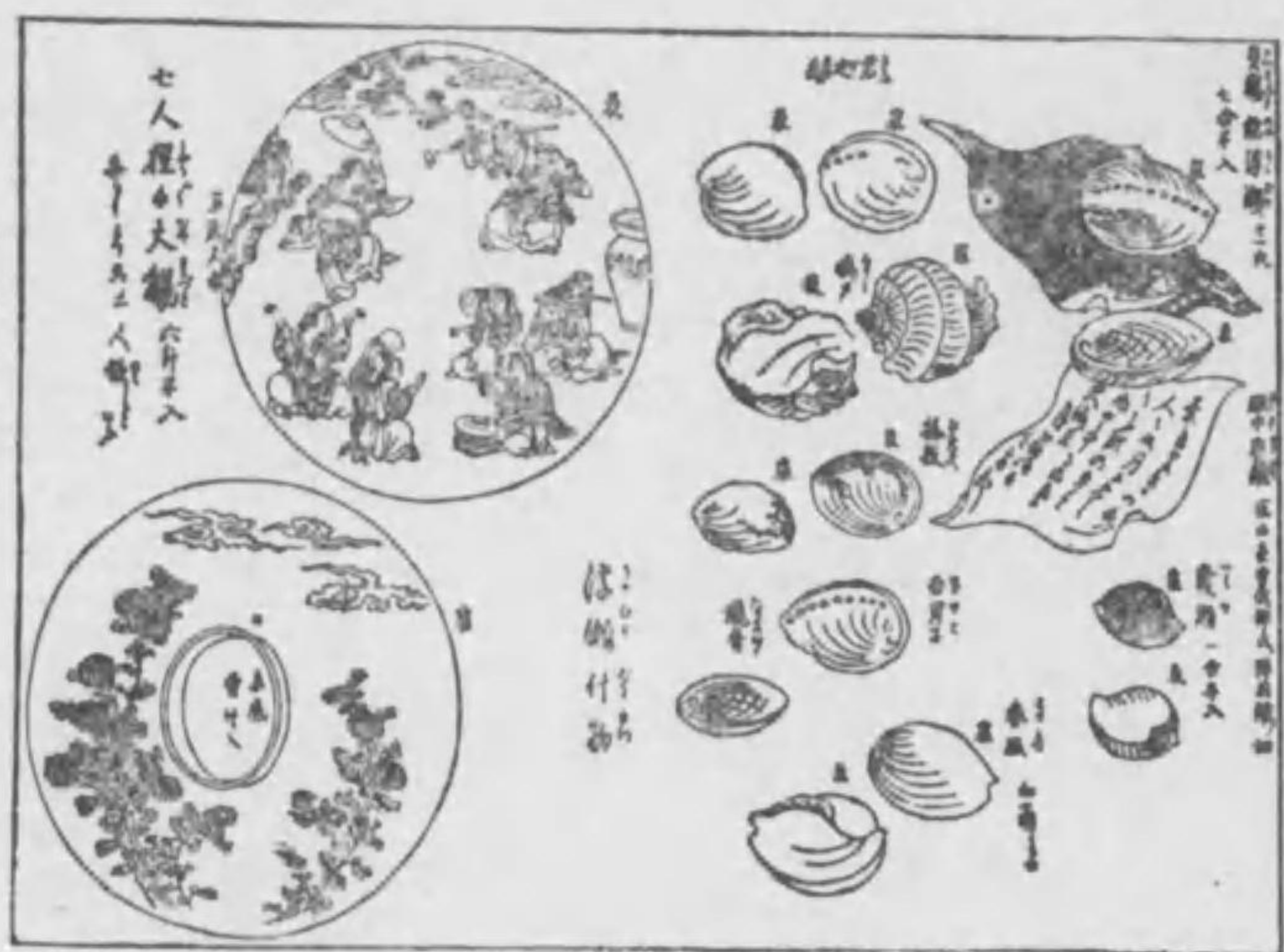


載所販之波難

一三八

○若樹 松川半山の「浪華の賑」に「解船町、此地は阿波座敷の南側にして、瀬戸物町の南にあり、河海、の古船を解きほどきて其板柱等を商ふ家軒をならぶ、是他邦には少き活業なり」とあります。それから櫻の宮ですが同じ「浪華の賑」に「當社は舊野田の小橋故大和川の堤、宇を櫻野といへる處に有しを後世此に移す故に舊地の傍名を以て櫻野宮と申せしが、何時しか社頭の傍に數百株櫻を植ゑしより今は櫻の宮と稱して花ゆへ名づけし如くなるも、所謂名証自稱なるべし」と見えます。

○共古 押照やは浪の襲ひ立つと云ふ言葉で、その枕詞の解釋です。押照と云ふ事は浪が襲ひ立つと云ふ所から、浪花が出たといふことになる。



載所會圖所名津攝

○若樹 「秋はうかむ瀬」

○竹清 新清水の坂の下に在つた風流の宴席であつた。是は浪華賑の二篇に在ります。此通りに書いて了つた方が宜いでせう。此遊宴の樓は新清水の坂の下に在りて風流の席なり、遙かに西南を見渡せば海原往來ふ百船の白帆、淡路嶋山に落かゝる三日の月、雪の景色は言ふも更なり、庭中の花紅葉の木々、春秋の草々を植て四時共に眺に飽ざる遊觀の勝地なり、名にしたふ浮瀬幾瀬の貝殻を初め種々の珍物又七人狸々の大盃等を秘藏す、浪華に於て貨食家の魁たるものなり」とあります。また水落露石君の「搦蛙亭隨筆」二〇一に「浮瀬賑」

この程大阪史談會の催にかゝる展覽會に赴きし

に参考品の中に浮瀬の貝觶數ヶ並にかの名高き狸々もやうの大觶(六升五合入)あり、曾て蕪村が「小春風眞帆も七合五勺哉」の句をよめりし鮑貝の觶はその中の最大なるものにて箱に浮瀬の銘あり、唐織やうの布にて包みありしが帛紗の裏は白地にて左の文字見ゆ

葉月中の三日の夜人みな月にめでうかふ瀬の貝にて酒のみ斗る即興に

大海の月を飲みほす今宵哉

筆者は何人なりや、のみ人知らずなれば不分明、此他に

君か爲、鳴戸、梅ヶ枝、幾瀬、吾背子、春風、瀧の音、

等銘せる大小十三ヶの貝觶ありき、攝津名所圖會に曰く

浮瀬といふ遊筵の看樓は新清水に隣る、もと此名は貝觶の銘にて其器を見るに鮑の貝の上の穴あるを塞ぎて酒をこれに盛れば七合半もれる也、これに満酌して飲する人を譽とし暢酣轆を出だし其名を著すこれ風俗也云々

かゝれば、夜半翁はもとより几童大江丸などの人々の名も或はその暢酣轆中に見出し得んことあながち空想とのみにはあらざるべくさてこの標今將た何人の有にや歸せし豈由々しからずとせん哉」とあります。

○鼠骨 浮む瀬は蕪村が句に詠んだ盃と云ふのがありませう。其貝盃が三四重あつて大きい貝から段々あつて一番大きいのは七合五勺這入る。うかふ瀬に遊びてむかし栢庭か此處にての狂句を慕ひ出て其風調にならふ」といふ前書のついた「小春風眞帆も七合五勺哉」と云ふ蕪村の句がある。澤山さう云ふ人達が名所として遊んで、さうして發句など作つて居るさうです。

○鳶魚 一番大い盃は、鮑貝の十二穴の有る奴です。十二穴の有る物でないと七合五勺這入る物でないといふこととす。

○仙秀追記 司馬江漢の「西遊日記」に(天明八年)、八月廿日、天晴、此日伏見より六右衛門参る、共に浮ぶ瀬(大阪)と云ふ茶屋へ来る、此處は年々和蘭人此の茶屋へ来る由、大座敷二間あり、山岸に家を造る、向ふは畑見えるなり、赤前垂の中居數人出て酌を取る、と見ゆ。

○竹清 豆茶屋はどう云ふ譯で豆茶屋と言ふのでせうか。

○鳶魚 どう云ふ譯か分りません。只豆茶屋と言ふ。

○竹清 私 は豆茶を飲ませる所ではないかと思ひます。

○鳶魚 御茶を飲ませるのぢやないと思ひますがね。

○共古 伏見の賣船。

○若樹 朝出るから晝船ぢやありませんか。

○二葉 夜船と晝船と二つある。

○若樹 朝出た船は晩に著く、夜出た船はあけ方に著く。それから八軒屋へ上つて、茲に東西を知らず南北を辨へざればと云ふ位ですから、八軒屋あたりに澤山宿屋が有つたさうだが、マア行けば此處へ泊らなければならん譯だけれども、是はズツと紀州街道の方の便宜を持つて居る。長町の七丁目の分銅河内屋と云ふ處まで行くのは、多分此分銅河内屋を一九が大に知つて居つて、やはり伊勢の古市の藤屋と同じ様に一種の廣告手段になつたのぢやないかと思ひます。

○二葉 さうかも知れませんが。道筋から言へば直ぐ出て泊らなければならぬ。

○鼠骨 長町は近松の長町女腹切のあつた長町でせう。餘程古いものです。

○鳶魚 何だか丁度東京の馬喰町のやうな旅人宿で御安直の處らしい。

○竹清 「浪華 賑」第二篇日本橋の條にも書いてあります。「此道は北詰より北を堺筋といひ南詰より南九丁を長町といふ、紀州泉州よりの喉口にして往來常に繁く兩詰には旅舎軒を並べ(中略)長町九丁目の間にも旅舎多く就中瓢箪河内屋分銅河内屋などいへる大家有りて數百人を宿す、此町筋に傘を製する家多くありて浪華の名物とす」とあります。

○筑波 今でも分銅河内屋は有るさうですけれども、今は斯んな譯ぢやない。元は道者宿で大きな家だけれども今は……。

○竹清 電車は此方側は八軒屋に行くのです。

○筑波 私の聞いて来たのは鮎卯と云ふのを聞いて来た。鮎卯は今でも網嶋、もと大乗寺の隣に在つて今藤田傳三郎氏の屋敷の在る。今でも鮎卯なる料理店だと聞いて居ります。それから私が聞いた豆茶屋と云ふのは、鐵眼寺の前に在つた休茶屋であつて、其處に阿多福の人形があつて、色々な物を飲ました。これは維新の初まで有つたと云ふ事を聞いて居ります。それで浮む瀬は新清水の阪の中腹に在つた料理店だが、今は無い。それから解船町、今は河原町にあつて其處に船の古いのを賣つて居る處があるさうです。其處だと云ふ事だけは聞きました。

○若樹 道頓堀の芝居などは言はなくても宜い。

○竹清 秋はうかむ瀬、大津湯の月とありますが……。

○鼠骨 それは新本でせう。道頓堀はやつて置いて貰ふ方がいゝでせう。

○若樹 是は安井道頓が掘つた川だと云ふのです。大體さう云ふことと聞いて居ります。道頓堀に近年まで道頓の家の棧敷が一つ取つてありました。何だか木の札のやうな物で、焼印が捺してあつ

た。

○竹清　ところが今では道頓堀の芝居も櫓が上つた活動寫眞になつて居る。

やど引さきにかけて、「サア／＼お客様を御伴して来たわいな、やとやのばんとう」「これはよふお出なされました、おいくたりさまでござります、彌「ハイ同行四拾七人、ばんとう」「ナニ四十七人さま、コレ／＼おさんどのや大勢様じや、西のおくの間を打ぬいてあけさんせ、よふきれいに掃出したがよいわいの、コレ久三おあしお洗ひなさるお湯はどふじやい、ぬるてもだんない、水なとうめてあけませい、はやう／＼、時にもしその四十七人様はいこおあとかいな、彌「イヤ是は先達で鎌くらへ發足、われ／＼兩人はこれより泉州堺の天川屋へ、ばんとう」「エ、なんのこつちやいな、やつはりおふたりかいな、コレ／＼おつんやおふたりじやといな、こつちやのおひとり居しやしやるせまいとこにさんせ、おつん「ハイ／＼御案内いたしましたしよわいな、ト此うち兩人はあしをあらひあがりて見るに、此宿は當所すい一の大家にしておよそ間かず七八十もありといはり、兩人女につれられてゆくに、おくのくちもとの六てうばかりなる小ざしきへは入、外に一人この間にとまり合せてゐることなれば、ばんとう「おゆるしなされませ、とふぞモシ御究屈にござりましたよか御一所になされて下さりませ、此旅人は丹波の人」「だんないてや、サア／＼此方

へわせさつしやい、北「これは御めんなせへ、彌「モシわつちらア二三日も逗留して所々見物がした
いから、おたのみ申やす、ばんとう「ハイかしこまりました、先ゆるりと、トいひすて／＼かつてへ
ゆく、たんばの人「コリヤわごりよたちはどこからきよりました、北「わつちらア江戸でござりや
す、おめへは、たんばの人「わしは丹波のさ／＼山在郷今度高野へのきより升、コリヤあらいな縁で
相やどしよりますわいな、彌「とかくたびは道つれ、お心安いがよふござりやす、ト此内やどの女
ま／＼上げましょかいな、ト三せんもち來りすへる、しよくじの内いろ／＼あれともりやくす、や
がてめしもすみ、湯へも入てしまふと大あばたの女あんまいやらしきふうにてさぐり／＼きたり
て「おりやうちはよござりますかいな、どふぞもましておくれんかいな、彌「イヤあんまさんか、
おめへ女だの、しかも生てゐらア、北八どふだ、もまねへか、北「こつちからもんでやりてへ、
あんま「ヲ、おかし、何いひじややら、おまいさんかたはお江戸じやな、わしやアノ、おゑとのお
かたはすきじやわいな、とのたちは男らしうてものゆふてじやとこがゑらいすつぱりとしてよい
わいな、北「おめへさつぱり目が見へやせんか、見へると此内にとんだい／＼おとこがるるに見せて
へなア、あんま「そじやあろぞいな、彌「ナントあんまさん此男よりわつちがい／＼男か、そふして年
はどつちがわけへ、あて／＼見なせへ、あたつたならふたりながらもんでらひやせう、あんま「ソリ

ヤいつきにあてるわいな、北「コリヤおもしろへ、サアおいらはいくつぐらいた、あんま「まちなさ
れ、おまいさんは二十三四、北「コリヤきついは、男はい、男だらうね、あんま「さよじやお顔はよ
ふ道具がそろふてじや、北「かけてあつてつまるものか、あんま「お目がゑらいいつかいお目じやあ
ろがな、そしてお鼻は、北「高いかひくいかな、あんま「こういふたらおはらがたとかしらんが、たし
かにししまひばなじやあるぞいな、たんば「ハ、ハ、ハ、きよとい、強「おいらはどふだ、あん
ま「あなたはいこふけてお出じやわいな、おとしは四十ばかりでおいろがくろふてはなのひらい
た解だらけなおかほじやあるがな、北「きめう、あんま「そしてほやけぶとりによふ肥てるなさ
るじやある、強「イヤちがつた、おいらはひんなりとしている男、北「うそをつく、コリヤあん
まさんがからだ、もんでやりな、強「やくそくだからしかたがねへ、爰へきてくんな、あんま「ヲホ
ホ、ハ、ハ、それへさんせうかへ、ト彌次郎がうしろへまはりてもみにかゝるト

○鳶魚 此中ではどうも何も無いやうだが、此「久三」と云ふのを茲には久三と書いてありますが、
原本の方では久三と書いてある。それを見ますと旦那氣質卷三に「丸顔な久三を銘々一人つゝ供に
つれ」と書いてあります。さうすると此久三と云ふのは一人の名では無い事が分る。同じ本の卷四
にも「侍女手代、久三乳母まで付」と書いてありますから、斯う云ふ雇人の一種だと云ふ事が分る。

近代長者鑑には「久三も桐のさし下駄、手代は龍紋の小袖」とあります。だから手代より餘程悪い
者だと思ふ。諸商人世帯氣質の中に「供に行く久三を呼返し」云々とある。斯う云ふ所から推して
下男だと云ふ事が分る。又浮世草紙などに、久三郎と書いたものもあります。どうして下男のやうな
者を久三と言ふか、是は古參新參と云ふ言葉と同じやうな舊參といふ事になつて、新しい僕ぢやな
い、舊僕と云ふ事であらうと思ひます。

- 若樹 古參といふ言は今も言ふが、舊參と云ふ事を外に言ひますか。
- 鳶魚 言ひます。坊主など舊參の僧と言ひます。
- 若樹 それの移りかね。
- 鳶魚 随分寺から來た言葉が一般民間に這入つたのがあります。
- 竹清 小僧さんと言ひますからね。
- 若樹 餘り巧過ぎるな。
- 鳶魚 それがいけなかつたら落第だ。
- 若樹 お三どんと一緒の地位になれば宜い。さう云ふ舊參とか古參まで附けなくても……。
- 鳶魚 さうするとお三どんにして間に合す、お三は女形、男形で行けば三助と言へば片附きます。



(畫挿本原)家軒八

が、久の字が困る。依つて件の如し久の字に困る。

○若樹 一度聞いて感心し、二度聞いてまた疑を生ずる。

○鳶魚 餘程上手に嵌めようと思つたがな……もうさうすると後は甚だ排底だ。

○若樹 此洒落は忠臣蔵の洒落だ。

○鳶魚 天川屋儀平は忠臣蔵を洒落れたと云ふ事が分る。それから下の「サア〜」此方へわせさつしやい」は丹波の方言ですか。

○共古 「わせり」「趁る」と云ふ同じ事だ。馳ると云ふこと。

○二葉 「渡らせ」の意味ぢやないか。

○鳶魚 それから大事なと言ふ處に「だんな

い」と云ふのは、淨瑠璃語として屢々用ゐられて居る。上方ではさうでせう。

○二葉 「何處から來りました」

○鳶魚 それが訝しい。

○二葉 「來よる」とか「雨が降り居る」とか「行き居る」とかいふと、大概現在に遣はれてゐる。それが此處では「來よりました」と言ふのだから、過去の言葉でさう言つて居る。チョツと我々は訝しく思ふ。

○鳶魚 丹波の人が言ふでせうか、丹波語で「來よりました」と言ひますか。

○二葉 丹波語……是は四國西國と思ひます。

○鳶魚 其方言の混線ですね。

○二葉 丹波笹山の田舎者と云ふのが代名詞です。丹波笹山から生捕りました猿、總て丹波笹山、尤も田舎で山深いと思つて居る。それで丹波笹山とした。

○共古 「いこ」は是は古言ですか、一向と云ふ事ですか。

○竹清 甚だしいが宜いでせう。

○共古 「いこ」と云ふ言葉が來たのは「いこ」は「一向」と云ふのが短くなつたのでせう。

○鳶魚 「もし其四十七人様はいこ」

○二葉 大さうあとかいな、一向と云ふのは大きなと云ふ意味でございませう。いかい、大なる、大にあとですか、非常に遅れますかと云ふ事でありませう。是は京都の言葉ですね。

○竹清 忠臣藏天川屋は泉州堺から言つたのです。

○鼠骨 少し突然として居りますね。

○仙秀 これは長町は堺の御道筋であるから、忠臣藏を利かしたのでせう。

○竹清 やはり此處は林さんの言ふ通り宿屋の廣告をして居りますね。「此宿は當所隨一の大家」

○共古 鼻の事を獅子舞鼻と言ひます。是は江戸で餘り言はない、獅子つ鼻と言ひます。其次に「ほやけ太り」

○鳶魚 その「ほやけ」が分りません。

○共古 「ほやけ」は火焼で火でふくれる事。

○鳶魚 上方あたりではどんな風に太つたのでございませう。

○若樹 水ぶくれか酒ぶくれか、締つて居ないのだ。

○鳶魚 甚だ此ところ不徹底だな。

○二葉 併し火ぶくれと水ぶくれとは大變違ひますが、どつちです。

○共古 何でも面までがふくれて居る。

○二葉 微の生えたのが、ほやけだと言ひます。

○鼠骨 何だか軟かく太つて居なくちやいけな。堅く太つて居つちやいけな。

○竹清 「あなたはいこふけておるのでちやわいな」此「いこ」は甚しいといふことでせう。

此内女のくわしうりはこをかさねてもちきたり、「よふおとまりじやわいな、くわしん買ふておくれんかへ、北「ヒヤア、だん／＼と出てくるは、なか／＼いゝ菓子たぞ、おめへわつちらにうる氣か、くわしうり」さよじや、こちやおまいさんがたに賣たふて／＼ならんさかい、やう／＼はしりまふてさんじたわいな、彌上がたの女中は手があるの、くわしうり」手もあしもないがむちやにおまへさんがたにほれたのじやわいな、そふおもふてどふぞくわしんかふておくれや、ドレちや／＼くんでさんじやうかへ、とくわしほこをつき出しおいてかつてへゆくと、北「エ、つらのに／＼いほどしやべるやつだ、トいひつゝ彌次郎に目くばせしてそつとくわしのはこの下にかさねてあるはこより何やらくわしを五ツ六つとりいだし、うしろへちやつとかくすと、かのおんま手を出してそのくわしをそつとひつたくり、たもとへいるゝを、北八一かうにしらず、彌次郎もおなじく、く

わし三ツ四ツとり出すに、かつてより人おとするゆへちやつとはこはもとのごとくかさねておき、かのくわしはうしろのかたへかくすをあんまとり、これをもそつとせしめて、たもとにいるを彌次郎もいつかうにむらう作左衛門なり、此うちくわしうりの女ちやをくんでほんにのせもちきたりて、女「サアぬくひのをあがりなされ、彌「せつかくおめへきなさつたものをまんざらすけなくもしられめへ、トくわしはこのうちより、彌「これはいくらだ、くわしうり「ハイ、四せんづゝじやわいな、ソリヤもむない、こつちやあがつてみなされ、トならべたてゝすゝむるに彌次郎も北八もたんばの人もてんでにとつてくらふ、北「コウ待ねへ、むせうにくつてかすがしれめへ、くわしうり「よござります、なんほなとあがりなされ、こちやたゞでもあけよわいな、ノウおたごさん、あんま「さよじやわいな、サアよござります、こつちやのおかたもみましようかいな、彌次「チャもふしめへか、あんま「サアあなたわしがねきへよてかしんかいな、北「ソレよしかく、くわしうり「ちやく、最ひとつあがりなさらんかいな、あんま「おなべさん、御ちそうなされ、此お方々はゑらひ御心よしじやわいな、サアあなたおよこに、北八「もふ肩はしめへか、ごうぎにはしよるの、たんば「コリヤわりさまたちのくちまつにかゝつてゑらうくわしんくてのけた、何ほぞい、くわしうり「ハイ、お三人さまで貳百四拾八せんごござりますわいな、彌「チャとんだことをい

ふ、何そんなにくふものか、北八はいくつだ、北「さればいくつであつたか、たんば「わしは四文のを五ツくたから、ソリヤ二十やるぞ、北「そんならあとふたりで出すのか、ばか、しい菓子よりかはたごのほうやすい、くわしうり「そじやてもあがりなされたものをしよこがないじやないかいなヲホ、ハ、彌「イヤ、ヲホ、ハ、所じやアねへ、とんだめにあはせる、トこごとひながら、せんかたなくせにをはらひやると此うちあんまもんでしまふ、きた八「あんまさんはいくらだ、あんま「ハイおふたりでおあし一すじおくれな、北「ナニ五十ツ、か、コリヤたかい、トこれもあとではせひなく百文出してやるとふたりは立て行。

○筑波 何も無いやうです。

○若樹 「菓子ん」是は上方の人は非常に明瞭に發音するけれども、東京の人には出来ない。「くわしん」と云ふ事をはつきり發音致します。

○竹清 「くわし」と言はずに「くわしん」と言ひます。伊勢あたりでも「くわしん」と言ひます。

○若樹 東京の人は唯「かし」になつて了ふ。「くわ」と云ふ事が明瞭にならない。

○竹清 其代りに向うの人は「か」と云ふ時にも「くわ」と言ひます。よく東京の人は「ひ」を「し」といふと云つて笑ふが伊勢の人は「し」を「ひ」といふ。例へば質屋を「ひちや」叱かられるを「ひから

れる」といふ。或人が東京は火事が多いからひといふことを忌んでしといふと言つたが、それでは伊勢では死といふことを忌んでひといふといへば落語になる。學界の半可通にも困つたものサ。

○仙秀 茶の事を重ねて言ふ「茶々」といひますね。

○竹清 お湯の事を「ぶぶ」

○鳶魚 彼地では奇妙に茶々と言ひますな。それから「夢中作左衛門」はどう云ふことでございませう。

○共古 如何にも古い言葉です。

○華州 夢中作左衛門と云ふ言葉がありますか。

○共古 三田村君に御伺ひしたら元祿時分からあるさうです、つまり夢中だけでございませう。

○鳶魚 「もふ肩はしめへか、ごうきにはしよる」はしよる」と云ふのは省略する時に言ひます。

○竹清 其前に「せしめる」と云ふ事があります。前にやりましたか。

○鳶魚 やらない、是も何かのお説を伺ひたい。

○鼠骨 是は占領掠奪する意味で、占める、占有する事です。それから唯正當に取つたのは「せしめる」とは言はない。不當の利得でなくちやいけない。

○共古 「ナカ〜い、菓子だぞ」と言つたのは女の事です。

○鼠骨 菓子にかこつけて女を褒めた。

○竹清 女の方でもそんな事を言つてる。「走り舞ふて参じたわいな」と云ふ事は東京では言ひませんね。が紀州の人などはさう云ふ言葉を使ひます。走つて來たと云ふ事です。

○若樹 「むちや」

○鼠骨 「よてかしんかいな」

○竹清 「寄つて下さい」と云ふ事でせうね。

○鼠骨 「かしん」と云ふ古言でもありますか。

○若樹 菓子を喰ふ方ぢやない。

○華洲 貸せいと云ふ事でございませう。

○鼠骨 君の身體を貸せと云ふ事です。

○竹清 其前に……私の本が違つて居るか……「ハイノ、四文宛ぢやわいな、ソリヤ味ない」その餅が不味いと云ふ事でせう。

○鳶魚 一體大阪では「むもない」と言ひます。旨くないと云ふ事です。家内の事を「もむな」と書

いてあります。

○共古 「しよことかない」は。

○鳶魚 仕方が無いでせう。

○若樹 「わりさま」と云ふ事は丹波の言葉、「くちまつ」は口前ぢやないか。

○共古 やはり「くちまつ」で口先と云ふ事でありませう。

○若樹 そんな方言が有れば宜いが……。「わりさま」

○竹清 「我様」お前様方でせう。

○鼠骨 按摩の名前「お蛸さん」是は能く言ふ事ですな。

○竹清 お蛸さんと云ふのは一番はじめ、彌次郎の妹のお上さんでせう。一九が大さう好きだと見え

て始終出ます。

○共古 お蛸は吸付くと云ふのです。

○竹清 此前宿屋の女中に「おつんさん」と云ふのがございませう。

○鳶魚 それは返事をしないと云ふ事でせう。

○共古 「おふたりでおあし一すじ」

○筑波 分りません。

○鳶魚 下に「五十宛か」と書いてあるから百だ。「ナニ五十宛かコリヤ高い」とありますから百文だ。

○鼠骨 百文だけでも……。

○華洲 一すぢと言ひますか。

○鳶魚 纏にさすので、甲驛新話に「ひどいやつを二本とられた事ヨ、四文錢でか、オ、ヨ」とある。これは四文錢でせう、四文錢一本は二百になる。狂詩諺解に「一杖頭は二百文なり」と書いてあります。

○若樹 五十宛と言ふと本當の百だといふ事も一丁と言つて居るのですか。

○鳶魚 イ、エ。

○竹清 支那では一吊文、インデヤと言ひます。

○若樹 「コリヤ高い」と言ふが、當時の相場で高いと言へませうか。

○鳶魚 五十宛と云ふのは随分高い。

○華洲 二十四文位です。

○若樹 今の時代に按摩針イと言ふのは安いのだ。調子は變だけれども、此頃聞いて居ると按摩上下十五錢と言つて居ります。

○竹清追記 十五錢は此輪講時代の事、大正十一年には一回に御座候。上等は五圓也。

彌「上がったの女にやアゆだんがならねへ、しかしくわしうりめがおいらをいゝようにしたとおもつてけつかるであろふが、そふは虎の皮こつちにも荒神さまがあらア、馬鹿なつらなとつくに上ぐわしをこゝにはへ付ておいたをしらぬやつだ、トうしろをさがすに、せんこくのくわし見へず、北八もおなじくこゝにおいた筈だとたづぬるに、一かう見へず、かつてより女ちやわんとやぐわんをもちきたりて、「御退屈さまでござりましょ、お煮ばながでけました、トおいてゆく、北「エ、今があるとうどいゝのにどふしたしらん、たんば「ソリヤいんまのあんまとりめがとていんだもんじやあろハ、ハ、ハ、イヤこゝに忍いものがありよる、トうしろのやなぎごりをあけてちいさなまけものをとり出し、たんば「サア、コリヤ道修町の店でもらふてきよつたさとう漬じや、茶の子にひとつやらつしやれ、北八「コリヤありがてへ、彌次さんどうだ、たんば「やらかしねへ、たんば「イヤ、そんなにくてもらふてはならんわい、こちくされ、トひつたくりてそう／＼にしまふと、この内女ふとんを引ずりきたりて、「もふおとこのべましょかいな、トそこら

取かたづけるうち、かつてより今ひとりの女まくらふとんをもちきたり、ほうりこんでゆくを見れば、やつぱり今のあんまとりなり、みな／＼きもをつぶし、彌「モシ、女中今そこへ来た女はさつきのあんまじやアねへかの、女「さよじやわいな、北「どうして目が見へる、女「アリアお客さんがたへ出るに目あきではお心おきがあつてわるいさかい、おざしきへはあないに目の見へんふりして出てじやわいな、爰の内かたで過られますさかい、いにしなにはいつもあないに勝手を手つだふていんでじやわいな、彌「ヤアさてはおいらがことをよくあてたはづだ、目が見へるものを、北「そんならおいらがものしたのものしやアがつたにちけへはねへ、女「チ、おかし、おまいさんがたの源四郎してじやくはしんじやて、わたしもこないもりましたわいな、トたもとから出して見せ、打わらひかつてへゆく、北「大笑ひ／＼、彌「やつぱりあつちがしたつばらに毛のねへのだけは、ハ、ハ、ハ、ハ、

ろく／＼に按摩はとらずくわし返もこちに目のないゆへにとられた

○仙秀 「そふは虎の皮」己の方から金を取つたつもりで居るだらうけれども、さうは取れるものと云ふ程ぢやなからうかと思ひます。さうすると「こつちにも荒神様があらア」と云ふのは可笑しいな。此方にも荒神様が有ると云ふのはその虎の皮を未だ縮めて居る、その上手の荒神様が附いて

居るから、向うで取つたつもりの虎の皮でも、此方には荒神様が附いて居るからそんな馬鹿な目に遭はないでも宜いと云ふ事でせう。それから「此處にはへ附て置た」は胡魔化して置いたと云ふ事でせうけれども、語原などは精しく分りません。

○共古 「そふは虎の皮」

○竹清 「そふは虎の皮」と云ふ事を言ひませうか。

○共古 言ふけれども——さう巧くは虎の皮の禪と云ふ諺がありますが、此處はさう下らないやうな事をやつても居れない。己の方にも智慧があるのでさう巧くは取られぬと云ふところで、禪と云ふ方にも來るのでせうか。さう巧くはしめられないと云ふ處まで來るのでせう。「こつちにも荒神様が附いて居る」荒神様が銘々の上を擁護して居る。

○竹清 「けつかる」是は江戸言葉ですが、どうです。

○鳶魚 其前に「油斷」は如何でせう。

○共古 是は佛教言葉でせう。

○鳶魚 太平記には弓斷と書いてあります。

○共古 それは涅槃經の言葉だ。油鉢が斷えると云ふ事で、それから出た言葉ださうだ。僕は涅槃經

を見たのぢやない。然も油鉢の斷えると云ふところから出ると言ふのだから、油斷で宜からうと思ひます。

○華洲 「けつかる」は上方では皆使ふ。名古屋でも使ひます。名古屋の方が多いのです。

○若樹 東京の言葉だと思つてゐるが……。

○竹清 「はへ附て置た」

○共古 お菓子をはへ附けた。

○若樹 彌次郎北八のやうな人は江戸言葉で言へば「へえ附けた」と言はなければならぬ。

○竹清 ハイと云ふ事だとハイと言ひます。

○鼠骨 「はへる」なら分ります。分け取つて置いた。齒などはえると言ひます。分ける事を言ふ。

○鳶魚 「お煮花」是は上方で言ふでせうか。

○共古 能く知りませんね。

○竹清 何と言ふ。

○鳶魚 やはり好い色氣と云ふのでせう。

○竹清 お煮花と言ふでせう。

○鳶魚 それぢや心配は無ない、それから後の「砂糖漬」と「茶の子」是は上方かみかたに限かぎるでせう。東京とうきやうぢや茶ちやうけと言いひます。菓子くわしを持つて行く方かたから言いふのでせう。

○若樹 道修町どうしゆまち、是は藥屋やくやの間屋まやのある處ところです。砂糖漬屋さとうづけやはどうか知しらないが、藥種屋やくしゆやはあるのでせう。

○華洲 砂糖漬さとうづけは藥屋やくやで賣うります。天門冬てんもんとうとか、ア、云いふ物は皆藥屋みなやくやで賣うります。

○若樹 それで御土産おみやげに貰もらつたことが分わかる。

○鳶魚 モウ一つ「按摩取あんまとり」是も東京とうきやうでは按摩取あんまとりとは言いはない。

○共古 言いはない。

○竹清 それは何なんとか書かいてありました、大阪おほさかの按摩屋あんまやの看板かんばんは、何なんだか私わたしは可笑おかしいと思おもつた。

○若樹 古風こふうな處ところには「ナデ」と書かいてあります。

○竹清 さう、大阪おほさかでは到いたる處ところ「ナデ」「ハリ」でしたね。

○鳶魚 是は何處どこかの言葉ことばだね。

○仙秀 古ふるくは按摩取あんまとりと云いふ事ことが本ほんに出でて居ゐりますね。

○鳶魚 此時代このじだい位くらいからは東京とうきやうにも無ないでせう。どうも老人らうじんなどから、按摩取あんまとりるとか、按摩取あんまとりらせると

か云いふ事ことは聞きいた事ことが無ない。

○共古 「源四郎げんしやう」

○若樹 モツと前まへに在あります。

○鼠骨 「こちくされ」是これを下くだされ。

○若樹 「内方うちかたですきられます」

○鳶魚 「内方うちかた」はその家うちの事ことでございませう。

○若樹 妾めかけなどではありませんか。

○鳶魚 此處こゝの家うちの事ことを内方うちかたと言いひます。

○鼠骨 「内方うちかた」とは重おもに細君こはしくんの事ことを言いひます。

○鳶魚 内方うちかたで厄介やくかいになるとか言いひます。その家うちで厄介やくかいになると云いふ事ことです。

○竹清 解釋かいしやくするとむづかしい。東京とうきやうぢや「あないに」と云いふ事ことを言いはない。

○鳶魚 あの様ように。

○竹清 東京言葉とうきやうことばに翻譯ほんやくすると「あんなに」それから去さり際ぎはの事ことを「いにしな」と言いひませう。

○鳶魚 行きがけでせう。

○竹清 「勝手手傳ふてじやわいな」なども東京ぢや言はない。

○若樹 源四郎だね。

○華洲 東京でも。

○竹清 金々先生榮華夢に源四郎と云ふのがあります。

○鳶魚 是は學者言葉でせう。

○二葉 人形でせう。淨瑠璃などで致します。

○共古 上方の方では源四郎と言はないと云ふ事を聞いて居ります。一説に義太夫語の隠語だといふ説もあります。

○華洲 さうです、何だか名が違ひます。

○共古 何か樂屋の一つの言葉でせうな。

○華洲 「下腹に毛のねへ」と云ふのは狼でございませう。狼が年を取ると自分の毛を食つて了ふ。それで下腹に毛が無い。

○鳶魚 處が狼でも下腹の毛の一件はどうも變な事が一つある。斯んなのがあつて、萬の寶(落嘶)の中に、「下腹の毛の一本も無き轉んだことの無いと云ふ藝妓」とある。それから開卷百笑に「けた

物、べらばうめ、そんな大どしまはいや、そんならお狸さんはしたばらに毛が無い」とある。

○若樹 さう云ふ風に洒落に兩方に使ふでせう。

○鳶魚 是は下腹に毛の無いのが稀です。大抵化すと云ふのですが、是はその反對です。

○竹清 狂歌。

○仙秀 「ろく／＼に按摩は取らず」些とも按摩取をしない、こつちに眼が無い爲に物にした菓子を取られた。何だか此方に在つた物を取られたやうな工合に見えますけれども、是はごまかした物を取られたのだから當前です。唯その意味を利かしただけのやうに思ひます。

○若樹 モウ少し、こつちの眼の無いといふ事を按摩さんに引掛けた。それを取らずして取られた、是は按摩取の取らずに菓子の取られたのと兩方に掛けた。

○鼠骨 「も」の字が邪魔になる、菓子までもと云ふのが邪魔になる。按摩は取らないで菓子までもといふと、取らぬ上に尙菓子までも取らなかつた。「も」の一字頗る邪魔だ。是が爲に筋が通らぬ事になつて了ふ。

○鳶魚 往來止だ。筋が通らないから往來止の「も」だ。

○共古 按摩にこちが眼が無い故に菓子を取られた。

○仙秀 落首みたやうなものだ。本當の狂歌ですから無理が生ずる。

○共古 どれを見ても一九の狂歌だ。

斯打興じつゝ、それより三人とも蒲團ひつかぶりうちふしたるに、丹波の人ははやさきに高野かき出せど、ふたりはまだ寐入もやらず、彼是とはなしあふうち、裏通のはたけに犬の聲きこへ、割竹の音時のたいこもや九ツのかす打過る頃、きた八あたまをあけて、「コレ彌次さん、おめへこそ」と何をする、彌「なぜかあんまりねられねへから、ふつとおもひ出してコレ見や、足でこんなものをかきよせたは、トよぎの中からちいさなまけものをとり出して見せる、北「ヲヤソリヤさつきあの人の出したさとう濱じやアねへか、彌「コリヤ聲がたかい、柳ごりのわきに出てあるをさつきからにらんでおいたからよ、北「コウ一ツよこしねへ、彌「まて〜、トあんどくらくとをければ、いさいはわからず、かのまけものゝふたをとつて、ひとつつまんでくちにかつちり、彌「コリヤかたいは、北「ドレ〜、とまけものを引とり、是もつまんでくちにくしやり、にちや〜、北「フエ、なんだ、いつそ灰だらけなものだ、ベツベ〜、彌「コリヤさとう濱じやアねへ、なんだかおかしなにほひがする、トむねをわるくして、ゲイ〜といふこゑをきよつけて、たんばのおやぢ目をさまし、このていを見るよりびつくりしてはねおき、「ヤア〜、わりさまたら、

コリヤ、何しよる、わしが女房をなんぜくひよる、彌「ナニ、おめへのかみさまアなんのこつた、たんば「なんのこつちやとは情ないわいの、ソリヤわしが知音女房じやわいな、そのいれものゝふたをよふ見やしやれ、トいはれて、彌次郎とんでおき、あんどりの前にもちゆき、かのふたのかきつけをよみて見れば、彌「ハア、秋月妙光信女、ヤア〜、そんなら此曲物はおめへのかみさまの骨だな、北「ナニ骨とは、コリヤ大變〜、道りてむねがむかつく、エ、どふしよふ、たんば「わりさまたちのむねのわるなつたより、わしのむねがつつばつたわい、コリヤ、わしどもの村の所法則で、その骨を高野へおさめにもていきよるのでござるわいの、よふマア大切な佛をなんぜくひよつた、わりさまたちは眞人間じやありやしよまい、鬼か、ちくしやうか、どうしたのじややい〜、トたもとをかほにおしあて〜、おい〜となく、彌次郎もおかしき半分にはら立て、彌「エ、むつかしいこたアねへ、おめへがさつき柳ごりをあけたとき、ころけ出たをしらすに居たのは、そつちの無調法、それをさとう濱だとおもつてくつたのがこつちの龜相、ソリヤ五分々々だ、何もいさくさはねへわな、たんば「イヤ〜きかん〜、もとのとふりにまどつてかへしや〜、トいきせいはつて、なみだまじりにわめきちらせば、北「八いろ〜とことほりいひ、さま〜なだめすかして、やう〜となつとくさせ、しつまりければ、彌次郎もこゝろのう

ちにおかしさまざらかして、彌「イヤ、モウめんほくしてへもねへのさ、人の骨くふもことほり若いとき親の脛をもかじりたるみは

大阪夜中時廻の図



街能噂所載

○若樹 「割竹の音、時の太鼓」といふのは、割竹は火の用心ですか。

○華洲 さうです。○若樹 だつて時の太鼓を何處かで打つのですか。

○華洲 廻るのでせう。

○仙秀 「街能噂」に、「大阪にては夜のときを知らずには太鼓にて廻る其圖かくの如し、此太鼓の役

は自身番よりのさしづにして日雇を出すなり、但し大阪にては番太といふものは里丁のたくひ也」とあります。

○共古 これは太い竹の先を割つて置いて地面へひどかせて鐵棒の代にします。

○二葉 割竹の後かも知れませんが、鳴子を振つて歩いた事があります。やはり火事の時も、大阪長町あたりで、是は歌川國松君の話でありました。

○仙秀追記 司馬江漢の「西遊日記」に「時は太鼓を打つ、又は鳴子を鳴らす」と見ゆれば、それも古きことなるべし。

○華洲 九つの數とありますから、それを打つたかも知れません。

○竹清追記 こゝの話とは別なれど、田舎では太鼓を打つて廻ることあり、一軒々々に門から名を呼んで火の用心いゝかねといひあるくのでねられなかつたといふ笑話あり。九鼓は十二時なり。

○若樹 「知音女房じゃわいな」知音女房と云ふ事を丹波あたりで言ふのでせうか。

○共古 丹波あたりでなければ言ひさうもない。

○鳶魚 意味は戀女房と云ふ事でせうな。

○若樹 糟糠の妻でせう。

○竹清 馴染んだ女房と云ふ事でせう。

○鳶魚 親しくない女房などは骨が折れますな。

○竹清 特にです。……戀女房と言ふと可笑しい。

○若樹 曲物と砂糖漬と間違へる位に小さなものでせうかね、高野へ納める物が……。

○竹清 其ころだから小さな入物です。私は小母の白骨を持つて善光寺へ行つたが、小さい物です。

○共古 咽佛ですな。

○若樹 是は有りさうな事だね。

○竹清 追記 或地方では三昧にて骨を拾ふに喉佛のを收めて、あとは捨て、ゆく由、喉佛は本人生前の姿ありとてこれを大切にする風あり。

○鼠骨 誰かやつた人がありましたらうね。……「まどふてかへしや」は東京で言ひますか。

○竹清 伊勢ぢや言ひます。

○若樹 償ふと云ふことでせう。

○共古 「よふまア大切な佛を」

○華洲 義太夫などで大切なと言ひます。

○共古 「い」の字は要らない、助字だね。

○若樹 之に依ると紀州に行く人は紀州街道の爲にする、長町あたりは宜いのです。

○竹清 秋月妙光信女は眞言宗のものでせうか。

○鳶魚 どうも眞言宗らしくない。

○竹清 本當を言ふと此門徒宗などは高野へ納めないでせう。アレは大谷へ納める。法華は私は身延へ行つたことは無いが、身延に白骨堂がありませう。

○共古 身延には白骨堂と云ふ程のものでない。身延の白骨堂は御祖師様のです。

○若樹 「私共の村の所法則」と言つたのでせうな。

○鳶魚 さうでせう。

○若樹 随分面白い屁理窟だね。お前が柳行李をあけた時ころけ落ちたのを知らずに居たのは其方の無調法、それを砂糖漬と思つて喰つたのは此方の龜相だ。それで五分々々は随分理窟だね。

○仙秀 田舎者と思つて馬鹿にしたのだ。

○筑波 「いさくさ」は。

○鳶魚 此前も聞いた。

○共古 言ひ艸。

○若樹 狂歌、人の物を齧るのも道理、若い時には親の脛を齧つたこともあるから當前だ。

○共古 一體親の脛を齧るといふことは何でせう。親が勞力として働いた、それを喰ふ。

○若樹 車屋の子だな。

○共古 脛は足の事だ。親の手と言つても宜いが、やはり脛と言つたですね。

○竹清 親の腕をしゃぶるとか齧るとか云ひませうが、脛を齧ると云ふのは可笑しい。何かまだ解釋

がありませう。

○鼠骨 だけれども骨を齧つたり腕を齧つたりする事は亂暴だ。だから脛位ならば差支ない。

○若樹 何か向脛に喰ひ付くと云ふ方から來はしないか。

○共古 狼から來たか。

○若樹 さうかも知れません。

○鼠骨 やはり昔の勞力の根本は脛になつて居つたので……。

○若樹 やはり脛一本と云ひましたね、それから來たのでせう。併し此狂歌はそんなに無理は無い。

○鼠骨 是は通つて居る。

此彌次郎が口ずさみに、丹波の人も心とけて笑ひを催し、やうやくきけんをりて、打臥たるが、程なく一すいの夢さめて夜明ければ、勝手よりおこしに來り、手水つかふやいな、膳をすゆるに三人ともくひしまひ、たんばの人は高野と出ゆき、彌次郎喜多八は二三日逗留のつもりゆへ、爰

もとの名どころ一見せんとしたくする内、ばんとう出て、「コレハおはやうござります、今日はどつちやへぞおこしでござりますかいな、さよなら御案内のものおつれなさるがよござりませよ、彌」ホンニそれをおたのみ申やす、ばんとう「かしこまりました、コレ」佐兵次どの、ちよとごんせ、ト勝手よりあんないのおとこ、あなたがたがあん内たのむとおつしやつてじや、北「モシわらざうり二そく買ってもらひてへの、彌」イヤ一そくでいよ、おいらは京雪駄買ってきた、どふもわらぞうりでは、みす／＼田舎ものゝ上がた見物と見へて悪い、北「ナニ旅で見へもへちまもいるものか、左平次「お支度が悪いなら出かけましたよかいな、彌」サア／＼、はやくめへりやせう、ばんとう女ども「いておいでなされませ、トこれより三人打つれて此やどを出かけて、左平次「ナント斯いたしましよ、天王寺、生玉は、住吉御参詣のときにおまはりなされ、けふはこつちやの方へさんぜうわいな、ト長町とをりを北へひのうへより高津新地に出、まづ高津の御みやにまいる、こゝはむかし仁徳天皇の、たかきやにのほりてみれば、と詠じ給ひし舊地にして、今にはんじやういふばかりなし、社内にとうふでんがくのちや屋、さんけいの人をよぶこゑ、「サア／＼おはいりな

おはいりな、これへ／＼、お休な／＼、きしんじやうるりの木戸「今じやア／＼、紙屋徳兵衛、天満やおはん、かわらやばし白木屋の段、次は千本さくらの天川屋、辨慶の腹切、出がたり

は勸進相撲と言つて勸進でなくても錢を取ると同じ様に、高津生玉の中に有つたらしい。

○共古 其意味を違へて、幾らか寄進すると云ふ意味でせう。

○竹清 「たかづ」と假名が附いて居りませんか。

○鳶魚 私の本には「たかづ」と附いて居ります。

○竹清 「こをづ」と言つて居りますか。

○若樹 「かうづ」と書いてあります。

○竹清 狂歌はどうです。

○鳶魚 狂歌の「たかづ」はいけません。是は怪しからんね。

○若樹 是は跡から拵へた狂歌だ。

○鼠骨 高津は今處が違つて居る。

○竹清 元來、元高津と云ふ處があります。あの方ではありませんか。

○若樹 アレはいけない。

○共古 紙屋徳兵衛は出鱈目だね。

○鳶魚 是は縁合せもので五目淨瑠璃と言つたのがあります。

○鳶魚 「芝居役者の聲色、附拍木」と云ふのを一つ。
○華洲 是は此方と言ふカタクと云ふのであります。



載所「賑の波難」

○鳶魚 「大庄の鰻」はどうです。

○竹清 「いろは」としてありますが。

○共古 「いろは」と云ふのは後に出來た。大庄の方が前だ。大庄の方が古い。

○筑波 大庄の鰻は道頓堀の二ツ井と云ふ處に在つたけれど、今無いといふことです。

○竹清 ところが可笑しいのは、斯う云ふ事を目鏡屋が言つたのでなくて、是は彌次郎が洒落に書いたのだと思ふと、目鏡屋が斯んな事を言つたらしい。つまり目鏡を鼻へ寄せれば匂が寄る。若し耳へおつ付ければ聲が聞えるなど云ふことは一丸が言つたのぢやない。

全くさう云ふ事を口上屋が言つたと見えて茲に書いてあります。浪華の賑の目鏡屋の口上の御終

ひに、「淡路嶋より須磨の浦に通ふ千鳥の鳴く聲も耳へうつれば聞えます」

○若樹 是は「橋詰の非人」と書いて「みだれ」とあります。さう言つたものでせうか。

○竹清 「みだれ」と言つたと書いてあります。膝栗毛の中の何處かに在ります。京都の處ちやありませんか。

是より境内の石段を西におりたち、谷町どふりに出たるに、何とやら腹さみしくなりたれば、さいわいと居酒屋めきたるみせを見つけて立ちより、彌「モシなんぞありやすかね、さかやのていしゆ「ハイ、煎穀に鳥貝、鯡の昆布まきじやわいな、北「さつぱりわからねへ、そのうちうめへものならなんでもいゝから出してくんな、ていしゆ「ハイ、いつきにあぎよわいな、彌「イヤいつきんはいらぬ、三合ばかりたのみます、北「ときに尾籠ながら用たしにいつて来よふ、雪陣はどこだ、ヲ、あるぞく、トゑんさきよりむかふへまはりてせつちんへはいると、此内「あなたにはさけさかな出たるに、彌「サアひとつはじめなせへ、あんない左平次「マアあなたから、彌「そんならおさき、ヲト、ハ、ア、いゝ酒だぞ、コリヤきた八はやく出ねへか、酒がみんななくなる、はやく、トせりたてられ、北八せつちんのうちにてのみたくてこたへられず、北「ヲ、合點だ、今出るぞ、トうろたへて、戸をあけ、すつと出た所がふしぎなるかな、さかやの門にてはなし、そもくこ

のせつちんは二けんまへのせつちんにて、此さかやとらにすむ人の家と兩ほうにてつかふせつちんなればあなたにもあなたにも兩うちあるゆへ、北八うろたへてはいりしほうの戸をあけず、むかふの戸をあけ出たるゆへ、よそのうちなり、ゑんきよらしきぢい様ひとり何やら小さいくしてゐたりしが、北八を見て、きもをつぶし、目がねのうへからじろくくと見るに、北八もうろたふといつかうにがてんゆかず、まごつくうちかのいんきよ、「モシ、こなんは誰じやいな、

北「ハイ是はちがつたそふな、モシさかやへはどふまいりますへ、いんきよ「ハ、ア、よめたわいの、こなんはおもてのさかやのお客じやな、其椽側をひだりにとつてすぐにかんせ、北「ハイコリヤ行どまりだ、いんきよ「その戸をあけていかんせ、北「ハ、ア又もとのせつちんへはいらにやいかねへな、トせつちんの戸をあけにかゝると、内に、「エヘン、北「なむ三ほう、道がふさがつた、といふをきよて、せつちんの内より、彌「北八か、おつなほうへ出てゐるの、北「イヤ、彌次さんだな、おいらア戸まどひをしてとんだめに逢た、はやくそこをとふしてくんねへ、ト戸をあけにかゝる、彌次郎うちよりかけかねをかけ、彌「イヤもちつとまつてくれ、そしていけむこたア大毒だといふこつたから、ひとりで出てくる時節を待てるのだによつて、すこしひまがいる、ア、退屈だは、金にうらみでもかたろうか、北八そこで口三味線たのむそ、北「エ、とんだことを

いふ、はやく出なせへ、トそとから押どもあかず、内にはゆう／＼とどうじやうじのうた、
 「戀の手ならひ、つい見ならいて、誰に見しよとてべにかねつきよぞ、みんなぬしへの心中だ
 て、ヲ、うれし／＼、北氣のなけへなんのこつたな、彌「すへはかうじやになア、そふなるまでは
 とんといはずにすまそとへと、せいしさへいつわりか、腔かまことか、どふもならぬほど、あひ
 に来た、北「エ、コリヤはやく出ねへか／＼、トいへども内にはさつばりなんのおとさたまなきゆ
 へ、北八せつこみて、北「どふだ、もう出たか、エ、コリヤ、彌次さん／＼、トいふうらしばらく
 ム、ントンといふおとして、ふウつウリ、情氣せまいぞと、たしなんで、北「コレサ、どふするの
 だ、彌「もふとつくにいゝが、まちやれ、出つくしまでやらかさふ、北「エ、ばかなこといひなせ
 へ、トいひさま、むりに戸をあけて出るひやうし、戸はづれてたをれる、そのうへ北八ぐる
 め、どつざりとせつちんの戸はやぶれる、「アイタ、／＼、／＼、ていしゆはしりきたりて、「コリヤ何
 じやいな、せつちんの戸がやくたいじや、北「イヤ全體おめへがたア、こんなに兩頭の雪陣にして
 おくからわるい、ていしゆ「そじやて、ふたりつれもふて、せつちんへゆくといふことがあるも
 んかいな、あほらしい、彌「かんにしてくんせへ、わつちらがわるかつた、トひざがしらをさす
 り／＼、みせのかたへ出きたれば、左平「なんとなされたぞいな、北「うち身には酒がいゝと云ふこ

とだ、はやく一ぱいのましてくんせ、彌「こゝはつけがわるい、又さきへいつてのみやれ、トこの
 所のかんぢやうをして、さう／＼出かけるト、さかやのていしゆふせう／＼にあいさつませず、
 ことをいひながらふくれかへりてゐるを、ふたりはおかしくこゝをたちいづるとて

出ることのおそいはやいであらそひしこれ宇治川の雪陣かそも

○共古 面白い話だが、別段説明することは無いです。雪隠に二つ戸がある。江戸には決して無い
 事だけれども、上方には有つたかも知れない。總後架は有つたが、これは江戸には無い。

○若樹 「一升は入らぬ」一升は二合位に解釋してゐるが、茲は本當ですか。

○鳶魚 一升を一升と言ふのですかな。

○共古 一升は徳利一杯の事でせう。

○仙秀 一升と本字が振つてあります。

○共古 斤の字の間違だ。

○鳶魚 女郎屋では一斤と言ひます。

○二葉 普通の一斤は白丁一本でせう。

○鳶魚 酒ばかりぢやない。肴も一斤と言ひます。臺の事で、曲輪で言ふ時には此處の一斤とは違ひ

ます。

- 共古 「煎鼓」は貝の紐ちやありませんか。
- 若樹 鯨の身を干したものがありません。
- 共古 知りません。どうか願ひませう。
- 二葉 今日卯の花の事を煎鼓と言ひませう。
- 筑波 是は鯨ださうです。
- 竹清 やはり茲に在る「煎鼓」に鳥貝、鯛の昆布巻も東京には無かつたと見えてサツパリ分らない。
- 共古 是は下等の食物でせう。鯛の昆布巻——鯛の昆布巻ではない——それで分らない。
- 若樹 鳥貝は無いですか。
- 共古 鳥貝は彼方の方が盛んで、東京には無いでせう。
- 若樹 鮎などに使ふのは鳥貝でせうけれども、御一新前は無いでせう。
- 共古 それは有りませう。
- 若樹 有るならばそれを挙げた。
- 鼠骨 鳥貝は品川で採れないでせう。向うから来るのでせう。

- 華洲 無かつたでせう。
- 共古 黒い筋があります。そんなに矢鱈に喰へないものでせう。「いつきにあぎよわいな」の「いつき」を一斤と聞間違へたやうな……。
- 鳶魚 字が違ふ。
- 竹清 此奴は洒落でせう。一氣の事を一斤は入らないと洒落れたのでせう。これは一九が斯う云ふ雪隠を何處かで見ただのでせう。それから趣向したのでせう。
- 若樹 餘程面白く感じたので、妙な雪隠が有るものだと感じたのでせう。
- 仙秀 さう輕便でもないが、場所を取らなくて宜いな。
- 共古 居酒屋の隠宅の方なら宜いでせう。
- 鼠骨 併し共同便所は東國に澤山ある。
- 鳶魚 道成寺は娘道成寺の文句で「山づくし」と云ふのは「面白の四季のながめや、三國一の富士の山……東叡山の四季のかほばせ三笠山」と云ふ處までです。二三治の「紙屑籠」によると、これは二朱判吉兵衛の作を取入れた、嵌込物ださうです。
- 鼠骨 「役體じや」

○鳶魚 前に出た、ナカ／＼むづかしくて決定が附かない。

○鼠骨 「役體」だと思ひます。役體も無いはいけない。

○鳶魚 役體も無いと云ふ方が正しい言葉です。無いが商抜けたのでございませう。附の宜い悪いも前に出ました。それぢや狂歌を願ふだけだ。

○共古 宇治川の先陣、佐々木と梶原が先陣を争つた事へ掛けて、出ることのおそい早いで争ひし、これ宇治川の雪隠の遅い早いと云ふのと掛けて来ただけでせう。

○若樹 先陣と雪隠と掛けた。

○鳶魚 江戸兒は雪隠が早いに相違ない。早飯早糞早走り。

○共古 それは武士の句だ。江戸つ兒の句ぢやない、武士の嗜みです。小便一丁、糞八丁。

それより谷町とふりを安堂寺町より、番場の原に出はなしものしてたどりのくほどに、頓て天満橋にいたりける、まことや淀川の流れひろく行かふ舟どもこぎちがひ棹さしあひてうたひ、あるひは遊山舟に三味せんたいこはやしたてゆくの、橋の上より往來の人立とまりて、「ヤアイ／＼おどれらそないにたてくさつても、うちへいんだら借銭乞にせがまれて吼おろがな、ゑらいあほうじや、あほよ／＼、ふねの中より、なんじやい、そちがあほうじやわい、はし／＼何ぬかし

くさる、おどれらがあほうじや、ふねの中「チ、いしこやのあほうくらべせうかい、こちらにはよふかなやしよまいがな、はし／＼なんのおどれらにまけてゑいものかい、こちやあほうのゑらいのじや、トむせうにりきみかへる、此おとこのつれ「ハテゑいわいの、こなはんがゑらいあほうはみなしつておる、こつちやほつておかんせ、トひつぱりてつれてゆくと、あとより往來の人くち／＼に、「ヨウ／＼、あほうのゑらいの／＼、ハ、ハ、ハ、ハ、と此内彌次郎北八もくんじゆにおされながらこのはしにさしかゝり、橋のうへとふねとのけんくわいづくでもよく有やつとこゝろにおかしくうちすぐるとて

眞黒になつてはらたつけんくわとてあほよ／＼と烏めかする

それより此橋を北へおり、市の側どふりをゆくに、爰は青物の市たつ所にて、殊に繁昌の地なりける、

青ものゝ賣買ながら商人に尾ひれの見ゆる市の側まち

ほどなく天満宮の御社にいたるにまことや神徳の彭々たるは參詣の人どよみにあらはれ料理茶屋の赤前たれかどにまめき水茶屋揚弓場のかんばり聲往來の心をうごかせ、あるひは仙助の能狂言忠七が浮世物眞似其外山海の珍物見せもの芝居かるわざ曲馬乗境内に充滿たり。

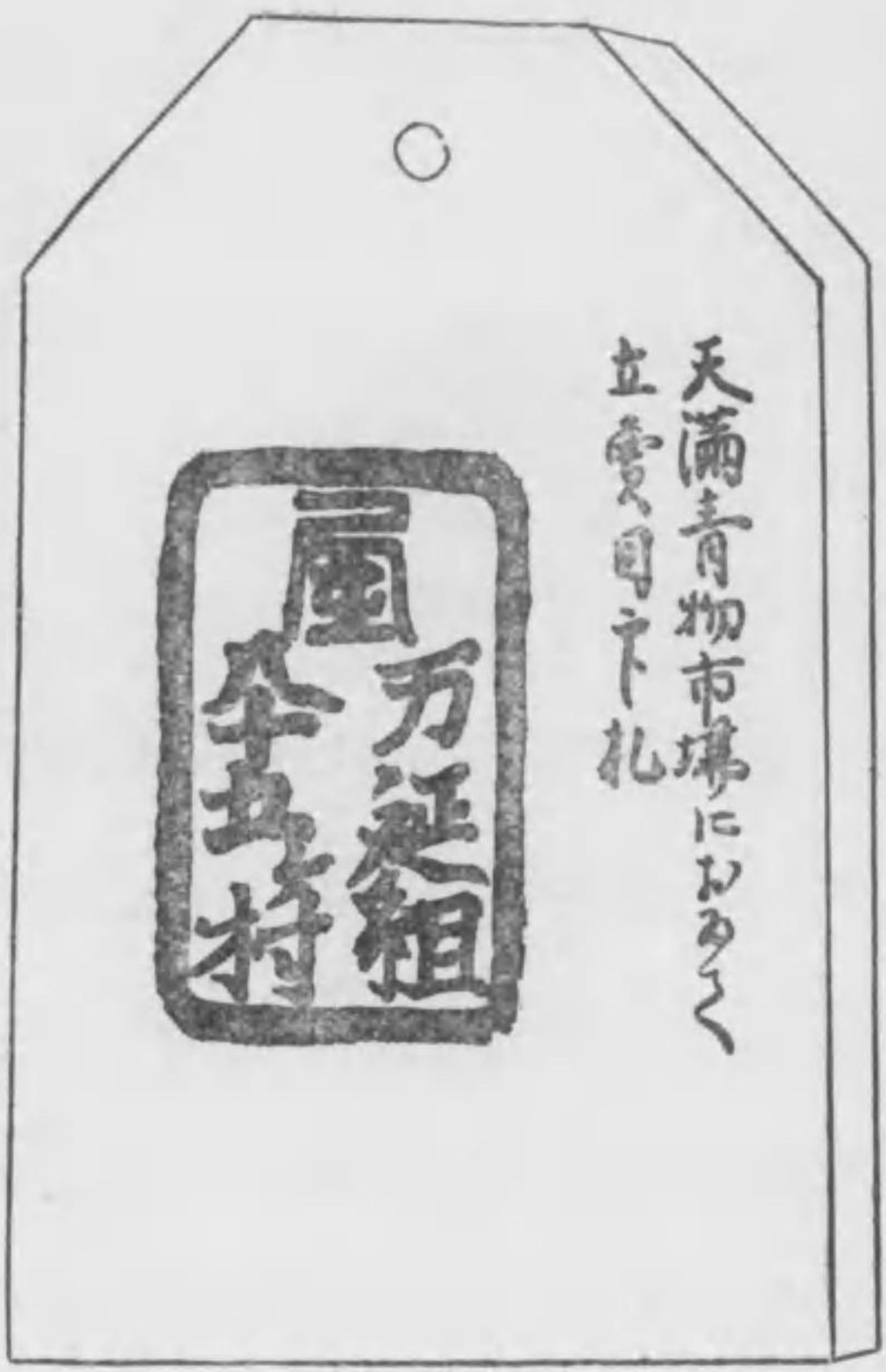


大坂天満宮繪圖

一八六
何ひとつ御不足もなき御繁昌まことに自由
自在天神

○竹清 それから谷町通を安堂寺町から番場の原へ
出て、話し乍ら段々行く程に聴て天満橋まで行つ
た。さうすると誠に淀川の流れ、天満橋の下を流
れる淀川の流れが廣くて、そこを行き合ふ船が漕
ぎ付けて棹を差合つて歌を唄ひ、或は遊山船に三
味線太鼓で囃し立つて行くのを橋の上から往來の
人が立止つて、ヤイノ、己れ等そんなに伊達を盡
しても家へ行つたら借金取にせがまれて吼顔を掻
く、東京でいへば泣面をするであらう、えらい阿
房即ち馬鹿だと言つて通掛りの者が羨ましがつて
か何か知らぬがさう言つて囃したから、船の中よ
り、何ちやいお前の方が阿房だ、と言つた。又橋

の上から、何を言ふ、お前の方が阿房だと言ふ。それから船の中の奴が「オ、いしこやの」生意氣
な事を云ふな、それぢや阿房競をしよう、此方に叶ふものか、お前の方が負けだと言ふ。橋の上で
は、何此方の方が阿房
のえらいのだと力ん
だ。すると此男の連の
者がハテ宜いぢやない
か、お前がえらい阿房
だといふ事は皆知つて
居る、抛つて置けと云
つて引張つて連れて行
く。と往來の人が口々
に、「ヨウ／＼阿房の
えらいのえらいの」と
云つた。日本一の馬鹿



天満青物市場立賣目下札

藤栗毛輪講

立てる者、それから取つて阿房よくと云ふやうに鳥の聲のやうに聞えるから、それで兩方へ掛けて唯云つたのでございませう。



天満青物市場立賣木鑑

一八八
と云ふ事でせう。彌次郎も北八も群集に押され乍ら此橋を通り掛つて、橋の上と船の中の喧嘩は能く有る奴だと可笑しく思つて打過ぐると「眞黒になつてはらたつ喧嘩とて、あほよあほよと鳥めかする」鳥めかすと云ふのは腹を立つて怒る者、次に眞黒になつて腹を

○若樹 鳥めが爲るでせう。

○竹清 さうですか、それから此橋を北へ渡つて市の側通を行くと、茲に立派な青物市があつて、大變繁昌である。そこで狂歌を咏んだ「青ものゝ賣買ながら商人に尾ひれの見ゆる市の側まち」

○華洲 それはむづかしい。

○竹清 是は青物の賣買であるのに、尾緒の見ゆると云ふのは、大さう立派に見えると云ふやうな意味で、青物であるのに魚屋の鰭のやうに見える、と洒落れて云つたのでせう。程なく天満宮の社に行つた。誠に神徳の彭々即ち盛なる處で、參詣の人が大勢來て居る。それから料理茶屋などがあつて、水茶屋だの揚弓場だの大分色々ある。芝居、輕業、曲馬一パイになつて居ると云ふので今度又狂歌「何ひとつ御不足もなき御繁昌、まことに自由自在天神」斯う云ふ風に此處へ來て何一つ不足の無い自由な天神様の御繁昌は、天満大自在天神だから、斯う自由自在と天神と掛けたのです。

○鳶魚 「忠七がうき世物まね」と云ふのは。

○竹清 そんなものがありました。

○鳶魚 忠七の方は見付かつた。

○若樹 其前の「赤前垂、門になまめき水茶屋揚弓場の肝張聲」

膝栗毛 輪講